DECADE ERESIA

大蒼空輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤＥＣＡＤＥ　ＥＲＥＳＩＡ

【Ｎコード】
Ｎ２０１４Ｏ

【作者名】
大蒼空輝

【あらすじ】
記憶を失った青年、門矢士。彼はある日突然現れた異形の襲来をきっかけに、いくつもの世界を渡る旅をすることになる。　※もしディケイドがオリジナル世界を旅していたら？　という仮定を独自の理論と視点で書きました。

第1話　異形の襲撃

パシャリ、と何気なく切られるシャッター音。しかし、青年が二眼レフを向ける緑の木々も空も、どこかよそよそしい。
景色だけなら気のせいとも思える。けれど、人を撮ろうとするとその人の表情は途端にぎこちなくなる。
それは、いつも口うるさい保護者にしてみれば許可を撮らないからだと一蹴されるのだろうが。
「士くん！」
青年が他に食指をくすぐる被写体を探していると、件の保護者が息を切らして駆け寄ってきた。
「何だ夏ミカンか」
「笑いのツボ！」
夏ミカンと呼ばれた女性は、二の句が告げられる前に親指を青年の首に突き立てた。
「ははっ、ははは！」
途端に青年は笑いが止まらなくなり、その場にくずおれた。
「何だじゃありません、またこんなところでサボってましたね！それと私はな・つ・み、です！」
青年を笑わせたこの女性の名前は、夏ミカン…ではなく、光夏海である。光写真館の経営者の孫娘だ。
対して夏海の注意を何度きいても気にも止めない青年こそ、夏海がその名を呼んだ士こと門矢士。
彼には光写真館に来る以前までの記憶がない。写真館の近くに倒れていたところを保護された。それからそこに居候し始めたのだが、まともに業務をこなしたことは一度もない。
夏海はそんな士をいつもたしなめているし、追い出そうとしたこともある。だが、写真館の経営者は何故か彼を気に入っているらしく、甲斐甲斐しく食事と宿とを提供している。常識的な感覚の持ち主な

ら、信じられないだろう。
ひとしきり笑いの波が去り、士はやれやれとでも言うように髪を掻きあげた。
「ほら、帰りますよ！」
それを見た夏海は士の腕を掴むなり、のしのしと競歩のように歩き出した。
「おい、引っ張るな！」
文句を言いながらも、夏海に引かれるままに歩かされる士。
周囲の通行人たちは、そんな二人をまたかと思いつつ微笑ましく見守っていた。

ところ変わって、こちらは光写真館。古き昭和を匂わせる内装を、老人がハタキで掃除している。この老人が夏海の祖父、栄次郎だ。よく客にコーヒーと自作のお菓子を振る舞うため、喫茶店と思われることも多々あるようだ。
バタン、とその写真館の扉が勢いよく開かれたかと思えば、士を引きずるような形で夏海が帰ってきた。
「二人とも、お帰り」
栄次郎は掃除の手を止めて二人を出迎えた。ようやく腕を放された士は、掴まれた場所をさすっていた。
「お祖父ちゃんからも強く言ってください。士くんたらまたサボってて」

「まあまあ…」
未だにぽんぽん怒る夏海をなだめ、栄次郎はコーヒーを差し出した。
一瞬夏海は動きを固めたものの、素直にカップを受け取り口をつけた。
その間に士は撮ってきた写真の現像に取りかかっていた。夏海が来るまでにかなり撮影していたのか、それなりに枚数がある。しかし、そのどれも全てがブレていたりピンぼけしていたりとまともに撮れていない。
士が写真館の業務をしていないのはこのせいでもあると言える、のかもしれない。
写真を撮る際に、士の腕は決して揺れたりしない。なのに何度撮ろうと何枚だろうと、士が写したものは一つ残らずこれらの写真のようになる。
ただ、栄次郎だけはどういうわけか士の撮る写真を気に入っている。多分恐らく、誰にも真似できないような芸術だと思っているのだろう。
「相変わらず腕が悪いんですね～…」
並べられた写真を覗き込み、夏海が率直に意見を述べた。
コーヒーブレイクが功を成し、先ほどよりは落ち着いていた。士の前では多少強引な夏海も、祖父の手にかかればまだまだ子供といったところか。
「俺の腕が悪いんじゃない、世界の方が俺に撮られたがっていないんだ」
また屁理屈を、と夏海は眉をしかめる。
士がなんでもできることは彼女も認めている。写真を撮ること以外に関しては。彼が終始こんな調子だからこそ、夏海もそんな態度になってしまうのだ。
と、その時。
「きゃっ！」
グラッ、と突発的な地震並みの揺れが起こり、夏海と栄次郎はよろ

けて壁やソファにぶつかった。
「今のは…」
「ただの地震じゃなさそうだ」
夏海の言葉を遮り、士は窓のレースカーテンを開いた。
窓の向こうには、燃え盛る炎に包まれた近隣の家が見え、更には怪物としか言いようのない異形の数々がいた。
蛾の触覚や羽根を持った、ステンドグラスのような皮膚をした怪物。
或いは魚類のような頭部を持ち、下半身に大きなウロコ状のものを纏う灰色の怪物。
また或いは、肩で炎の輪を燃やし腰に注連縄を身につけた狐頭の怪物。
他にも様々な怪物がうようよと歩き回っており、ただ事ではない雰囲気を察した夏海は不安な面持ちで士を見た。
「あの怪物たちは一体…！？」
「彼らは…ディケイドライバを狙ってきたんだ」
夏海の問いに答えたのは、意外にも栄次郎だった。
「士くん、これを」
驚く二人の前で士に差し出されたのは、白いカメラのような物体。
「これは…？」
「これがディケイドドライバだよ。でも、詳しい説明するのは後」
栄次郎は手短にそう告げると、ディケイドライバを腰に当てた。ディケイドライバはすぐにそれを感知し、ベルトを展開する。ベルトが完全に生成されると、一枚のカードを取り出し士に手渡した。
「これをディケイドライバに通してくれ」
士がカードをよく眺める前に、栄次郎は一冊の図鑑程の厚みがある箱をベルトの左側にセットした。
「こっちはライドブッカー。ここからカードを取り出せるから…」
「だいたいわかった、武器もこっちと同じだな」
受け取ったカードをひらひらと翻すと、栄次郎は無言で頷いた。それを受けて、士は指示通りにカードをディケイドライバに読み込ま

せた。
「ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ、ＤＥＣＥＡＤ！」
音声と共に、ベルトから何枚ものスクリーンのような光が現れ士に重なる。頭上からも、プレートが突き刺さるように頭部へ等間隔に収まった。それと時を同じくして、マゼンタを基本色に、黒・白の三色がボディを彩った。
「士君、時間稼ぎを頼むよ」
栄次郎は変身を遂げた士の肩を叩いた。彼がそう言うからには、何かこれから一仕事をしようとしているのだろう、と士は推測できた。士はパンパンと手を叩くと、写真館を飛び出し怪物の前に躍り出る。先ずは武器の性能を、と士が思考を巡らせると、ライドブッカーから一枚のカードが飛び出してきた。表面にはライドブッカーが剣のような形状になった絵柄が描かれている。
「ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ、ＳＬＡＳＨ！」
カードを通すと、ライドブッカーを手に取るまでに形状が剣へと変化した。その音声で魚人が士に気付き接近してくる。それを軽くいなしながら振り向き様に一閃。
「ぐっ！」
魚人は剣をまともに受けたが、踏み込みが甘かったのか深いダメージには及んでいない。
「くらえ！」
魚人が数本に及ぶ触手を伸ばす。士はそれを全て切り落とし、もう一押しと太刀を浴びせた。
「がぁぁっ！」
魚人の体から微量の青い炎が吹き出した。そのままとどめを刺そうとした士に、蛾の怪人が割り込んでくる。その手には怪人と同じ色の剣があった。
「人間如きが舐めるな！」
しばし鍔競り合いになり、無防備になった士の背後から魚人が反撃に出てくる。

「くうっ…」
崩された体勢を立て直しつつ、士は間合いを取り直す。
士はどうしてか、戦い方をなんとなく知っている気がした。
ライドブッカーの使い方は少しもすれば慣れるだろう。しかし、どう戦えば有利に事を運べるかという戦略に関しては経験が物を言う。その経験の記憶がないにも関わらず、体は自然と動いていた。
「悪いが、手っ取り早く終わらせてもらう！」
蛾の怪人を逆袈裟切りにし、武器を上段まで弾く。少し仰け反ったところに一蹴を浴びせ、怪人を数歩先へ飛ばす。横槍に再び魚人の触手が伸びてきたが、士を守る装甲はビクともしない。
「はっ！」
先に付けた傷に交差するように斬りつけた剣は、魚人の体を真っ二つに裂いた。魚人は全身から青い炎を吹き出し、よろよろと最後の悪あがきを見せようとする。しかし、まもなくして魚人の肉体は灰と崩れさっていった。
「さて、次は…」
士が蛾の怪人を蹴飛ばした方に向き直ると、既にその姿はなかった。まだ近くにいるとみて周囲を見回すが、風に吹かれる灰や瓦礫しかない。
尚も怪人を探す士の目に止まったのは、静かに舞い降りる光の粉。それが装甲に触れた途端、激しく火花を散らした。
「うあぁっ！」
危うくライドブッカーを落としかけ、士は軒下に避難した。見上げた上空では、蛾の怪人が優雅に舞っていた。今のライドブッカーの形状では届かない。
そんな士の思考を読んだかのように、またもカードが飛び出す。今度はライドブッカーが銃になっていた。士はそれを迷うことなくベルトに読み込ませた。
「ＡＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ、ＢＬＡＳＴ！」
変形したライドブッカーの引き金に指をかければ、赤い閃光が駆け

抜けた。怪人は慌てて一撃目をかわしたが、次の閃光は狙い違わず怪人の羽根を貫く。

追い討ちをかけに、明らかに高度が落ちた怪人へ更に一発二発。体のあちこちに空洞を空けられた怪人は、墜落しながらガラスの破片のように飛び散った。

「こんなものか」

静けさが残る戦場の跡で、士は武器を収める。だが、その判断をするにはまだ早すぎた。

どこからともなく現れた、巨大な炎の塊。まるで生き物のようにうねりながら、真っ直ぐ士に襲いかかってきた。

「ぐあああっ！」

先の二体より遥かに高い攻撃力を持ったそれは、この装甲では耐えきれるはずもなく。士は残り火に体を焼かれながら、どうと地面に倒れた。

痛みを堪えながら、炎を発した正体を見る。それは怪人の集団の中にいた、あの狐頭の怪人だった。

「士君、もう準備はできているよ！　早く写真館に！」

栄次郎の焦燥に満ちた叫び声に、士はどうにか立ち上がった。

炎の強力さから考えても、まともに太刀打ちできる手段がないことは彼にもわかっていた。悔しいが、今は逃げるしかない。

狐頭の視界を撹乱すべく、デタラメに閃光を放つ。巻き起こった煙が消えてしまわないうちに、士は早足に写真館へ駆け込んだ。写真館の扉が閉められた瞬間、そこ一帯に灰色のオーロラのようなものが広がっていった。

オーロラが晴れた頃には、そこにあった写真館は影も形も存在していなかった。残されていたのは、他の民家に比べて明らかに無傷である今風の喫茶店だけだった。

第1話　異形の襲撃（後書き）

さて、第一話はいかがだったでしょうか？

原典世界を舞台にするにあたり、士がディケイドライバや怪人たちを知らないなどＴＶ版からの変更点が多々出てきます。
キャラクター性が失われる程の変更点はないようにしたいとは思っていますので、どうか暖かく見守っていて下さい。

第2話　次元の旅人

窓の外は一面の黒と瞬く星々。さながら宇宙空間のような様相に、士は目を見張った。
よく見れば、写真の一部を切り出したようにいくつも並んでいる地球そっくりの惑星までである。
最も一番不思議なのは、何事もなくこの空間に浮かぶ光写真館だろうか。
「驚かせてすまなかったね、士君」
ディケイドの姿を解いて惚けていた士に、栄次郎が申し訳なさそうに眉をひそめて言った。その腕にはコーヒーとクッキーの乗ったトレイを抱えている。
何時の間に用意したのだろうか。
「ちょっとここに座って。話が長くなるだろうから」
どうみてもそれは明らかに長話のための用意だろう、と突っ込みたくなる士だったが、大人しく客用のソファに腰掛けた。いつの間にか夏海もやってきて、栄次郎の隣に並んだ。
「先ずは…あの怪人たちについて話そうか。どちらにしても、ディケイドライバのことを説明するには必要だからね」
栄次郎の眼差しはどこか悲しげにも見えた。夏海が何か口を挟みかけようとしたが、彼が首を横に振ったのを見て一旦口をつぐんだ。
「あの怪人たちはあの世界の存在ではないんだ。別の次元からやってきたんだよ」
「別の次元だと？」
いきなり話が飛躍したことに士は若干戸惑いつつ、先を促した。
「そう。多次元宇宙論という理論では、宇宙は一つではなくいくつもの宇宙があるとされている。彼らの世界もそのうちの一つだと思えばいい」そう言って栄次郎はクッキーを二枚取った。何も混ぜていないプレーンクッキーと、レーズンクッキーだ。それを平行に持

って示して見せた。
「こっちのプレーンがさっきまでいた世界だとする。で、こっちのレーズンが彼らの世界。二つ世界の間にあるのが今いる空間だ。これ以外にも沢山次元が並んでいるんだけど、今は省略しよう」
「要するにパラレルワールドってやつか」
分かり易く示されたため、士はやっと思い当たる単語を口にする。
「厳密には少し違うらしいんだけど…私もそれについてはあまり詳しくないんだ。でも、私たちが行くのは正にパラレルワールドみたいに同じ地球がある次元だから、認識としては間違っていないよ」
そのままクッキーを戻すのかと思えば、栄次郎は士に手渡してきた。せっかくだから食べてくれ、ということだと受け取り、遠慮なくそれを頬張った。
「本題に戻ろうか。彼らがあの世界にやってきたのは、先に言ったようにディケイドライバを狙ってきたからだ。元々ディケイドライバは彼らのいた世界のものだからね」
「だからやつらは自分たちがディケイドライバを持つのが当然の権利だと思っているわけか」
よくある話だ、と率直に述べた士に、栄次郎は神妙な面持ちで頷いた。
「あの怪人たちからディケイドライバを守る場所としては、世界を自在に渡れる光写真館が一番適していたんです。彼らの方も、私たち程自由ではなくても次元を渡る手段を持っていて。だから私たちは、数年前まであちこち移動して暮らしていました」
栄次郎の話を引き継ぐ形で、ようやく夏海が話に加わった。
「あの世界に着いてからはまるきり襲撃が途絶えていたんですが…。新しい動きがあったのかもしれません」
そう言うなり、夏海は自分の祖父と顔を見合わせた。栄次郎はそれを受け、どこからともなく何らかの資料を取り出した。
「夏海が見たことない怪人もいたっていうから、こっちで調べてみたけど…。彼らに関しては、戦力増強に今まで行ってなかった世界

から怪人を連れてきたと考えるのが自然だね」
「やっぱり…そうなんですね」
栄次郎の報告を聞き、夏海は見るからに気を落とした。
ディケイドライバを守るために、かなり長いこと戦っているのだろう。士にはそれがどんな戦いだったのかがわからなくとも、それだけは察することができた。
「今のディケイドライバは本来の力を１００％引き出せない。彼らの思う壺になるかもしれないが…その力を取り戻す必要があるね」
「これにはまだそんな力があったのか？」
栄次郎の呟きに、滅多に驚かない士も少しばかり目を見張った。
「ああ、今度はディケイドライバの話もしないとね。ディケイドライバに備わっている機能は、士君が使った機能だけじゃない。ちょっとライドブッカーを」
言われるままに、士はライドブッカーを手渡す。栄次郎はそれを受け取るなり、中から大量のカードを取り出した。
「ライドブッカーにはこんな風に際限なく物体を収容し、無限にエネルギーを取り出せるクラインの壺と呼ばれる空間がある。こういうところも彼らがディケイドライバを欲する理由なんだ」
栄次郎は出したカードを種類別にテーブルに並べた。
士が戦いで使用したＳＬＡＳＨ、ＢＬＡＳＴ。それにまだ使用していない、ディケイドの紋章が描かれたカードとディケイドの残像が数体描かれたカード。
そして、全く何も描かれていないカードの山。
「このカードがそうか」
士はブランクカードを指し示した。
栄次郎は「その通り！」と満足げな笑みを浮かべた。
「このカードは仮面ライダーと呼ばれる存在の力を宿すことができるんだ。ディケイドの機能の大半を担っていると言っていい」
「仮面ライダー？」
また士の知らない事柄が飛び出して来たため、自分の中で纏めるの

に苦労を要するようになってきた。士は少し冷めたコーヒーを口にして、一度一息入れた。

「仮面ライダーはディケイドのように怪人たちと戦う手段を持っている存在だ。厳密に言えばそれだけの存在ではないんだけれど…」

栄次郎は何も描かれていないカードの山を崩して広げた。

「怪人たちが複数の世界に存在するように、それぞれの世界でそれぞれの怪人に対抗できるライダーがいる。それこそこのカードの数以上にね」

「仮面ライダーのことはまた後で詳しく聞こう。結局はこれからどうするかって話だろう？」

士はそこで栄次郎の話を切った。

士が把握すべきことは、何も怪人やディケイドライバについてだけではない。それは理解していたのか、栄次郎は再び話題を戻すべく口を開いた。

「彼らが私たちでは太刀打ち出来ない怪人を投入する前に、その怪人に対抗できる手段を持つライダーの力を手に入れること。それが今のところの目的になる」

改めて結論を聞かされ、やはりそうなるかと士は内心独りごちる。

わけのわからないうちに巻き込まれた感は否めなかったのだが、もしかしたら世界を渡る内に自分の記憶に繋がる世界に行けるかもしれない。そんな打算が胸中をよぎった。

「…で、今は仮面ライダーのいる世界に向かうための道にいるんだよな？」

確認の意味を込めて、今士たちがいる空間について問う。

「それはそうなんだけど…」

それに肯定を返したのは、またも栄次郎だった。

しかし、その後に気になる言い回しを含んでいて。しばらくうんうん唸ったかと思えば、苦々しい表情に変わった。

「実は、私にもどこの世界に着くのかわからないんだ」

一瞬の沈黙。

「ええーっ！？」
夏海もこれは予想外だったのか、素っ頓狂にも大声で叫んだ。士は嫌に生ぬるい汗を肌に感じた。
「おい爺さん、それで大丈夫なんだろうな」
「大丈夫。そこに背景ロールがかかってるのが見えるだろう？」
栄次郎が視線を送った先には、確かに背景ロールがかかっていた。普通背景ロールは白や青といった単色なのだが、それは何故か上から何かで塗りつぶされたかのようにところどころ黒く汚れていた。かろうじてだが、塗り残しを切り裂くような赤と鮮やかな青が見える。
「あそこに掛けてある背景ロールは描かれている絵に関係の深い世界に写真館を引き寄せる役割がある。怪人たちと戦う存在がいる世界に関わりのある背景ロールだけにしてあるから、怪人しかいないなんて世界には行かないはずだよ」
そこだけは確実だという自信があるのか、栄次郎は掲げた拳にグッと力を入れた。そんなところに自信があっても、ちゃんと辿り着けるかどうか怪しいものだ。
「それにしたって、どうしてあんなに汚れているんですか？」
夏海の尤もな疑問は士も同じく抱いていた。
画材道具をぶちまけたにしては、汚れの範囲が広すぎる。もっと液体状のものでなければ、広範囲にシミができるわけがない。
「それが…」
栄次郎は非常に言いにくそうにして乾いた笑いを零した。
その様子から、士はある一つの答えに行き着いた。
「大方、コーヒーでも零したんだろ」
「えっ！　どうしてわかったんだい？」
士は驚く栄次郎の上着の裾を指差した。
そこには背景ロールを塗りつぶした色と全く同じ、黒くて酷いシミができあがっていた。
「あーっ！」

今のいままで気付いていなかったらしく、栄次郎は上着の裾を掴んで凝視した。

「緊急事態だっていうのに、呑気にコーヒーなんて沸かしていたからだろう…」

「お祖父ちゃんったら…」

士のごもっともな意見に同意したように、夏海まで半ばあきれ気味だ。彼女もまさか移動しようとしている傍らでそんなことをしていたとは思わなかったのだろう。

「一張羅だったのに…」と落胆たっぷりに呟く栄次郎の横で、もっと心配すべきことがあるんじゃないか、と視線を送る士だった。

第3話　手がかりを探して

垂れ下がる背景ロールを改めて見ても、シミが絵を塗りつぶしてしまっていることに変わりはなかった。元々の背景もほぼ闇色だったらしく、シミのない部分は画材特有の黒で塗られている。これではヒントが少なすぎて、闇に映える赤の正体はわかりそうにない。

それに、背景ロールの周りも酷い有り様だ。零したコーヒーや壊れた入れ物の破片はなかったが、撮影用の椅子が倒れたままだ。こんな状態にあっても辿り着けるとは栄次郎の談だが、士はいまいち信用できないでいた。

その栄次郎はというと、上着を持って洗面台に立っていた。コーヒーの飛沫が彼にも及んでいたのは、当然といえば当然だろう。

「士君、次の世界に着きましたよ！」

夏海に手招きされ、士も彼女の立つ窓際に近寄る。部屋の中央からでもあの宇宙空間のような場所から変わったことはわかったが、どんな世界かは窓際まで行かねば見えなかったからだ。

街並みは確かに先ほどいた世界とは変化していた。文明レベルこそ変わらないようだが、都心というに相応しい高層ビルもいくつか見られる。

「シミの弊害は転移に時間がかかったくらいみたいです。良かった…」

夏海は心底安心しきった笑顔を見せた。

「どうだかな。単に都心に移っただけにも見えるぞ」

「もう、どうしてそういうことを言うんですか！」

ひねくれたことを言う士に、夏海はめくじらを立てた。

「確かに描かれた絵に近いものがあれば同じ世界に行き着くこともありますよ。心配しなくても大丈夫です、外に出てみればわかることですから」

夏海はまたもやがっちりと士の腕を掴み、連行するかのような状態

で引っ張った。
「ああ、ちょっと待ってくれ」
それに待ったをかけたのは栄次郎だった。夏海は一旦歩みを止め、祖父に振り返る。士の方も、何か重要な話なのかと立ち止まった。
「ちょっと頑張ったんだけどやっぱり落ちなくてねぇ…ついでにクリーニングに出してもらえるかい？」
そう言って栄次郎はまだシミの残る湿った上着を差し出した。
少し身構えていた士は、拍子抜けしたあまりにガクッとよろけた。士もマイペースなために人のことは言えないが、この老人もかなりマイペースだ。
「わかりました。でも本当についでですよ？　さ、士君。いきましょう！」
「あ、ああ…」
また掴まれるのは御免だと思ったのか、士は珍しく素直に同意した。夏海はそれに気を良くしたのか、先立って扉をくぐり抜けた士に微笑みかけてから後に続いた。
そうして二人が写真館を後にしてから、栄次郎は思い出したようにポンと自分の掌を打った。
「そうだ、あの世界に助けを送るように連絡しないと…」
栄次郎はせかせかと奥の方に向かった。
誰もいなくなった撮影室は、途端に静けさを増す。それを見計らったかのように、背景ロールからは少しずつ黒いシミが空気中へと抜け出し始めていた。

「先ずはこの辺りの情報を調べましょう。クリーニング店はきっとすぐに見つかるでしょうし」
街並みを二眼レフに収める士にそう提案する夏海だが、当の本人は我関せずといった様子だ。けれど夏海は仕方なさそうに眉を寄せるだけに留めた。
いつも士をたしなめている夏海だが、彼の写真にかける情熱は本物だと信じている。大概のことを面倒だと放り投げてしまう彼が、写真を撮ることだけはやめないからだ。
そんな風に士を見つめる夏海の後ろから、一つの人影が走ってくる。しかしその人影は前に夏海がいることに気付いていないのか、真っ直ぐに突っ込んでいき。
「きゃっ！」
「わっ！」
どんっ、と体全体でぶつかった二人は、バランスを崩して倒れてしまった。
「す、すいません。急いでいたものですから…」
夏海とぶつかったのは、人の良さそうな青年。
「いえ、こちらこそ」
少し気弱な雰囲気も見て取れる青年に、夏海も普段通り丁寧に対応した。
それから祖父の上着の無事を確認しようと手元を見たが、そこには何も存在しておらず。近くを見回してみれば、上着はすぐ側の地面に落ちていた。
「ああっ、すみません！　しかもこんなに汚れちゃって…」
青年は拾い上げた上着があまりに汚れていたために、慌てて二度目の謝罪をする。
「いいえ、これはコーヒーで汚れてしまったもので…あなたのせいじゃありません」

夏海は青年を安心させようと、落とす前から汚れていたものだと告げた。しかし、青年は納得していないらしかった。
「それなら尚更放っておけないですよ。俺は菊池啓太郎。クリーニング店やってるから、お詫びに洗わせてもらえない？」
「そうなんですか？　じゃあ、お願いします」
啓太郎と名乗った青年の簡単な自己紹介を聞き、夏海は調度いいとばかりにクリーニングを依頼する。
「士くーん、先に行っちゃいますよー！」
未だシャッターを切る士に、夏海は大声で移動を伝えた。士は邪魔が入ったとばかりのしかめっ面になるも、すぐにそれは緊張の色に染まる。
「お前ら伏せろ！」
「えっ？」
夏海がその意味を理解する前に、二人の背後に巨大な何かが立ちふさがった。そして響き渡った金属音に、二人が振り返る。
「これは…！」
「サイドバッシャー！？」
夏海が正体を問いただす前に、啓太郎が明かしてくれた。
機械人形と呼んでも差し支えないそれは、二人に突き立てられようとした触手を全身で防いでいた。触手を放った主は、先にいた世界でも見た灰色の怪人。
「お前たちは下がっていろ！」
そしてサイドバッシャーに遅れること数秒。黒と銀のボディのあちこちに黄色いラインを走らせる、Ｘの文字を思わせる仮面の男が現れた。
「草加君！」
啓太郎は少々の焦りを残しつつも、いくらかホッとした表情を見せた。
「カイザか。ちょうど回収しようと思っていたところだ」
怪人は標的を草加と呼ばれた男、カイザに変えた。カイザの方は腰

の左側から取ったカメラのようなものを手に、怪人と対峙する。
士はそこでカイザの腰にベルトがあることに気付き、ひとまず避難してきた二人と合流した。
「いきなりビンゴを当てたな、良くやったぞ夏ミカン」
「ええ、そうみたいですね」
偶然にしても幸先の良い出会いだと夏海も認め、同意を返してきた。
「二人共何言ってるの、人を襲うオルフェノクに遭遇するなんて運が悪い方だよ！」
対する啓太郎は二人が至極冷静なことに戸惑いを隠せずにいた。
二人の事情を知らない彼にとっては、人間を襲うような怪人を恐がる方が普通の反応だと思うだろう。しかし、まだ士は二回目だとしてもこの手のトラブルに慣れていた夏海にとっては、こんな状況など驚くことではない。
とにかく、夏海は啓太郎に軽く事情を説明することにした。
「実は私たち、彼のような仮面ライダーを探していたんです。だからちょうど良いっていうのは仮面ライダーの方ですよ」
「かめん…ライダー？」
が、啓太郎も士と同じく、仮面ライダーという単語を聞くのは初めてらしい。いまいちピンときていないオウム返しをされてしまった。
「おい、話は後にしておけ。もう少し奥に隠れてろ」
緊張感のないやりとりをしている二人に、士の注意が飛んだ。彼はディケイドライバを片手にサイドバッシャーの陰から戦いを見守っていた。
カイザとオルフェノクの戦いは、圧倒的にカイザの有利が目立っていた。
巧みにオルフェノクの攻撃をかわし、確実に相手の体に拳を叩き込んでいくカイザ。その姿はまさに、戦い慣れた人間だけが成せるものだ。
「ぐうぅっ…くそぉ！」
追い詰められていくオルフェノクは闇雲に触手を打つが、益々隙を

作るだけに過ぎなかった。カイザはベルト部分にある携帯のＥＮＴＥＲキーを押し、触手をかいくぐってオルフェノクの懐に入り込む。

「ＥＸＣＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ…」

恐らくはバリトン程の音声と共に、拳に装着されたユニットに黄色い光が集まった。カイザはその光を纏ったまま、真っ直ぐにオルフェノクの胸を殴りつけた。

「ぐあああっ！」

オルフェノクは衝撃により数メートル後ろに飛んでいきながら、四方に肉体を爆散させた。そしてパラパラと死んだオルフェノクの灰が舞い落ちる中、カイザはベルトに手をかけた。黄色のラインがフェードアウトすると共に、カイザの姿が人間へと戻る。

現れた一人の青年―草加はポケットからウエットティッシュを取り出し、自分の手をかなり丁寧に拭いた。それから何かのロゴマークが入ったアタッシュケースを開き、取り外したベルトを中にしまい込んだ。

「草加君、ありがとう。助かったよ」

啓太郎は礼を交えつつ草加に走り寄ったが、彼の方は一言も発さずにサイドバッシャーのスイッチらしきものを押した。するとサイドバッシャーはあっという間に一台のサイドカー付きバイクに変わってしまった。

「お前はあまり出かけるな」

やっとごく短い応えを返したかと思えば、草加はサイドバッシャーに乗り込んで先に出発してしまった。

「何だあいつは…」

「気にしないで。草加君、今はちょっと神経過敏なんだ」

草加への不信感を露わにした士に、啓太郎は申し訳なさそうに代弁した。自分が無礼を働いたわけでもないのに、そうした気を使えることからも彼の人間性の良さを感じられる。

「…何かあったんですか？」

深い事情がありそうなだけに、夏海は遠慮がちに理由を尋ねた。彼

のために、何かできないかと思ったのだろう。
「うん…草加君の大切な人がオルフェノクに襲われたばかりだから」
啓太郎は少しばかり悩んだ後、その人を匿名にしながらも応えた。
夏海は「そうですか…」と言ったきり、それ以上追求することはなかった。
「ああ、その人は無事だよ。ただ…」
夏海の沈み込みぶりに、慌てて情報を付け足す啓太郎。だがまだ問題を抱えているのか、最後に言葉を濁した。
「いや、それよりも先ずはたっくんだ。たっくん、一人で出かけたきり戻ってこないんだ。連絡先、教えてもらえる？」
啓太郎は受け取った栄次郎の上着を大切に抱え、夏海に連絡先を尋ねた。夏海はコクリと頷き、適当なメモ用紙に写真館の電話番号を書いて渡す。啓太郎はそのメモをポケットに詰め込むなり、止めてあった黒い軽自動車に向かって走り出した。
「あ、待って下さい！」
「出来上がったら連絡しますから！」
夏海の制止を中途半端なところで切り、啓太郎はそのままどこかへと発進してしまった。
伸ばされた手は空を掻くだけとなり、彼女は呆然と立ち尽くした。
夏海のことだ、お節介にも手伝うと申し出るつもりだったに違いない、と士はため息を吐いた。
「全くお前はお人好しだな。どうせまた後で会うことになるだろ」
栄次郎の上着を預けたからには、どう転んだとしても店に行く必要が出てくる。士としては、その時にまた仮面ライダーのことがわかればいいと考えていた。
―それに。
「それにだ。この世界の仮面ライダーやオルフェノクのことを調べるなら、少し見当がついている」「それって本当なんですか！？」
夏海はあからさまに意外だと言わんばかりの驚きようだった。夏海の食いつきの良さに気を良くした士は、「ああ」と肯定を返しなが

ら腕を組んだ。
「スマートブレイン…恐らくはあのベルトを開発した会社だ」

第4話　スマートブレイン

他の高層ビルの追随を許さない、とばかりに大きなビル。それがスマートブレイン本社の全景だった。

士がスマートブレインの名をいつ知ったかというと、何のことはない。そのスマートブレインの名は、草加がベルトをしまい込んだあのアタッシュケースで自己主張していたからだ。しかもサイドバッシャーにまでそのロゴが踊っていたとなれば、ベルトもスマートブレイン製だろうと推察するに十分な情報だった。

とはいえ、名前がわかっていても全容はわからないわけで。士たちは道行く人にスマートブレインのことを尋ねてみることにした。ベルトやサイドバッシャーのような兵器レベルのものを開発できる会社だ、それなりの規模があるだろうし知らない人間もそうそういないはずだ。そう踏んだ士の判断は果たして正しかったのだろうか。

「士君、この状況って一体どうしたら…？」

夏海は側にいる青年に聞かれぬよう、小声で士に耳打ちする。

確かに利害は一致した。片やスマートブレインの情報が欲しい士たち。片やスマートブレインの開発したベルトの真偽を確かめたい青年―その名を海東大樹と言った。

だからと言って、まさかそのスマートブレイン本社内に潜入させられようとは。それも清掃会社の社員になりすまして。

「ここまで来て今更引けないだろ」

士は若干諦めムードだ。社内に入り込んだ以上、最後までやり遂げるしかないと。

海東と出会ったのは全くの偶然、だったと思いたい。なんだか填められたような気がしなくもなかったからだ。

それは、数時間前のこと―。

「ふうん…スマートブレインのこと、知りたいんだ」
最初に話しかけられた時には興味がないといった風だった海東は、士たちの話を聞くなり顔色を変えた。
「教えても良いけど…僕に協力してもらえるかな？」
「言っておくが、くだらないことには付き合えんぞ」
条件を提示されても尊大な態度を変えない士だったが、海東は逆に士を気に入ったらしい。にっこりと裏の読めない笑顔を浮かべて、人差し指を振った。
「じゃあ…少しだけ良いことを教えてあげよう。スマートブレインが開発したベルトは全部で三つ存在するんだ。それらはファイズ、カイザ、デルタと呼ばれている」
「何…？」
士の眉がピクリと動いたのを見るにつけ、海東はご機嫌な様子で話を続けた。
「その三つ以外に、どうやら最近新しいベルトが開発されたらしくてね。でも、詳しいことは全然掴めていないんだ」
そこで海東が取り出したものは、何枚かに分かれた見取り図。―それもスマートブレインの。
「だから直接スマートブレインに乗り込んで、そのベルトがあるかどうか調べようと思ってるんだ。協力して欲しいってのはそのことさ」
海東は片手を銃に見立て、空を撃ち抜く真似をした。
よく見れば、見取り図には彼の書き込んだであろう最短ルートが記

されている。準備は万全なまでに整えていることが伺えた。
「いいだろう…ただし、それなりに情報はもらうぞ」
士は海東の条件を飲むことにした。彼らとしては、海東からだけでなくスマートブレインからも情報が欲しかった。断る理由はなかった、というわけだ。
―そして、現在の状況に至る。
「これ、どう考えても不法侵入ですよね…」
夏海は罪悪感に苛まれているらしかった。こんなことなら、彼女には写真館に戻ってもらえば良かっただろうか。
「それで海東、オルフェノクってのは一体何なんだ？」
夏海のことはさておいて、士はまず知っておくべきだろうこと―オルフェノクについて尋ねた。
「オルフェノクか。分かり易く例えるなら、ゾンビだね。彼らは元々は人間なんだ」
社員が通りかかろうとしたために、海東は掃除するフリをしながら答えた。士たちは驚きつつも、海東にあわせて手を動かした。
士が海東の説明を聞く傍ら、夏海はふと吹き抜けを挟んだ反対側で男女二人かが連れ立ってどこかに向かうところを目撃した。それだけなら追いかけようとは思わなかったろう。その二人が、こんなことを話していなければ。
「村上さんもわからないですね。どうして彼をラッキークローバーに入れたがるのやら」
「そうね…。あれ以来、メンバーとしての活動は全くしていないもの」
（ラッキークローバー？）
断片的に聞こえた情報だけでは、何のことだかわからなかった。ここは二人が何の話をしているのか、確かめなければならないだろう。
夏海はそっと二人から離れ、反対側へと渡った。
「彼の性格からして、そう簡単にこちらの要求は呑まない。どうこちらに引き込むつもりなんでしょうか」

「ここで論じていても仕方ないわ。村上さんのことだから、何か考えがあるのでしょう」
女性は男性より歩みを早め、もう話は終わりと言外に示しているかに見えた。夏海がもうこれ以上は聞き出せないかと去ろうとした時、女性は立ち止まって冷たい威圧感を放った。
「それでも従わないようなら…私たちが始末すればいいわ」
女性の穏やかではない言葉に、夏海は思わず声をあげそうになった。

「おい、夏ミカン？」
急に夏海からの反応がなくなったことを不信に思い、士は彼女の名を呼ぶ。いると思いこんでいたその姿は、士の側にはいなかった。
「あのバカ、勝手にいなくなりやがって…」
「いない人間に構ってる暇はないよ。さあ、この奥のはずだ…」海東が招くままに、士も奥へと進む。先を阻むものは、一枚の扉だけだ。何の変哲もないが、鍵も取っ手も見当たらない。
海東はしばらく考え込み、それからぺたぺたとその扉を触りだした。かと思えば、扉はすんなりと道を開いた。
それまで迷いなく歩いていた海東が、唐突に足を止める。何かあったのかと覗き込もうとした士の目に飛び込んできたのは、ちょうど人からオルフェノクへと変じるところだった数人の研究員の姿―。
「ここにいないってことはないと思ったけど…」
「ちっ、結局こうなるのか。変身！」

士はすかさずディケイドライバを装着した。
「ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ、ＤＥＣＡＤＥ！」
そしてオルフェノクたちが飛びかかってくる前にディケイドのカードを読み込ませ、放たれた光で変身の隙を作った。
「海東……！」
変身直後、士は戦う手段はあるのかと問おうとした。が、その相手の姿はいつの間にやら消え失せていた。
「逃げやがったなあいつ！」
ディケイドはやり場のない怒りを一番近くにいたオルフェノクにぶつけると、もっと広く戦いやすい場所を求めて引き返した。
こうなってくると、夏海の方もオルフェノクに遭遇する可能性がある。あまり騒ぎが大きくならないうちに合流しなければ。
「こいつを食らえ！」
ディケイドはライドブッカーをガンモードに切り替え、追いかけてくるオルフェノク目掛けて連射する。威力は足止め程度のものだが、今は倒す暇も惜しい。
「士君！　どこですか、士君！」
夏海が叫ぶようにして呼ぶ声が聞こえた。戦いの音を聞きつけて、こちらを探しにきたようだ。
「夏海っ！」
ディケイドは声を頼りに、右に左にと通路を駆け抜けていく。やがて夏海の呼び声がはっきり聞き取れる程になった時、やっと彼女の姿を捉えることができた。
夏海の方はオルフェノクには追われておらず、彼の心配は当たらずに済んだ。
「オルフェノク…！　士君、一体何をしたんですか！？」
まだディケイドを追いかけてくるその姿を見とめ、夏海もまたディケイドに合わせて走り出した。
「俺じゃない、海東のヤツだ。社内にはオルフェノクがいるとは思っていないヤツもいるらしい！　そこに逃げ込めれば……―！」

その時、ディケイドは半歩ほど後ろに下がって夏海の背後に付いた。
同時に、彼の肩と右足に光弾が襲いかかった。
「ぐあっ！」
「士君！」
オルフェノクの攻撃から夏海を守ったディケイドは、痛みにがっくりと膝を突く。夏海は彼に肩を貸し、まだ追いかけてくるオルフェノクから身を隠す場所がないかを探した。そしてふと、夏海の目に物陰で何者かの手が手招きしているのが見えた。
迷っている暇はない。招く手の主を信じ、夏海はその物陰へと飛び込んだ。
「どこに行った？」
人間の社員の目を考えてか、オルフェノクの何人かが一旦変身を解いた。そこに一人のオルフェノクが通りかかる。その姿はまるで灰色の狼のようで、肩や背面が棘で覆われていた。
「こっちには来ていない」
「わかった、あんたもどこに行ったか探してくれ」
狼のオルフェノクが頷くと、オルフェノクだった人間たちがバラバラと散っていった。狼のオルフェノクは変身を解き、一人の青年の姿となる。肩まで伸びた茶髪が特徴的な、無愛想な印象の青年だ。
「もう大丈夫だぞ、あんたたち」
青年の呟きに、彼の近くにある扉が開いて夏海と士が出てきた。まだ痛みが引いていないのか、士は夏海に寄りかかったままだ。
「あの…ありがとうございます」
「何で助けたのか聞かないんだな」
不思議そうに言う青年に対し、夏海は緩く首を横に振った。
「そんなこと…聞けませんよ」
彼がオルフェノクであることは、夏海も先ほどのやりとりで気付いている。
けれど、彼女には青年が敵ではないという確信があった。青年の眼差しが、写真館にやってきたばかりの頃の士に似ている気がして…。

だから、青年がここにいるのは、理由があるのだと思った。
「そっちの奴は平気か？」
「…余計なお世話だ」
弱々しいながら士から返答が返ってきたことで、青年は「大丈夫そうだな」と零した。
「見たことのないシステムだが…あまり無茶をするな。もしまたオルフェノクに追われるようなら、ファイズを頼れ。いつもここにいるはずだ」
青年はそう言うと一枚の名刺サイズのカードを夏海に渡した。カードには「西洋洗濯舗　菊池」と書かれている。
「本当にありがとうございました」
夏海は士を気遣って頭だけで礼をした。青年は一瞬照れくさそうな表情を見せたが、それから一言も言わずに背中を向けた。
夏海はそれが早く去るようにと言っているのだとわかり、士を労る言葉をかけつつ青年の側から離れていった。
青年はしばらくして後ろを振り返り、二人がスマートブレインの裏口に消えていくのを確認した。
「あいつらに任せておけば、あの二人は大丈夫だろ…」
そう独り言を零した青年は、真にその相手を信頼していることが見て取れる微笑みを零していた。

第5話　高雅なる序詩

士たちが写真館に戻って一番最初に見たもの。それは見事なコントラストで描かれた絵だった。
闇を切り裂く赤い閃光の一つは、Φの文字を象っていた。鮮やかな青の蝶はみな優雅に舞っていたが、全て閃光が上に重なっている。それはまるで、閃光がこの蝶たちを駆逐しようとしているようにも見える。
その絵が掛かっているのは、見間違いでなければあのシミ汚れで塗りつぶされていたはずの背景ロールの場所だ。
「お帰り、何か情報は掴めたかい？」
今まで一体何をしていたのか、栄次郎がキッチンの方から出てきた。何の香りもしないので、また何か作っていたということはないだろうが。
「それより、先に士君の負傷を見ないと。オルフェノクの攻撃を受けてるんです」
「このくらい何でもない」
夏海は士の上着に手をかけたが、士は邪魔だと言わんばかりに彼女の手を振り払う。そこで夏海はわざと彼の肩を強く叩いた。
「いってぇ！」
「ほら、そうやって無理しちゃいけませんよ」
士は渋々促されるままに腰掛け、攻撃を受けた肩と足を露わにした。ディケイドに変身していたといえど、そこには衝撃によりできた痣がくっきりと残っていた。
夏海は包帯を一つ士に渡し、彼の届かない肩の方の処置を請け負った。その間に士は自分の足に包帯を巻きつつ、これまでに得た情報を栄次郎に明かした。この世界に存在する仮面ライダーのベルト、ファイズ・カイザ・デルタのこと。そのうちカイザにはもう出会っていて、ファイズについては居所がわかっていること。三つのベル

トの特性とオルフェノク、そしてスマートブレインとの関係性。
また、夏海も士と離れていた間に盗み聞いた話を混ぜてきた。ラッキークローバーというスマートブレインの筆頭がいること。そのメンバーたる二人が何かしら企んでいるのではないかということ…。
「ふうむ…なる程。でも、カイザの力は手に入らなかったんだねぇ」
一通りの話を聞き終えると、栄次郎はライドブッカーを目の前にかざした。
「手に入らなかったものは仕方ない。これからまた会う機会を作ればいい」
栄次郎からライドブッカーを受け取りつつ、士はニヤリと不敵な笑みを零した。
「それって…」
「ああ。三人の仮面ライダーに会い…協力してやるんだ」
夏海の言いたいことを汲み取り、士は同意と共に代わりに告げた。
この世界では人を襲うことを良しとしないオルフェノクと、スマートブレイン側のオルフェノクが対立しているという。海東からそう聞いたが、何よりも自分たちを助けてくれたオルフェノクであるらしい青年の存在がその真実味を強めてくれた。
ファイズとカイザは元々オルフェノクの王のために作られた。それがあるオルフェノクにより、彼らを滅ぼすものとして人間の手に託された。そのベルトは今も人を殺めるオルフェノクと戦う者の手にある。
ならば、士が成すべきことはただ一つ。ベルトを託された戦士と共に、対立するオルフェノクと戦うことだ。
「そうかい…」
栄次郎はホッとしたように呟いた。それもどこか遠い目をして、士を通り越した先を見るように。
「でもその前に！」
唐突に雰囲気を変えた栄次郎に、士は思わずソファからずり落ちそうになった。

直線までの物患いはどこへいったのやら。
「夏海も言ったように、体調はちゃんとしておかないといけないよ。ディケイドに変身するのは士君なんだから」
そう言った栄次郎の微笑みは、いつも夏海に対して向けているものと全く同じだった。そしてそれは、士に二眼レフをプレゼントしてくれた時にも、士と初めて顔を会わせた時にも見たもので。
士はしばらく何も言えずにいたが、やがて大人しくソファに背を預けた。
この老人は、あの時ずっと士を看病してくれていた。記憶を失った影響か、長らく話すこともしなかった彼を。決して見捨てたりしなかった。素直になれず、拒絶ばかりしていた彼を。
ふと近い過去を思い返していた士に、緩く暖かな睡魔が忍び寄ってきた。彼はそれに抵抗することなく、静かに夢の中へと落ちていった。

「やれやれ…流石においそれと手に入ったりはしないか」
そして士たちが写真館に戻った頃とほぼ同時刻。
あれから海東はどこに行ったのかと言うと、街を一望できる程高いビルの屋上にいた。
「でも、タダで逃げるほど僕は甘くないんでね」

誰に言うでもなく呟いた彼の手には、表紙にオーガのベルトと書かれた資料があった。あのどさくさに紛れて盗んできたようだ。

海東は早速その資料をパラパラと捲っていった。速読術があるのか、それとも必要な情報がどのページにあるのかがわかっているか。恐らくは後者だろう。

「へぇ…良かった、一応完成してるんだ」

彼は一通り資料に目を通すと、もう必要ないと言わんばかりに投げ捨てた。

「それにしても…彼があのディケイドになったのか。まさかこんなところで会うとは思わなかったよ」

海東は顎の下で手を組み、下方に臨める市街地を眺めた。この特等席で彼が何を思っているのかは、彼のみぞ知るところだった。

写真館に戻った翌日―。スマートブレインにいた青年が教えてくれた住所をもとに、士と夏海はファイズがいるという洗濯舗にやって来た。西洋洗濯舗菊池は、よく見かけるクリーニング店の例に漏れず少し小さめの一軒家程の規模だった。

店先にはサイドバッシャーと比べると随分小さく見える、一台のバイクが止めてあった。かなり丁寧に手入れをされており、まるで買

ったばかりのもののような新品の光沢を放っている。
「ここで間違いなさそうだな」
「そうみたいですね」
バイクにスマートブレインのロゴを確認できたため、二人は店の扉をくぐった。
「いらっしゃいま…あ！」
二人は店員の声に聞き覚えがあった。カウンターに立っていたのは、昨日会ったばかりの啓太郎だった。
「菊池さんじゃないですか！」
夏海と啓太郎が駆け寄ったのはほぼ同時だった。
それほど珍しくはない名字なだけに、士も夏海もまさか彼の経営する店だとは思いもしていなかった。
「どうしてここに…というより、どうやって知ったの？」
「それは話せば長くなるんですけど…」
どこから話すべきかわからず、夏海は困った風に言葉を濁した。
啓太郎の尤もな問いに答えるには、確かに長くなりそうだ。しかし、士はすぐに一度で応える術を思い付いた。
「恐らくお前の知り合いだろう男から教えてもらった。そいつは多分、オルフェノクだ」
「えっ？　それって一体……」
啓太郎は一瞬思い巡らせるような顔をしたが、直後にハッと目を見開いた。
「まさか…たっくん！？」
「本当にそいつかどうかはわからんがな」
「ううん…それはきっと巧だわ」
確信はないという念を押す意味でもそう言った士に、一人の女性が否を唱えた。間違いのなさを信じた、真っ直ぐで強い眼差しをして。
「お願い、教えて。巧は今どこにいるの？」
彼女は士たちがあった男を『巧』だと信じきっているようだった。
どんなに小さくとも、その可能性を捨てたくないのだろう。

「わかった、まずは俺たちのことも説明させてくれ。話はそれからだ」
士はこのチャンスを逃す手はないと思った。上手く行けば、ファイズにも会うことができるはずだ。
「…それもそうね」
女性は了承を返し、啓太郎と顔を見合わせた。
「私は園田真理。中に入って話を聞かせてちょうだい」
真理は店の中を案内するように先導した。士と夏海は彼女の後に従い、店の奥へと足を進めた。
中は作業場になっており、二人の男と一人の少女がそれぞれアイロンなどを片手に洗濯物を仕上げていた。
男のうち手前の一人は優しそうな雰囲気の青年で、もう一人は少し悪ぶったような恰好だ。少女は真っ直ぐに伸びたロングヘアーで、大人しく内気そうな印象を受ける。
「園田さん、その人たちは…？」
手前の青年が作業の手を止めて士たちを見つめてきた。
「木場さん、この人たちは巧に会ってここに来たの」
「乾くんに！？」
真理の言葉を聞いた途端、木場と呼ばれた青年は喜び混じりに驚いた。
「この人は木場勇治さんよ。あっちにいるのが海堂で、女の子は長田結花さん」
真理は順に三人を簡潔ながら紹介した。一人だけ名字のみだったのは気にしないでおこう。
「啓太郎もすぐに来るから、みんな座ってちょうだい。詳しい話をしてくれるみたいだから」
間髪入れずに指示を飛ばす彼女に、みな一様に何も聞かずにテーブルを囲んで席に着いた。士と夏海は全員を見渡せる位置に着くと、これまでの経緯を語り出した。

「そう…巧はまたどこかに消えたのね」
「でも、無事で良かったよ！」
士は彼らに巧と会った場所がスマートブレインだとは告げず、巧の行き先も知らないことにした。真理は巧の居所を掴めなかったことに肩を落としていたが、啓太郎は巧が無事だと知って喜んだ。
現ファイズを代行する木場には後々話さねばならないだろうが、夏海にはそれが彼らに余計な心配をさせないためだとわかっていた。
そして士たちの事情を聞いた全員の反応は、啓太郎に仮面ライダーという単語を聞かせた時とあまり変わらなかった。それでも木場、それに一度ベルトを使ったことがあるという海堂は若干ながら納得できているようだった。
「でも、どうして乾さんって人はあなたたちの前から姿を消したんですか？　オルフェノクに理解のある人間が二人もいるっていうのに…」
「それは俺のせいだよ…。俺が初めてたっくんの変身した姿を見た時は、まだ理解を持つ前だったから」
啓太郎はグッと歯を噛み締めて、自分の膝に爪を立てた。途方もない後悔に打ちひしがれ、自分を責め立てるように。
それを見た真理は啓太郎の肩を掴み、首を横に振った。
「ううん、それなら私だって…」
普通、目の前の人間が人を襲っているものと同じ姿になったとしたら、恐怖を抱かないのはおかしいだろう。人を襲う様が強烈にイメ

ージとして残っていれば余計に。
しかし、乾巧は違う。彼は長い間人間として、そしてファイズとして真理と啓太郎を守っていた。それだけに二人のショックや、その後の罪悪感は計り知れないだろう。
「だったら話は決まったようなもんだ。乾って奴にわからせてやればいい。一発ぐらいは殴らせてもらうかもしれんがな」
「しっかしよぉ、結局振り出しに戻るか…」
海堂はそう言ったきり黙り込み、真理や啓太郎も無言になった。
居場所を知っていようと知るまいと、もう一度会うのが難しいことだけは変わらない。巧が社長かラッキークローバーの二人に行動を拘束されていることは、間違いようがないのだから。
「…とりあえず、また今日の店番とたっくんを探すメンバーを決めよう。何もしないよりはいいと思うから」
「そうね…そうしましょう」
最初に静寂に耐えかねたのは啓太郎だった。真理も他に何の手だても思い浮かばなかったとみえ、彼に同意を返した。
捜索中にオルフェノクに出くわす可能性を考慮し、彼らと戦える木場と士は確定。夏海は士に着いていくと言って聞かず、真理も同様に巧を見つけたいということで決まった。
「それじゃあ私たちはお店の近くにいますから」
「ごめんね長田さん…草加君のこと、気にしてくれて」
「おい、俺には何もなしかよ」
店番だというのに店から離れる様子を見せる長田と海堂の会話に、そういえばと士は思い出す。草加も彼らの仲間ならばこの場にいるはずなのに、その姿は店にはなかった。
「行こう、門矢さん」
しかしその理由を考える前に、木場がアタッシュケースを手に出発を促した。その中に収まるファイズギアは、今も正当な装着者を待っている。
士は少し草加の不在が気になっていたものの、「ああ」と頷き返し

た。

第6話　遠のく声　―？―

それまではっきり映っていた情景が急激に朧気になる。直前まではあの灰色の異形がしっかりと目に入っていたはずなのに。

「嫌…嫌、嫌ぁぁぁっ！」

悲鳴が、あがる。甲高い女の声が、恐怖でひきつったその声だけがはっきり聞こえた。

次の瞬間には女の目は二度と開かれることなく、死の眠りに閉ざされていた。

―「真理ーっ！」

勢いよく起き上がって何かを掴もうとした巧の手は、ただ空を掻くだけにとどまった。それを今度は胸に当てて呼吸を落ち着けようとするが、それまで見ていたものがなかなかそうはさせてくれなかった。

「くそ……っ」

巧は拳を握りしめ、誰にでもなく自分自身へと悪態を吐いた。

「私はそのせいで昏睡状態に陥ったの」

真理の告白はとても重いものだった。あまりにも悲しい事実に、夏海はぐっと口をつぐんだ。

巧はそんな真理を救うために、オルフェノクという正体を現した。

啓太郎たちは知る由もなかったが、それはラッキークローバーの一員になることでスマートブレインの施設を自由に使えるという特権を得られるからだった。

―しかし、結局その特権は必要はなくなってしまった。

「奇跡的に、私の意識は回復したわ。けど草加君はそれ以来、益々オルフェノクを嫌うようになって……」

「もういい。それ以上の説明は必要ない」

士は真理の話を断ち切った。辛そうな顔をしたまま俯く彼女の肩を、夏海はそっと撫でるようにして掴んだ。

だから草加はあの場にいなかったのだ。「化け物」であるオルフェノクがいる、あの会合の場所に。

士は草加の不在理由に納得した一方で、真実を木場に語るタイミングを推し量っていた。

二人との距離はまだそれほど離れていない。このまま話を始めれば、真理にも聞こえてしまう。

ここは一つ、話があると引き離すべきか…と士が思ったその時。

「うわぁぁぁっ！」

青年の叫び声が響き渡った。そして明らかな戦いの音。

士と木場は互いに目を合わせ、声のした方角へと駆け出した。

声の主である青年は地面に倒れ込んでおり、白いラインを持つ黒の鎧、デルタの姿をしていた。だがその姿は白い光と共に普通の人間、デルタの資格者たる三原修二へと戻ってしまう。

それもそのはず、デルタのベルトは彼が受けた攻撃で外れてオルフェノクの足元に転がっていたからだ。そのオルフェノク、バーナクルオルフェノクの体表はいくつもの石に覆われたようになっている。更に奥には、もう一体オルフェノクの姿があった。全身を細長い針で覆われており、ヘッジホッグオルフェノクと言うべきだろう。

「三原君！」

攻撃を受けた三原に一人の女性、阿部里奈が駆け寄った。それは三原を心配した故の行動だったが、戦う手段のない彼女がオルフェノ

クに近付くのは自殺行為。里奈は三原を助け起こした時にようやくそれに気付き、バーナクルから後ずさる。

「ふふ…そんなに怖がらずとも大丈夫ですよ。痛みはしますが、死ねばそれも感じなくなりますから」

ベルトのない人間など敵ではないことから、バーナクルは余裕を見せつつ二人に歩み寄っていく。しかし三原も里奈も恐怖のあまり、上手く足が動かずに距離を縮められるばかりだ。

（誰か…誰か助けて！）

里奈はぎゅっと目をつぶった。バーナクルはそんな二人に、ボール状の何かを至近距離から投げつけようと振りかぶった。そして炸裂する破裂音と爆風が空に響き渡る。

ただし痛みを感じたのは三原たちではなく、ボール爆弾を持っていたバーナクルの方だった。

「くぅっ……誰ですか！」

バーナクルの睨みつけた先に立つのは、フォンブラスターを構えたファイズだった。その後ろからは三原たちもオルフェノクたちも見たことのない変身システム、ディケイドも駆けつけてくる。

「里奈、三原君！」

ファイズ、ディケイドの到着に次ぎ、真理と夏海が二人のもとへたどり着いた。心強い味方の登場に、二人は少しばかりの安堵を得た。

「これはこれは……ファイズではありませんか。我々もつくづく運が良い！」

バーナクルは喜びのあまり両腕を広げた。後ろに控えていたヘッジホッグも、全身の針を広げて戦闘態勢に入る。

「あっちの違うベルトは俺が引き受けよう」

「ええ、頼みましたよ」

バーナクルは一度に2つのベルトが手に入るものと勇んでファイズのもとへ。ヘッジホッグは見知らぬベルトを警戒してディケイドを迎え撃ちに出た。

バーナクルは再び三原たちにぶつけようとした爆弾を手に、銃で捌

きるにも技術のいる数をファイズに投げた。ファイズはそれを無理に撃ち落とさず、あるものは避けあるものは撃って切り抜ける。木場は巧ほどファイズに変身していないが、それなりのセンスを持っていた。それはファイズを憎み、オルフェノクの姿で戦っていた頃の経験もあってのことだ。

「ば、馬鹿な！　全てかわされた！？」

バーナクルはファイズが簡単に回避して見せたことに驚き、またも爆弾を投げた。同じ手は通用しない、とファイズは爆弾の雨をくぐってバーナクルに銃口を向ける。そこから飛んだ赤い閃光は、全てバーナクルにヒットした。

「うぐ、この…！」

バーナクルは爆弾を掴んだまま殴りかかっていくが、ファイズはひらりひらりとかわしていた。バーナクルは決して遅いわけではなかった。それ以上にファイズが俊敏なだけだ。

最早冷静さを欠いてきたバーナクルは、ファイズにとって脅威ではなかった。

ディケイドを引き受けたヘッジホッグはと言えば、彼もまたディケイドをナメてかかっていた。彼は体に生えた針を引き抜き槍のように振り回していた。しかしディケイドはソードモードで互角に立ち回り、更にはヘッジホッグに一撃を見舞った。

「ぬっ、やるな…！」

彼の針は鎧代わりでもあるため、生半可な攻撃では傷付かない。だがディケイドの武器はそんな鎧をものともせず、その下にある皮膚にもダメージを与えていた。

「ならばこれでどうだ！」

ヘッジホッグは全身に生える針を逆立てた。隙間なく尖る先端にディケイドの腕が当たり、痛みに対する条件反射で腕を引いてしまった。その反射行動という隙を狙い、ヘッジホッグは体当たりをかました。

「ってぇ！」

武器にもなる針があちこちに刺さり、ディケイドはその勢いのまま尻餅をついた。続けて突き刺そうとする針の槍を回転しつつ横っ飛びにかわし、二撃目は払うように軌道を逸らした。

「その自慢の針、叩き折ってやる！」

がら空きになっている脇腹に中段蹴りを放ち、ヘッジホッグはバランスを崩す。そこへ文字通り刃を針に叩きつければ、鈍い金属音とともにヘッジホッグの体を覆う一部の針が折れた。

「なっ…俺の針が！？」

全て折ることはかなわなかったものの、それはヘッジホッグを心理的に追い詰めるには十分だった。彼は明らかにうろたえ、槍を手にしながらも後退していた。

「くそっ、この私が負けるはずなど…！」

バーナクルの息も絶え絶えな声がディケイドにも届いた。

ファイズ側の戦況は圧倒的に彼に有利があった。バーナクルもなんとかファイズに攻撃を当てられたらしく、その鎧はいくらか埃を被っていた。しかしそこは戦い慣れてるらしい木場、ダメージは受けた様子がない。

「ＲＥＤＡＹ…」

カイザより高い音声がファイズギアから流れる。

ファイズはベルトに付属されたファイズポインターにミッションメモリーを通し、右足に装着した。

「ＥＣＸＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ」

カイザと同じくファイズフォンのＥＮＴＥＲキーを押すと、全身に巡る紅いフォトンブラッドが右足へと集中していく。

「はぁっ！」

ファイズがバーナクルに走り寄って右足を叩きつけると、フォトンブラッドが円錐形のフィールドを形成する。ほとんどのオルフェノクをその場に縫い止めるそれは、ファイズをフォトンブラッドに変換する役目も持っていた。

「てやぁぁぁっ！」

雄叫びの後に跳躍したファイズの姿が掻き消え、バーナクルの体をクリムゾンスマッシュが焼いていく。

「ぐ……がはぁっ！」

ファイズがもとの体へ戻って着地したと同時に、赤いΦの文字が崩れ落ちるバーナクルの体に刻まれていた。崩れた破片は青い炎を上げていたが、やがては消えて灰のみを残した。

ファイズがバーナクルとの戦いを決するのと同時刻、ディケイドもヘッジホッグを弱らせていた。体のほとんどの針も手にしていた針も折られ、ヘッジホッグはふらふらだった。

「ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ…Ｄｅ・Ｄｅ・Ｄｅ・ＤＥＣＡＤＥ！」

ディケイドが自らのクレストが描かれたカードを読み込ませると、ヘッジホッグとの間に光のカードが並んだ。その光を次々とくぐり抜け、ディケイドはヘッジホッグにディメンジョンキックを放った。

「うぐあぁぁぁっ！」

ヘッジホッグの体は青い炎を吹き出す間もなく、ディケイドによって粉々に打ち砕かれた。舞い散る灰の欠片が青くくすぶる中、ディケイドはゆっくりと立ち上がった。

「す、凄い……」

三原も里奈も、恐怖を忘れて二人に見入っていた。戦い慣れていない彼らにも、自分たちとの差を考えればその強さは推し量れた。経験が違いすぎる。その一言に尽きた。

「士君、木場さん！」

夏海は誰より早く二人に笑顔を見せた。けれど彼らは一向に変身を解かず、何やら不穏な気配が漂い続けている。

「夏海、まだ隠れていろ！」

士の呼びかけは正しかった。二人が並んで身構える先に、夏海がスマートブレインで見たあの男女の姿があったからだ。

冷たい空気を纏う女性は影山冴子。眼鏡をかけた生真面目そうな男性は琢磨逸郎。どちらもラッキークローバーの一員であり、選ばれ

た者として恥じない実力の持ち主だ。
しかし、彼らの後ろには意外な人物の姿もあった。スマートブレインで数人のオルフェノクに追われていた士たちを助けた、『乾巧』と思われる彼の青年。
「さあ…あなたの決意の程、見せてみなさい」
「そして見事ファイズギアを取り戻すのです」
冴子と琢磨に促されるまま、巧は無言で前に進み出た。その体を灰色の狼へと変えながら…。
「乾君!?」
ファイズが戸惑いを露わにした。遠くで真理が巧の名を叫んだが、誰かが食い止めたかこの場にやっては来なかった。
「乾、お前……」
ディケイドは内心驚きを隠せずにはいたが、努めて冷静になろうとした。ファイズが動揺を見せた今、自分がしっかりしていなければならないと。
ウルフオルフェノクは変わらず無言のままに、両腕を引いて飛びかかって来た。その背後では、冴子と琢磨が邪悪な笑みを浮かべていた。

第6話　遠のく声　―？―

わかってはいたが状況は最悪だ。ファイズは迷いを断ち切れずに防戦一方で、反撃に出ていない。もし最初から話していたとしても、優しすぎる木場のこと。同じ結果だったかもしれない。

ディケイドは巧に攻撃をしかけていたが、それもファイズに止められている。時には彼が割り込んできて、まともに二人分の攻撃を受けていた。

「くうっ……」

ファイズが苦しげに呻いた。それはダメージを受けた痛みだけではない、心もそれを感じている悲痛なものだ。

「しっかりしろ木場、立ち向かえ！」

よろけたファイズの肩を受け止め、ディケイドは檄を飛ばす。

厳しいことを言っているとは自覚している。だがここで二つのギアを奪われるわけにはいかない。それは木場自身も理解しているはずだと。

「止めて巧、お願いだから……！」

真理が喉を張り裂かんばかりに叫んだ。ここに啓太郎もいたならば、彼も巧を止めようと叫ぶだろう。それで喉を潰すことになろうとも構わずに。

それでも巧の動きは鈍らなかった。頑ななまでに口を閉ざし、ディケイドに爪を奮って。

「彼はオルフェノクですよ。聞き入れるはずがない」

「違う…巧は、巧は違うわ！」

琢磨の呟くような言葉を真理は否定する。それの意味するところは、巧は琢磨や冴子とは違うということに他ならない。ディケイドにですらそれがわかるのに、巧は何の反応も示さなかった。

「言ったはずだ。分からず屋なんてのは、一発殴らなきゃわからねぇんだよ！」

ファイズを振り切り、ディケイドはやっとのことで巧の顔を殴った。彼はその勢いのままに地面に沈んだが、すぐに立て直して頬を拭った。続けざまにディケイドが放ったハイキックを腕でガードし、膝蹴りを撃ち込んだ。

「かはっ…！」

腹部を強打され、ディケイドは一瞬息が詰まる。そこへ振りかぶられようとした拳はしかし、ファイズが巧を羽交い締めにすることで妨害される。

「乾君、君はこんなことするような奴じゃない。止めてくれ！」

「戦え木場！　忘れたのか、俺との約束を！」

巧はやっと口を開いたかと思えばファイズの話も聞き入れず、拘束を解こうと全身を奮わせた。一向に話を聞こうとしない巧に、ディケイドはいい加減頭にきた。

「まだわからないってぇなら……わからせるまで殴る！」

「か、門矢さん！」

バシッと自分の掌を打ったディケイドに、ファイズの拘束が緩む。そこから飛び出した巧の胸に、また一つ拳が沈み込んだ。

「乾君…まさか君は、僕に倒されようとして？」

攻撃の手を休めない巧に、ファイズはふと彼にファイズギアを託された時のことを思い出す。その時から巧は既にこうなることを予見していたのだろうか。

ファイズは巧の覚悟の重さに、しばし呆然と立ち尽くしてしまった。

「ああっ、士君！　私たち……どうしたら！？」

この状況をどうしようもできないもどかしさに、夏海は意味もなく狼狽えた。

胸の痛む戦いをただ見守るだけの、無力な自分が悔しくてたまらなかった。戦う力さえあれば、割って入り諌められるかもしれないというのに。

「デルタギアを取りに行くにも、三人が戦ってるうちは危ないし…」

里奈もこの状況を変えたい気持ちは同じだったが、デルタギアは未

だ戦いの渦中にあるまま。その分ラッキークローバーの二人に奪われる心配が薄れていても、今や時間の問題だ。
彼らには全く手の打ちようがない中で、ディケイドがライドブッカーを手に取る。それもブックモードからガンモードに切り変えて。
「ちょ、ちょっと士君!?」
どういうつもりか武器まで持ち出してきたディケイドに、夏海は大きく身を乗り出した。真理に至ってはまた飛び出そうとして里奈に腕を掴まれる。
「離して里奈、もう止めなきゃ!」
「駄目、今度は意識を失うだけじゃ済まないかもしれないのよ!」
里奈の言葉に、一瞬真理の動きが固まる。彼女は変身のできない自分を、この時ほど辛く思ったことはなかった。
ディケイドが照準を巧に合わせても、彼は真っ直ぐに突っ込んで行こうとする。いくらオリジナルオルフェノクといえども、まともに受けては無傷では済まないというのに。
「巧ーーーっ!」
ディケイドブラストが銃口から放たれる。だが最初の数発は威嚇射撃だったのか、マゼンタの光線は巧すれすれに飛んでいく。
「士君、止めて下さい!」
ディケイドはついにわざと外していた狙いを正確に巧へ向け、その胸目掛けて引き金を引いた。
マゼンタがディケイドの前で閃く。誰もが目を伏せる中、ディケイドだけは仮面の下でニヤリとほくそ笑んだ。
「……来たか」
ディケイドがそう声をかけたのは巧ではない。それどころか人間でもオルフェノクでもなかった。
ファイズのマークを抱くバイク、オートバジン。それが自らの意志で変形した、機械人形の姿がそこにあった。
オートバジンはディケイドを敵と見なしたのか、ホイール型の盾からガトリングガンを連射する。ディケイドはまともにそれを受けた

かに見えたが、その体はまるで幻影だったかのようにフェードアウトした。オートバジンがその姿を探していると、どこからかディケイドブラストが狙撃して来た。

「ＩＬＬＵＳＩＯＮは分身か。なかなか使えるな」

オートバジンの斜め向かいでトントンとライドブッカーで肩を叩くディケイドだったが、その他にも彼の姿が確認できた。いつの間にかデルタを回収しているディケイド、或いは挑発的にオートバジンへ銃口を向けるディケイド。そしてラッキークローバーの二人の後ろで「よう」と呑気に挨拶するディケイドなど。

オートバジンはそれが全て実体を持ったものと理解できていたのか、迷わず斜め向かいを銃撃する。次にデルタを持つディケイド、それからラッキークローバーの背後を取ったディケイド。

「くっ……一旦引くわよ！」

「し、仕方ありませんね……！」

ディケイドに巻き込まれる形となった冴子と琢磨は、その幻影が消えた跡を通り越して逃走した。あちこちで幻影のディケイドが撃たれたために、土煙で視界が殆ど利かない状態になっていた。

その中で、オートバジンはまるで胸のマークを押せと言うように巧の前に立つ。巧はこの事態があまり飲み込めずに迷っていたが、やがて動こうとしないオートバジンの前で変身を解いてファイズのマークを押した。

「ＶＥＨＩＣＬＥ　ＭＯＤＥ」

オートバジンは音声と共に変形し、普段のバイクの姿に戻った。巧はそのままオートバジンに乗り込み、いずこかへと去っていった。

「あっちか……」

本物のディケイドは戦いの場から離れた、土煙の影響もないところにいた。ディケイドはどこからともなく現れたマシンディケイダーに跨ると、巧の向かった方角へとマシンを走らせた。

「士君…大丈夫なんでしょうか」
土煙が落ち着いてきた頃、戦いの音が消えたことに気付いた夏海はひょっこり顔を出してみた。真理も巧の安否を気にして、晴れてきた煙の向こうを見ようと目を凝らしている。
そんな時、煙を割ってファイズギアとデルタギアを携えた木場が現れた。
「木場さん！」
一番に駆け出したのはやはり真理だった。続いて夏海、そして三原と里奈が木場に走り寄る。
「木場さん、巧は！？」
「逃げてしまったみたいだ。門矢さんが追いかけるって言ってたけど……」
木場は申し訳なさそうにことの顛末を告げ、真理にファイズギアを渡す。
「そう……また、掴めなかったんだ」
真理はファイズギアをぎゅっと抱き締めながら何処かに去った巧の姿を求めていたが、ふと力なく笑った。
次いでデルタギアが三原に返されたが、三原は何も言わずにただ俯くだけだった。
「士君ったら、殴るどころか武器まで使っちゃって……。何を考えてるんですか！」
夏海は行き場のない怒りを持て余し、最早誰もいない戦場跡に吠えた。

「まあまあ、光さん。今は門矢さんに任せるしかないですよ」
木場は夏海をなだめるべく、穏やかに苦笑した。それしか方法がないこともまた事実だったが、彼にはもう一つ士に任せてもいいと思う理由があった。
士は巧に似ているのだ。もちろん全てというわけではないが、素直に言葉を伝えられない不器用なところがあるのは巧も同じだった。だからもしかしたら、士ならば巧を諭すことができるかもしれない。そう考えてのことだった。
巧はどこともよくわからない川沿いに来て、ようやく足を休ませた。誘われるようにして適当な道を走らせてきたが、路肩に止めた今もオートバジンは巧の側にいる。何だか不思議と嬉しさがこみ上げてきて、先の戦闘でついた埃を払ってやった。
あれから真理や木場がどうなったか、確認しようにも難しかった。けれど無事でいてくれた。それがわかっただけで十分だ。
「俺はもう大丈夫だ。木場のところに行ってやってくれ」
諭すようにポンと頼もしい機体を優しく叩いたが、オートバジンは何も反応しない。モードを切り替えるボタンは押したはずだというのに…。
「そんな顔でいりゃあ、人間でなくても放っておかないと思うんだがな」
巧は思わずオルフェノクに変身しかけた。声をかけてきたのは、え

らく派手なピンク色のシステムとよく似たバイクの乗り手だった。
「どういう意味だ」
会って間もない人間に何がわかるというのか。
そんな意味も込めて詰問じみた問いかけをしたが、青年の方は意に介さずに巧の相棒だった機体に手を置いた。
「お前は意地を張って無理をしている。オートバジンもそれがわかっているから離れないんだ」
図星、かもしれないと巧は思った。
巧は大切なものを失うことを恐れて、ずっと独りきりで生きてきた。それが真理と出会い啓太郎と出会い、いつの間にか彼らのいるあの小さな店が帰る場所になった。
それ程大切になった彼らを傷つけたくなくて、いつ理性をなくすともわからない自分が怖くて。だから彼らから離れたというのに。なのに孤独を感じないことは、一度としてなかった。
「だけど、だけど俺は……守るべきものを壊してしまったんだ！」
悲鳴をあげ続ける胸の内から、誰にも打ち明けることのなかった叫びが飛び出した。

それこそが巧の抱えていた、最も重い罪の意識そのものだった――。

第7話　狼のDilemma

アイロンがけが終わったシャツを広げ、真理はぎこちない手つきでボタンを閉めていった。一つ一つ丁寧に、というのではない。以前はもっと初めてボタンを止める子どものような、とても緩慢な動作だった。

改善には時間も根気も要した。短期間ではないにしても、それなりに日常生活に支障がない程には戻りつつある。

それでも、これではまだまだ目指す先には足りないのだけれど。

一つ息を吐いて髪を掻き上げた真理に、新しいまっさらなシャツが届けられた。これを繰り返すことが真理のためだとわかっているから、啓太郎も急がないシャツは任せておいた。

「真理、もう少し肩の力を抜いた方がいいよ」

「ありがとう、里奈」

根を詰め続ける真理を労り、その肩を里奈が撫でた。

あの後、三原と里奈は真理たちに連れられて啓太郎の営む店にやって来た。戦い慣れない二人をフォローしたい、と言ってくれた木場の好意は、そのまま真理の意思でもあった。

しかし、三原は店に来てから奥に縮こまったきり出てこない。よほど怖い目に会ってきたのだろう。真理も啓太郎もそう思って、酷く怯えた様子の三原を咎めることなく休ませることにした。

「もう少ししたら少し休んでくださいね。無理は禁物ですよ」

アイロンがけを手伝っていた夏海は一山分を終えて小休止を取った。時々上の空になることもあったが、それが誰を心配してかは言わなくとも伝わっていた。

「そうね……」

真理はままならない指先を見つめ、きゅっと握り締めた。願いをこめるように、祈るように。

「あいつの夢を守ると言っておきながら、この体たらくさ。会わせる顔がねえんだよ……俺には」
巧は自嘲気味に笑っていた。それともそれは、標を失ったが故の絶望だったのかもしれない。
何一つとして手の内に残らなかった。そんな悲しみにもにた虚しさを、その目に滲ませ俯いた。
多少の違いはあれど、その虚無感はよくわかる。目覚めた時には既に全てを失っていた士には。
「それで、お前はそのまま逃げ続けるつもりか？」
しかし士が巧にかけた言葉は辛辣そのもの。傷口に塩を塗るような、突き放した物言いだった。
巧はそれにピクリと反応を示したものの、顔をあげようとはしなかった。
「目を背けるな。そうやって腐っていても、なくなったものは戻らないんだぞ！」
たたみかけるように続けながらも、士は巧を奮い立たせるような言葉を探した。慎重に丁寧に、自身が持ちうる最善の言葉を。
「どんなに恰好悪かろうが、向き合い続けろ。やり遂げないうちから諦めてんじゃねえ！」
巧の息を飲む音が聞こえた。
彼の中でもずっと葛藤があったのだろう。このままでいいのかと、どこかで叫ぶ自身の声は聞いていたのだ。

「ぁあっ、くそ！」
そして自らの拳を傷つけるかのように、ガードレールを音が出るほど強く叩いた。
「わかっている……わかっているんだ。だけど、」
巧はそこで何かを言いかけ、言葉を切った。
感情が複雑であればあるほど、表現することは難しい。行動も言葉も無器用な彼は、それを口にするのがことさら苦手な人間なのだ。
「俺はあいつに何をしてやればいい？　あいつは、あいつらは何を……？」
そしてようやく顔を上げた巧の目には、深い悲しみと苦しみとが湛えられていた。
それが彼の心につかえていたことだと、士にははっきりとわかった。彼は自身の過失の償い方がわからずに、ずっと悩み続けていたのだ。だからこそあれほど極端な、自分を倒させようとするような行動に出た。
だが、そんなやり方は間違っている。真理や啓太郎が望んでいるのは、そんなことではない。
彼らとは会って間もない間柄だが、それでも伝わったほど真っ直ぐで眩しいたった一つの望み。
「そんなこと、オートバジンを見ればわかることだろう。もちろん、そいつ自身の行動もな」
巧はもう一度忠義深い良き相棒を見下ろした。つい先ほど一戦交えて少しばかり傷がついていたが、オートバジンの機体はほとんどまっさらだ。
最初に見た時は持ち主に大事にされているのだと思っていたが、それは違った。その主が不在だからこそ、彼を思って真理や啓太郎が大切に大切に手入れをしていたのだ。それはそのまま持ち主への思いの現れでもある。
そして主とは即ち、本来のファイズギアの資格者乾巧に他ならない。
オートバジンも彼がオルフェノクの姿をしていようと、彼を主と認

識していたのだから。
巧はオートバジンのなめらかな機体に手を這わせ、ゆっくり優しく撫でつけた。今までのことを謝罪するかのように、そしてこれまでの感謝の気持ちを伝えるように。
「さて、俺は帰らせてもらうぞ。あまり遅くなると夏ミカンが怖いからな」
士はこれで話は終わりだと言外に述べつつ、マシンディケイダーに跨った。
オートバジンを撫でる巧の穏やかな顔を見て、もうこれ以上言葉は必要ないとわかった。ついて来る来ないは彼に任せても問題ないだろう、わだかまりは解いてあるのだから。
「待てよ」
しかし、そこで巧の方から制止が入った。もはや迷いも何も断ち切った、静かに燃える目がそこにはあった。
「まだお前の名前を聞いてない」
そういえばそうだったと今更ながらに気が付いた。
巧の名前は真理経由で聞いていたが、士の方はディケイドの姿でしか会っていないし名乗ってもいない。
「門矢士。通りすがりの仮面ライダーだ」
士はディケイドのカードをかざし、ニヤリと笑ってみせた。巧はそれで士とディケイドとが繋がったようで、ここにきて初めて微笑みを見せた。

士の隣にいる巧の姿を見つけて、真理の動きが固まった。啓太郎はあんぐりと口を開けたまま、自分の頬を抓っている。
木場も夏海も―草加は一人だけ見るからに不機嫌そうだったが―、ほとんど同時に暖かな笑顔を浮かべた。
「……よう」
巧は一言だけを発すると、単なる挨拶をするかのようにひらりと片手を挙げた。その瞬間。
「たっくうぅぅん！」
真理は無言で、啓太郎は涙と鼻水で顔をぐちゃぐちゃにして巧に抱き付いた。いや、飛び付いたと言った方が正しいのか。
とにかく二人の人間に同時にぶつかられ、巧は数歩ほど後ろによろけた。二人分の体重を受けていながら、それだけで済むのもすごいことだ。
「バカ巧！　心配ばかりかけて……本当にバカなんだから！」
真理も啓太郎程ではなかったが、涙で頬を濡らしていた。これで巧もどんなにか自分が必要とされているかがわかっただろう。
「乾君……良かった。いい仲間に恵まれたね」
木場は二人に遅れて巧の若干斜め向かいに回った。この距離感こそが、彼らの再会を誰より喜んでいることを物語っていた。
「……ああ」
巧は二人を慰めるように両腕で背中を撫でた。その手つきはオートバジンに込めたものと同じものを二人に伝えていた。
やっとのことで伝えるべき相手に伝えられた思いは、また更に彼らを泣かせる要因にもなった。違うことと言えば、それが嬉し泣きであったことくらい。
「本当に良かった、みなさん嬉しそう……」
おおいに泣き続ける二人にもらい泣きして、夏海の目尻にも小さな涙が浮かんだ。
もちろん、これで全てが解決したわけではない。だが、士は今それ

を口にせずにいた。
喜びを噛み締める時間を邪魔するのはあまりに無粋だ。少しの間ならば、忘れていても構わないだろう。
そうしてまだ真理たちが泣きはらしている中、木場がそっと少し場を離れた。この場にはまだ海堂と結花が戻ってきていなかった。同じ境遇の彼らを呼ぶには、今が頃合いと見たのだ。それから木場は作業場から見て影になる場所を選び、ポケットの携帯を取り出して結花の携帯に繋いだ。しかし、コール音は切れることなく留守番電話サービスの音声に切り替わった。
（おかしいな、どうしたんだろう）
結花が電話に出られないということは今までなかった。電源を切らなければならない場所はこの洗濯舗近くにはない。
ならば、一体どうして。
木場がその疑問を別の疑問へと変える前に、何かの影がけたたましい音をたてて店に入り込んできた。
「な、何だ！？」
驚いた木場が音源に駆けつけると、店の出入り口に傷だらけで倒れている海堂の姿が見えて。
「……海堂！」
外傷はあまり酷くなかったが、念をいれて声高にその名を呼ぶ。海堂はその声の主が木場だとわかると、傷だらけにも関わらず強く木場の腕に掴まった。上げられた顔は蒼白で、恐怖とも焦りともつかない感情が入り混じっていた。
「結花が……結花が捕まっちまった！」
「長田さんが！？」
騒動に気付いた士、そして巧もやって来る。真理と啓太郎には何か言って聞かせたのか、その姿はない。
木場は海堂を助け起こし、楽な姿勢を取らせた。
「あいつ、俺には逃げろって……ちくしょう！　俺はこんな、情けねえ……！」

「海堂、落ち着いてくれ！　後でいくらでも聞くからまずは長田さんのことを！」
木場の言葉で冷静さを取り戻したか、海堂は一呼吸置いた。
せめてもう少しくらい余韻をやりたかったものだと思いつつ、士はじっと続きを待った。
「結花は警察に連れて行かれたんだ。オルフェノクの研究のために……」
それがどういう意味なのか、わからない彼らではなかった。木場を手伝い、巧が海堂のもう片側の肩を持つ。
士は二人を先に行かせながら、これからのことに考えを巡らせていた。

第7話　狼のDilemma（後書き）

こちらに編集後記があります←

http://k.syosetu.com/userblogmanage/view/blogkey/1089914/

第8話　運命を乗り越えて（前書き）

第６話、琢磨になるはずのところが北崎になっていたので修正しました。木場が結花を呼ぶ時の呼称も、長田さんに直しました。
北崎さんもだしたかったんですが、流石に終盤での登場はちょっと無理があったので泣く泣く断念。

第8話　運命を乗り越えて

（海堂さん、無事逃げ切れたかな）

結花は護送車に揺られながら、共に襲われた海堂の安否を気にしていた。オルフェノクとなった結花の体は人間よりは丈夫だが、だからといって銃に撃たれても痛くないということはない。実際結花も傷つきはしなかったものの、結果的に捕らわれる一因になった。使徒再生されてオルフェノクになった海堂は、余計痛みも強かったはずだ。それでもなんとか木場と合流できていれば。今はそれを願うばかりだ。

あと一つ、この護送車が向かう場所がわかればと思うが、それも難しいだろう。警察署ではないのは確かだ。彼らは結花を『貴重な研究材料』だとのたまっていた。であるならば、その発言に相応しい研究所のような場所だろう。

（啓太郎さん……）

結花は優しい洗濯舗の店主を思い浮かべた。啓太郎は結花にとって、海堂とは違った意味で特別な存在だった。恋にも似ているような、ある種の憧れともいうのだろうか。

携帯は警官に押収されて手元にないが、結花は啓太郎を思うといつも勇気が湧いてきた。だから今も、この現実に挫けてしまわないよう彼を思った。

「きゃっ！？」

けたたましいまでのブレーキ音と共に、結花は放り出されそうになった。結花を拘束している警官も、急なブレーキで体勢を崩していた。

一体何がと尋ねるより早く、すぐ近くで銃声がなり響く。警官たちの声はそれでかき消されてよく聞こえないが、何かしらと交戦していることはわかった。

（海堂さん、まさか戻って来たんじゃ？）

結花はたちまち血の気が引いていく音を聞いた。護送車はその性質上窓がついていないため、外の状況は音でしかわからない。嫌な想像が思考を駆け巡り、すぐさまそれを振り払った。

しばらくすると施錠の外される音と共に、結花を閉じ込めていた扉が開いた。扉を開いた警官の顔面は蒼白だった。

「オルフェノクの仲間が来た！　逃げられる前に連れ―」

警官の言葉は最後まで続かなかった。鞭状の細長い何かが警官を捉え、視界から放り出した。

側にいた警官が銃を構える。その照準の先に現れたオルフェノクは、全身を百足の足のような刺で覆われていた。

「迎えに来ましたよ、長田さん」

―同時刻、とある喫茶店―

「士君、本当にあの二人を行かせていいんですか？」

夏海は納得していない様子を隠さず士に尋ねた。見守る先には、結花を担当したという刑事と巧と木場の三人が面会する現場がある。

「いいから黙って見てろ。あいつらの決めたことだ」

そうは言いながらも、士もこのまま黙って二人を行かせるつもりなどなかった。あの状況で口が出せる人間がいたかと聞かれれば、士

にもわからない。夏海が結局止めようとしなかったのは、巧と木場が止めても留まらないようなタイプだとわかっているからだろう。ただ、二人だけで行かせてはならないという勘があった。だから啓太郎たちには上手く断りを入れ、こうして二人の後を追ってきた。まさか真正面から交渉に出ているとは、予想だにもしなかったが。

「しかし、この席だと話がよく聞こえないな。もう少し近付いてみるか……」

士は三人に気付かれぬようそっと席を移動し、会話の内容を拾うべく耳をそばだてた。ちょうどいいことに、少しばかり三人の会話が漏れて聞こえてきた。

―「お願いします、長田さんを解放して下さい。俺たちがその代わりになります」

その交渉の条件をきき、刑事の表情が驚愕に彩られる。士はやはりな、と小さく呟く。夏海もその予感はあったのだろう、顔を強ばらせて席を立った。士はそれを押し留め、刑事の様子を伺った。

刑事は返答に困っていた。それも仕方ないことだろう。一刑事でしかない彼に、そんな権限があるはずもない。

そうして何も会話が進まず時間だけが過ぎていこうとしていた時、刑事の携帯電話が鳴り響いた。刑事は失礼を詫び、その場を離れようとしながら電話を取った。

「はい、はい。……えっ!?」

刑事は途端に足を止めた。そのまましばらく呆然としていたが、やがて携帯を持った手を力なく下ろした。

「どうしました?」

純粋に心配したのだろう、木場が刑事を気遣うように声をかけた。

刑事はそれで正気を取り戻し、急いで席に置いた鞄を掴んだ。

「ごめん、すぐに現場に行かなくちゃならないんだ!」

刑事は手短にそう告げると、喫茶店から外へと飛び出していった。

「おい、待てよ!」

巧はすぐさま刑事の後を追いかけ、木場も慌ててそれに続いた。

「俺たちも追うぞ。何かあったんだ」
「ええ、行きましょう！」
士と夏海も三人を見失わないうちに店を出た。一瞬の騒然に店内の客が何事かと振り向いたが、ほとんどが早々と興味をなくした。

カチカチと弾切れの音がして、結花を拘束していた警官たちは狭い車内で僅かに後退りした。何発という銃弾が撃ち込まれたにも関わらず、センチピードオルフェノクは痒みすら感じていないようだった。
「困りますね、勝手にオルフェノクを捕獲しようだなんて。私たちが提供している分では足りないと？」
センチピードはそう言ってムチを奮い、警官は瞬く間に倒れ伏した。
「どういう意味なんですか」
警官の体が灰と崩れる内に、結花は真意を問うた。
もしかすると、それを理解したくなかったのかもしれない。もしそうであるならば、その現実を受け止められる自信がなかったからだ。
「そのままの意味ですよ。私たちも、私たち自身をよく知らないものですから」
しかし、センチピードが告げた真実は結花の考えた通りであった。
オルフェノクの研究には、スマートブレイン自身が関わっていたのだ。
スマートブレインの高位オルフェノクは、自分たちのためだけに平

気で同族をも捨てられる。その恐ろしさにも似た衝撃が結花を襲い、思わずその場にへたり込んだ。

「琢磨君、あまりのんびりしてられないわよ。『彼』も迎えに行かなくちゃならないんだから」

センチピードの後ろにもう一人、今は人間の姿をしている冴子がやって来た。彼女の言葉で、結花はもう一つ問いたいことがあることを思い出した。

「迎えに来たって、まさか……」

「心配しないで下さい。あなたはあの二人と違って、よく働いていらっしゃる」

センチピードは琢磨の姿に戻り、結花の拘束を解いた。その口元は柔らかい笑みを浮かべていたが、眼鏡の奥の目は笑っていなかった。

「あなたをラッキークローバーの一員として迎えたいんですよ」

「そんな……私、私は！」

結花は何を否定したいのかもわからず首を振った。思い返される罪の記憶が胸を刺し、息をすることさえ苦しくなった。

確かに結花は多くの人間の命を奪ってきた。最初は義理の妹と同級生たちを。一番新しい記憶では、バイクで結花を脅した男たちを。この時のことは巧に見られたが、彼は何も言わずにいてくれた。

それでも、結花は木場や海堂にそのことを話す勇気がなかった。人を殺めることを厭う木場、それに本当は面倒見は悪くない海堂に軽蔑されることを恐れた。

ずっと見ないフリをしてきた事実を突きつけられ、結花は冷静さを欠いていた。

「何を怖がることがあるんです。あなたは間違っていないんですよ」

「私、そんなつもりじゃ……！」

琢磨は意外にも優しく諭すが、それは結花にとっては逆効果だった。肯定して欲しかったわけではない。否定して欲しいのでもない。結花は、見つからない答えが欲しかった。

「言い訳しなくてもいいの。それがオルフェノクとして、自然なこ

となのだから」
冴子が落ち着かせようと結花の肩を撫でた。それは確かに効果があった。冴子の意図した通りでなく、結花自身が無意識に感じていたことを突かれた結果で。
（言い訳してたのかな……。私の意思じゃない、なんて）
義理の妹や同級生たちは結花を虐めていた。彼女たちを憎んでいなかったと言い切れるだろうか。それにあの男たちも。やめて欲しかったのでなく、消えて欲しかったのではないか。
考えれば考えるほど、結花は暗い路地へと追い詰められていく。
「私、は……」
顔を伏せ、ぽつりと呟いた。もう何を言っても、生きたい場所には戻れないような気さえして。
―けれど。

「長田さん！！」

木場の呼ぶ声が聞こえ、結花はハッと正気に返った。
迷いはまだ心の隅に残っていた。人を殺めたことが変えられない事実であるために。
―それでも戻りたいと思えたのは。
「長田さん、助けにきたよ！」
木場は真っ直ぐに護送車へ駆け寄ってきた。結花の真実を知らないままに。
ただ、純粋に結花を仲間として思い助けに来た彼を信じたいと思ったから―。
「……木場さん！」
結花は二人の間をすり抜けようと、体勢を低くして足を踏み切った。

護送車から飛び出そうとした結花はしかし、琢磨に腕を掴まれ未遂に終わった。そのまま琢磨はセンチピード、冴子はロブスターに変化した。

だが木場は立ち止まろうともせず、走り続けながら変じた。白き騎士の如き、ホースオルフェノクへと。

それを受けて巧も慣れた手つきでベルトを巻き、ファイズフォンの５キーを三回叩く。

「ＳＴＡＮＤＩＮＧ　ＢＹ……」

そして待機音声を発したファイズフォンをベルトの中央にセットし、同時にＥｎｔｅｒキーを入力した。

「変身」

「ＣＯＭＰＬＥＴＥ」

巧の静かな掛け声の後に完了の音声が響き、ファイズギアから赤いフォトンブラッドが流れ出す。燻された銀のような装甲が次々と巧を包んでいき、φの意匠を抱く仮面が形成される。そしてベルトを軽く叩くと、手首をスナップさせた。

束の間の眠りを経て、ここに真なる資格者のファイズが復活した。

「長田さんを放せ！」

木場は武器も持たずにセンチピードへと殴りかかった。それはあえなくロブスターに遮られ、進行が妨げられる。木場は剣と盾を作り出すと、ロブスター相手の立ち回り体勢を取った。

センチピードは結花を車内へと押し戻し、ファイズを迎え撃つように鞭をしならせた。ファイズは鞭の走る先を的確に読み掴み取る。もう片方の拳は勢いをつけ、鞭を引き寄せてセンチピードの胸倉を殴りつけた。

「くっ、やはり強くなっていますね……。しかし、あなた相手に私

たち二人だけで来るとでも？」
センチピードは数歩後退すると、サッと片手を上げた。それは合図だったのだろう、どこに隠れていたか武装した数人の兵士が現れる。スマートブレインのロゴを持つ武装集団は、一斉にファイズを狙い射撃した。ファイズは何発かは避けられたものの、数の暴力の前に膝を突いた。
「スマートブレインの量産型ベルトです。ファイズなどに比べればあまり強くはありませんが、数で圧倒するのがこのライオトルーパの目的でね」
センチピードはライオトルーパの背後で揚々と語った。いくつもの銃口はまだファイズを狙っており、迂闊に身動きできなくなっていた。
「乾君！」
ファイズに気を取られた木場はロブスターの攻撃をまともに受け、がらりと盾を落とした。木場の焦りは更に増し、ロブスターとの戦いに集中できずにいた。
「今ならまだ、村上さんもあなたを迎え入れるつもりがあります。断るようであれば、あなたと言えども……」
「どうしてそこまで俺にこだわる？」
ファイズはそこでセンチピードの言葉を遮り、ずっと疑問に思っていたことを尋ねた。それはこの包囲網を突破する手段を考える時間を稼ぐためでもあった。
巧は今まで散々オルフェノクを倒してきた。そして今はラッキークローバーを抜け出し、こうしてセンチピードと戦っている。そんな巧を勧誘しようと無駄であるはずなのに、村上はまだ巧を求めている。その理由が知りたかった。
「実はオリジナルオルフェノクの中でも、特に強い能力を発揮するオルフェノクにはある共通点があるのですよ」
センチピードは得意気に話し始めた。そのずっと後ろにある影を見つけ、ファイズはじっと話を聞くフリをした。

「我々はその共通点を持つオルフェノクの中から、王とも呼べる存在が現れるのではないかと考えているのです」
「……その共通点ってのは？」
巧は尚も問いかけた。ミッションメモリーに手を掛け、いつでも抜けるように。
ロブスターを退けようとしていた木場も、こっそり護送車から顔を覗かせていた結花も、いつの間にか話を聞き入っていた。二人とも予感がしていた。その共通点が何であるかを。
「火事によって命を落とし、蘇った人間。そう……まさにあなただ！」
木場はセンチピードがそう言ってファイズを指差したのを見、思わずその場で立ち尽くした。
「なるほどな。そういうわけか」
ファイズは微動だにしなかった。センチピードはライオトルーパの前に歩み出し、恭しく礼をした。
「そうですとも、我らの王―」
「だがな、今さら俺が何者だろうと関係ない！」
ファイズはミッションメモリーをアクセルメモリーと換装し、ファイズアクセルのスタータースイッチを入れた。
「俺を受け入れてくれる奴らがいる限り！」
「ＳＴＡＲＴ　ＵＰ」
ファイズの装甲が開いたかと思えば、もう既にファイズの姿は消えていた。
「しまった！」
センチピードが気付いた時にはもう後の祭り。ライオトルーパが次々と赤い閃光に薙ぎ倒されていく。
「その通りだ、乾！」
そこにディケイドが飛び込み、ロブスターとセンチピードにディケイドブラストを撃ち込む。その隙に結花は護送車から抜け出し、木場の背後へと避難した。

「お前には誰よりお前を思う仲間がいる。それだけで十分だ」
センチピードは標的をファイズからディケイドに変え、時間差をつけていくつかの光弾を放った。ディケイドはそれを全て正確に撃ち抜き霧散させると、ライオトルーパを全滅させたファイズと並び立った。
その時、ディケイドの腰にあるライドブッカーから三枚のカードが飛び出した。ディケイドの手に収まったカードは、どれも揃って絵柄が現れていた。アクセルフォームのファイズ、ファイズマークを意匠した重火器、そしてファイズの紋章だ。
「これは……！」
ディケイドがカードに目を奪われていると、唐突に連続して地響きが起こる。その原因は辺りを見回した瞬間、すぐに見つかった。一人の警官が見上げるほど巨大な灰色の怪物を従え、戦いの場に向かって進んで来ていた。恐らくその警官は結花を捕らえたうちの一人だろう。灰色の怪物は研究の一貫で生まれたものに違いない。
「これはまたとんでもないものを……！」
センチピードが半分感心したような声をあげた。これがオルフェノクだとは信じがたいらしく、ロブスターですら言葉を失っていた。
「奴らを蹴散らせ、エラスモテリウム！」
警官は巨大なオルフェノクに指示をだすが、エラスモテリウムは足元に注意も払わず駆け出した。警官はその足の中に消え、結花が息を呑んだ。
エラスモテリウムは決して警官の命令を聞いたのではない。ただ本能の赴くまま、食らいつく目標を追ってきただけなのだ。
「冴子さん、逃げましょう！　あれは普通ではない！」
「そのようね……」
センチピードとロブスターは、戦いを放棄して何処かへと消えてしまった。オルフェノクに変じていた彼らには、エラスモテリウムがどれだけ狂暴なのかがわかったのだろう。
「結花、お前は啓太郎を通じて真理に連絡してくれ。アレが必要か

もしれない」
巧はそう言いながらアクセルメモリーを戻し、携帯を操作してオートバジンを近くに呼んだ。これほど巨大なオルフェノクを相手にするのは彼も初めてなのだろう、声色が固かった。
結花は強く頷き、携帯を取り戻しに再び護送車へ戻った。木場はラッキークローバーの二人が戻ってこないことを確認すると、ディケイドとファイズに合流した。
「あいつをここに留まらせればいいのかな？」
「ああ、絶対に倒そうなんて考えるなよ。三人じゃ無理だ」
木場はもちろん、ディケイドにもファイズの考えはわかっていた。見た目からしても、エラスモテリウムは普通の攻撃は効かないはずだ。
だからといって、この場から逃げることはできない。エラスモテリウムを放っておいては、本能のままに街を襲う可能性もある。真理が上手く説得できれば草加の協力も得られる。この怪物を倒すには、今ある戦力を全てぶつける必要があるのだ。そのためにも、今はできうる限り負傷を避けて食い止めなければならない。
簡単なことではない。それでもやらなくてはならない。
「行くぜ……乾、木場」
「……ああ」
ディケイドがエラスモテリウムの足を狙撃したのを皮切りに、ファイズはオートバジンと共に、木場は疾走態に変化しそれぞれのポジションへと着いた。

第9話　始まりの終わり

アイロンがけの終わった洗濯物をハンガーにかけていると、啓太郎の携帯が着信音を奏でだした。画面には『長田』の文字。啓太郎は残っている洗濯物を放り出し、すぐに応答を取った。

「結花ちゃん、無事なのかい!?　……うん、うん」

「おい、結花の奴無事なのか!?」

啓太郎の口から出た名に、海堂が掴みかからんばかりの勢いで尋ねた。啓太郎は困ったように頷き、結花の話を聞き続けた。啓太郎の表情は固く、真理もただ事ではないと察知できた。

「たっくん、すごく大きいオルフェノクと戦ってるって……アレが必要だって!」

通話を終えた啓太郎は簡潔に事態を述べた。それだけで真理は事を理解し、作業もそこそこに放り出した。

「アレね。私が取ってくるから、啓太郎は車回して!」

「私、三原君に話してみる!」

啓太郎は返事もおろそかに表へと飛び出し、里奈は三原の引きこもっている部屋に向かった。その様子に、草加は苦虫を潰したような顔をした。

「真理……まさか行く気でいるのか?」

「当然でしょ。止めても聞かないからね!」

真理は肩越しに振り返るだけだった。ファイズの強化形態を起動するために必要なそれを置いた場所へ、一直線で。

草加は真理のそういうある意味頑固なところをよくよく知っていた。彼女の決めたことを、彼が変えられるはずもないことも。

程なくして里奈がデルタギアのケースを携えて戻ってきた。三原はやはり戦いたくないと言ったのだろう。しかし、彼女はむしろ固い決意を顔に滲ませていた。抱えているものがものである以上、その決意がどんなものであるかは一目瞭然だった。

「仕方ない……君たちだけでは不安だ、一緒に行こう」
「ありがとう、草加君」
里奈の礼を背に、草加はカイザギアのケースを取りに消えた。
海堂は密かに三原のいる部屋に足を向けていた。三原は部屋の隅で物陰に隠れるように縮こまっていた。恐怖に震えているのではなかった。何もかも投げ出して、ただそこに在るだけの存在に見えた。
「お前は行かないのか？」
海堂の責めるような声色に、三原はびくりと体をすくめた。それを無視し、海堂は三原の胸ぐらを掴んで立ち上がらせた。
「いつまでも逃げてんじゃねぇよ。始まっちまったもんはな、終わらせなきゃあ終わらねぇんだ！」
だが、三原は視線を泳がせるだけだった。海堂は舌打ちすると、あっけなく三原を解放した。尻餅を着いた三原が意外そうに海堂を見上げた時には、彼は既に背中を向けていた。
「終わらせるって、俺にそんなことできるのかよ……」
彼には始まっているものの正体すら掴めていなかった。そんなものを終わらせることなどできるのか。
三原は誰に言うでもなく、ただ一人呟いた。
サイの先祖の名を持つだけあって、エラスモテリウムはとにかく頑丈だった。というよりは、なにぶん巨体すぎてダメージをダメージとして感じないのだろう。ディケイドもファイズもブラストでショ

ットを打ち込んでいるが、ほとんど堪えていない。オートバジンの銃撃も同様だ。
オルフェノク態となった木場は、その機動力を生かしてエラスモテリウムの視線を引きつけている。だが、踏み殺される危険もあって攻撃には転じられていない。そのため、エラスモテリウムは既に最初の場所から数メートルは移動していた。
「仕方ない、一発デカいのをお見舞いするしかなさそうだ」
士は考えあぐねた末に、ディケイドの紋章が描かれたカードを取り出した。
本音を言えばもっとダメージを与えてから使いたかったが、出し惜しみしている状況ではない。
「ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ、Ｄｅ・Ｄｅ・Ｄｅ・ＤＥＣＡＤＥ！」
クレインオルフェノクとなって飛翔していた結花が離れたタイミングを見計らい、ライドブッカーの引き金を引く。するとディメンジョンキックの時と同じく１０枚のスクリーンが展開され、エラスモテリウムを捕縛した。そして銃口からマゼンタのディメンジョンブラストが放たれ、激流のようにうねって灰色の巨大を飲み込んだ。
「ガアァァッ！」
十分過ぎるほどチャージしたエネルギーを受け、エラスモテリウムは悲鳴をあげた。だがやはり威力が足りないのか、この怪物はエネルギーの流れに逆らってディケイドへと向かってくる。
「くっ……思った以上に頑丈だったか」
ディケイドは仮面の下で歯噛みした。
一撃で倒しきれる相手ではないとは思っていたが、如何せんこんな巨大すぎる怪人を相手にするのは初めてだ。手応えがわかりにくいことこの上ない。
エネルギー流が消え失せ始めると、エラスモテリウムはディケイドに向かって駆け出してきた。その体からはとても想像できないスピードで、凶暴な凶器にもなる足が迫ってくる。

「士君っ！」
反応しきれずにいるディケイドの耳に、夏海の引きつった叫びが響く。
しかし、エラスモテリウムがあと数歩にまでディケイドに及んだ時、その横っ面に対戦車並みのミサイルが突き刺さった。ミサイルを撃ったのはサイドバッシャーだった。その後ろを大きく迂回し、一台の車がファイズの近くへ横付けした。
「たっくん！」
「巧、ファイズブラスター持ってきたわよ！」
急停止した車から啓太郎が叫び、真理が中から飛び出してファイズブラスターを差し出した。
「ったく、あんま待たせるんじゃねぇよ」
「うるさいわね、礼くらい言いなさいよ！」
ファイズは少々乱暴な言葉使いと共にブラスターを受け取ったが、その仮面の下の表情がわかっている真理にとってはいつも通りのやり取りだった。
「ＡＷＡＫＥＮＩＮＧ」
ファイズはファイズフォンをブラスターに装填し、ブラスターを待機状態にする。更にファイズブラスターの５キーを三回叩き、ファイズギアに再起動をかけた。
「ＳＴＡＮＤＩＮＧ　ＢＹ……」
ファイズドライバーがキーを認証すると、空の彼方―人工衛星イーグルサットから分子分解されたファイズスーツが電送される。これにより、ファイズはもう一つの変身形態ブラスターフォームへと再変身した。
フォトンブラッドが全身のアーマーを包み込み、触れるものを灰化させるほどの熱量を生む。その形態は、まさに燃え盛る炎のよう。
「乾さん、私もやれるだけやりますから！」
準備万端のファイズに呼応するように、里奈の変身したデルタが並び立った。そしてその向かいには、サイドバッシャーを操るカイザ。

ファイズは「マジかよ……」と呟いたが、カイザが何も言わないのを見てため息を吐いた。
「それはいいけどよ、無理はするんじゃねーぞ」
「はいっ！」
デルタの返事は若干固くなり気味だったが、デルタフォンにムーバーをセットする手際は早かった。
啓太郎は真理が車に乗り直すと、すぐにそれを駆って木場と結花の近くに足を延ばした。そして後部座席の窓が開かれ、海堂がそこから身を乗り出した。
「お前ら、一旦ここを離れろ！」
二人はオルフェノク態のまま顔を見合わせ、互いに頷きあって変化を解いた。カイザとデルタが揃った今、二人にできることはほとんどなかった。
肝心のエラスモテリウムは、巨大なミサイルを受けながらもむっくりと起き上がってきた。灰色の体にはいくつかヒビが入り、僅かながらダメージを与えられていることがわかった。
「攻撃が効いていないってことはないみてぇだな……」
「ああ。さっきみたいに、とにかくデカい一撃を食らわせりゃいい」
「だったら君たちの力は必要ないなぁ。この俺一人で十分だ」
二人の会話を小耳に挟んだカイザは、再びサイドバッシャーのミサイルを発射させた。更に爆発の収まらないうちに大きく体の側面へ回り込み、カイザブレイガンでヒビを広げることも忘れない。
それに負けじと、ファイズは背中の飛行ユニットを起動させて空高く飛び立った。立ち上る煙幕の隙間をかいくぐり、ブラッディ・キャノンからエネルギー弾を放つ。その連携プレーに、ディケイドは口笛を鳴らした。
デルタもぎこちないながら、二人にならってデルタムーバーで目を狙った。銀のフォトンエネルギーは僅かに的をそれたが、エラスモテリウムの眉間をこれでもかと焼いていく。
「グァァァ！」

これにはエラスモテリウムも堪えたのか、怒り狂って角から毒針を発射した。三人はそれを上手くかわしたが、反応の遅れた里奈はもろに直撃を受けた。

「きゃああっ！」

変身解除こそ免れたものの、デルタは大きく転倒した。デルタも頑丈なため里奈自身にダメージはないようだが、やはり戦闘経験の少なさが目に見えた。

「里奈、もう少し下がってろ！」

ファイズはコードでオートバジンを遠隔操作し、里奈を庇うような位置に立たせた。里奈はファイズの指示に従い、二人の少し後方でムーバーを構えた。

作戦自体は悪くない。ブラスターとバッシャーは確かに高火力ではある。だが、そのせいでエラスモテリウムに火を付けたことも事実だ。

「おい、もっとヤツを弱らせられないのか？」

ディケイドはマゼンタの弾丸を薙払うように撃ちながら尋ねた。その弾丸は狙い違わず、巨大な口から吐き出された衝撃波にぶつかり対消滅した。

「やりたいのはヤマヤマなんだがな」

ファイズはチラとデルタを見やり、ブラスターを抱えなおした。銃口から太いレーザー砲が放出され、エラスモテリウムを貫こうと猛威を奮った。

「ごめんなさい、私が足手まといなばかりに……」

デルタはオートバジンに守られながら肩を落とした。

デルタの武器はデルタムーバーのみで、ファイズやカイザのように多彩ではない。その分攻撃手段が限られてくるのだ。

「あんまり気にすんな。俺も考えがないわけじゃねぇんだ」

そう言ってファイズはミッションメモリーを提示して見せた。ディケイドは唐突にその意図を理解した。

「そうか……内側から焼き尽くすつもりか！」

表面を撫でるだけでは効かない相手というものは、概して内側が脆いもの。ファイズのクリムゾンスマッシュならば、その内側から攻撃できる。

普通の人間なら、エラスモテリウムほど巨大な相手には近付こうとしないだろう。だが、彼には自信があるのだ。攻撃をかいくぐり、キックを叩き込むだけの自信が。

そして何より、ブラスターフォームのファイズは通常の倍以上の威力を誇るキックを放てる。それだけのエネルギーを内側にまき散らされれば、エラスモテリウムも動きが鈍るはずだ。

「俺だけじゃ足りないなら、草加もやってくれんだろ。門矢はサポートを頼む。里奈は隙を見て撃ってくれ」

「ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ……」

ファイズは流れるような動きでメモリとポインターを接続し、右足にそれを取り付けた。ディケイドは返事の代わりとして標的の正面に回り込み、角目掛けて挑発を始めた。

サイドバッシャーのミサイルが作った煙幕は、まだまばらに散らばっていた。ファイズはその陰を出入りし、徐々にエラスモテリウムへと近付いていく。

そして視界が回復し、吼え声が周囲を轟かせた時。ファイズの体は高々と跳躍していた。

「おりゃぁぁぁぁっ！」

紅のポインターを突き抜けるべく、ブラスターフォームの足が中心に突き刺さる。円錐の先はエラスモテリウムの体に食い込まんばかりに、その表面を削っていく。そのスピードは常からすれば、とても遅いものであった。

巧の言った通り、まだ足りないのだ。弱らせる名目といえど、貫くためには相手の体力が残りすぎている。

その助けとなる一波は、もちろんカイザから差し伸べられた。カイザの黄色いフォトンポインターが、灰色の怪物を真横から穿とうとしている。

「ガァァァッ！」
エラスモテリウムは二つの拘束などないかのように足を引きずった。今度こそディケイドを踏み潰すつもりか、一歩また一歩と進んでいる。
「やっぱり私も……！」
デルタはオートバジンの陰から走り出し、ミッションメモリーからチャージをしようとムーバーを構えた。そんな彼女の行く手を、オートバジンにしては小さな影が遮った。
「……三原君！？」
三原は呆然として立ち止まった里奈の腰からベルトを外し、眉を寄せつつ微笑んだ。
「ごめん、里奈。俺……やってみるよ。俺の手では終わらなくても、終わらせようとしなきゃ何も始まらないってわかったから」
「……うん！」
銀の光が失せると共に、デルタの下から里奈の姿が現れた。三原は手早くベルトを巻き付けると、デルタフォンを耳に当てて叫んだ。
「変身！」
フォトンストリームが三原の周囲を取り巻き、デルタの装甲が正式な資格者を迎え入れた。恐怖を知るからこそ正しき使い手として選ばれた彼は、恐怖を感じながらもそれに立ち向かうことを選べる思いを見出した。
デルタは変身して間もなくポインターを出現させ、エラスモテリウムの動きを完全に封じた。その途端に黄色のフォトンストリームが反対側へと吹き出し、ついに明確なダメージを負わせた。続いてファイズのクリムゾンスマッシュが炸裂し、角の一部を抉りつつエラスモテリウムの体内を駆け抜けていく。
「てやぁぁぁっ！」
デルタは輝く円錐の示す先に、全体重をかけて落下した。文字通りデルタ自身が悪魔の鉄槌となり、叩き潰さんばかりのフォトンが溢れ出した。

「グォォォ……！」

三つのフォトンストリームが合わさった効果は絶大だった。エラスモテリウムの巨体は、大きな地震と共に横倒しになった。その全身は、どこもかしこもぼろぼろにひび割れていた。

「よーし、あともう少しだ……！」

「待ちな乾、お前も長期戦で疲れてんだろ」

ディケイドは息も切れ切れなファイズを制した。流石の彼も素直に立ち止まり、訝しげにディケイドの顔を伺った。

「強力そうなカードがもう一枚残ってたのを思い出してな。せっかくだ、お前たちに見せてやろう」

そう言ってディケイドは唐突に絵柄の現れたカードの一枚、ファイズマークを模した重火器のカードを見せびらかした。

「そりゃあ一体？」

ファイズ・カイザ・デルタが見守る中、ディケイドはサイドハンドルを引いてカードをドライバに挿入した。

「ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ、Ｆａ・Ｆａ・Ｆａ・ＦＡＩＺ！」

「……何も起こらない、だと？」

しかし、今度のカードは音声が発されてからいくら待っても何かが起きる気配はなかった。

エラーもなくベルトに読み込まれたことは、ベルトから発された音声が示している。しかし、このカードは今まで使っていたカードとは何かが違うようだ。

カードの効力が発動している以上、何か変化があるはずなのだが……。

「おい、何かするつもりじゃないなら俺が行くぞ！」

ファイズはディケイドがもたもたしているのだと思ったのだろう、立ち上がろうとしているエラスモテリウム目掛けて走り出した。

「ま、待て乾！」

ディケイドは飛び出したファイズを追いかけていき、真っ赤に燃え

るその腕を掴み取った。―いや、正確には「取ろうとした」。ディケイドの手がファイズに触れた途端、ファイズの装甲が光を発しながら変形し始めたのだ。

紅のフォトンストリームが引き潮のように消えていき、元のサメに似た装甲へと戻っていく。そして胸部から下の装甲は銃身へ、腕の部分は大きく回転して双眼のスコープへ。

ディケイドが呆然と見つめる中、ファイズはカードに描かれていた重火器へと変貌してしまった。

「お前、一体何をしたんだ!?」

ファイズは重火器に変じてからも意識があるようで、どこかからか怒鳴り声をあげた。

（なるほど、そういうことか）

ディケイドはようやくあのカードの使い方がわかった。ＦＦＲカードは、使った後にライダーに触れる必要があったのだ。

「文句は後で聞いてやる。今はあのデカブツを潰すぞ」

ディケイドはファイズの変じたファイズブラスターを携え、エラスモテリウムに向き直った。

「狙うのは……奴の角の付け根だ」

構えた銃口を、寸分の狂いなく付け根に定める。そこにはエラスモテリウムの本来の体であろう、人間の頭部のようなものが残っていた。その部分のみがあるということは、そこが中枢となるべき本体になるはずだ。

ディケイドは指をかけていたトリガーを引いた。ファイズブラスターの銃口から赤い円錐状のポイントが発射され、エラスモテリウムを拘束する。その間にディケイドはもう一枚のファイズマークが刻印されたカードを読み込ませた。

「ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ、Ｆａ・Ｆａ・Ｆａ・ＦＡＩＺ！」

ブラスターに充填されたエネルギーは、再びトリガーが引かれたことで放出された。ディケイドフォトンは真っ直ぐにエラスモテリウ

ムの角の付け根にぶつかり、その表面を焼いていく。
「グアァァァッ！」
ディケイドが睨んだ通り、そこはこの巨大唯一の弱点であったようだ。エラスモテリウムは痛みに身悶え、拘束を破ろうとするように体を揺さぶった。その暴れ様はまさしくサイで、盛んに頭を振り乱している。
そして遂に。紅のフォトンストリームがファイズのシンボルマークを描いた。エラスモテリウムの体はみるみるうちに灰となり、流れ落ちる砂のように崩れ去った。
「やれやれ、手こずらせてくれたもんだ」
ディケイドが腕の中からブラスターのファイズを解放すると、ファイズはあっという間に人の形態をとった。
「全く……俺はオートバジンじゃねぇぞ」
フォトンストリームが消えていき、ファイズから巧へと姿を変えた。その顔は不満たらたらなもので、変身を解除した士は思わず笑ってしまった。
大量の灰を後ろに、草加と三原がその場に腰を降ろした。束の間の休息となるだろうこの時間を噛み締められ、二人とも心なしか笑顔を見せている気がした。

第9話　始まりの終わり（後書き）

もう気付いた方もいると思いますが……
ＥＲＥＳＩＡの士はディケイドの力の使い方がわかっていない設定です。まあせっかくやるからには、ＴＶ・劇場版とは違う設定でいきたかったわけで。
それを強調するため、ＦＦＲの完全発動のためにはカードを使ってからライダーに触れるという条件をつけました。
ＴＶ版では触らなかったことなんてなかった気がしますが、そんな条件があるかは覚えていなかったという。↑

第１０話　次なる道へ

西洋洗濯舗菊池は初めて士たちが訪れた時と同じように、通常の業務を再開していた。啓太郎が表のシャッターを上げた向こうには、からりと晴れた青空が広がっている。こんな日はクリーニングの依頼が少ないものだが、あの戦いの後とあってか彼の表情も晴れやかだ。

「うーん、洗濯日和だねぇ」

大きく伸びをする啓太郎の横では、木場がオートバジンを洗車していた。いつもならそこには草加とサイドバッシャーの影があるのだが、まだオルフェノクの三人がいることを許せないのだろう。

三原と里奈は一旦洗濯舗で休んでいき、今朝方新しい住処に去っていった。特に三原は見違えるほど強い目をするようになり、デルタとして戦うに申し分ない戦士になりそうだった。

「お前んとこには世話になったな。今回は良い絵が撮れていそうだ」

士はカメラを構えながら礼を述べた。その中には、戦いの場から帰る前の写真も収まっていた。

「ううん、俺たちも士君には助けられたよ。たっくんのこと、代わりにお礼を言うね」

啓太郎は朗らかに応えた。当の巧は、まだ奥の方で熱々の朝食を冷ましながら食べている。

彼からの礼は確かになかった。その代わり、士は起きてすぐ巧に「よう」と声をかけられた。最大限に解釈すれば、これを礼と取っても構わないだろう。

「啓太郎、私そろそろ行ってくるから！」

大きなカバン片手に、身支度の整った真理が店先に出てきた。啓太郎が「行ってらっしゃい！」と手を振れば、彼女はにっこり笑って自転車に跨った。やる気に満ちた眼差しが見つめる先は、きっと彼女の思い描く未来だろう。

「さあて、開店開店！」
啓太郎は腕をまくりつつカウンターへと歩いていった。カウンターには既に結花の姿もあり、士に向かってゆっくりとお辞儀した。
「門矢君、俺からもお礼を言わせて欲しい。俺だけじゃ、乾君の力にはなれなかった」
木場は洗車の手を止め、握手を求めるように差し出してきた。士はその手をポンと叩いてニヤリと笑った。
「当然だ、俺にできないことはない。写真を撮ること以外はな」
士は周りに夏海の目しかないことを確認し、そっと木場の真横に立った。
「問題はこれからだ。スマートブレインはお前たちを追うだろう……これまで以上にな」
「うん、覚悟はできてるよ」
木場の顔が緊張で引き締まり、固く強く頷いた。木場たち三人は前々からスマートブレインのマンションから立ち退いていた。あの戦いでファイズの勢力に加わったことを公言したようなものだが、元からそのつもりでいたに違いない。
ただし、洗濯舗もあまり広くないため、木場たちはこの先新しい住処を探すことになるだろう。
「まあ、お前たちなら何があっても大丈夫だろ。あの調子ならな」
士は賑やかになってきた店内に目を向けた。海堂が何かを間違ったのか、巧のガミガミとした声が響いている。海堂も海堂で開き直っているようで、あまり反省しているような声ではなかった。結花のなだめるような声は、二人の言い争いに埋まって聞こえにくい。そんな三人の会話を、啓太郎が誰よりも嬉しそうに聞いていた。
「それじゃあ、私たちもう行きますね」
二人の会話が途切れた時を見計らい、夏海が軽く頭を下げた。
「そっか。また、会えるかな？」
木場の寂しげな声で、士はハッと思い出した。士たちは異世界から来たという話はしたが、その世界を転々とするつもりでいることは

話していなかった。
この世界と共通点を持つ何かがスクリーンに描かれていれば、同じ世界に行けることもある。夏海は最初の転移でそう言ったが、だからといってそのスクリーンがあるとは思えない。
だが、士はすぐに応えを思いついた。
「また俺の力が必要になれば、会えるだろ」
木場はフッと微笑を零した。士は最後にもう一度シャッターを切り、夏海に先立って歩き出した。夏海は再度洗濯舗に向かって頭を下げ、士と共に写真館への帰路についた。

見納めになるかもしれない世界を満足いくまで写し、光写真館へと戻ってきた。
ファインダーの中の世界は変わらず士を拒絶していた。けれどそれも気にならない。洗濯舗の人たちはレンズを向けると笑顔で写ってくれた。だから写真がブレていようと、栄次郎なら気に入ってくれるはずだ。
そんな思いを胸に、士は光写真館の扉を開いた。
「ただいま、お祖父ちゃん」
夏海の元気いっぱいな声は、空っぽの室内に消えただけだった。また奥で菓子でも作っているのか、時計の針が時を刻む音しか聞こえない。
「俺は写真を現像してこよう」

今のところここへ怪人が来ている様子はない、そのくらいの時間はあるだろう。そう考えた士は室内が荒れていないことを見て取り、とっとと現像室へ足を運んだ。

暗室はいつでも写真を作れるよう、機材が出しっぱなしになっていた。それは士のためでもあって、ここに入るといつもなんだかこそばゆい気持ちにもなる。士はそんな思いを抱えながらカメラからフィルムを取り出し、もくもくと現像に取りかかった。

最初の数枚は景色のもの。途中からスマートブレインや洗濯舗など建物も写っていたが、やはりどれもぼやけたりブレたりしていた。そんな中で一際目をひいたのは、もちろん最後に撮ってきた写真だった。

熱々のお好み焼きを出されてむせている巧。それを笑っている真理。一生懸命アイロンをかける結花に、彼女を優しく指導する啓太郎。海堂はうたた寝する木場にハンカチを結ぶというイタズラをしていたし、それが見つかって真理に怒られている場面まであった。

これらもみな二重になっていてとても売れるようなものではなかったが、改めて撮って良かったと思った。みんながみんな生き生きとしていて、眩しいくらいに輝いていた。

士は出来上がった写真の一枚をしげしげと眺めた。そこにはが巧と木場と真理が写っている。巧にはファイズの、木場にはオルフェノク態の顔がブレて重なっていた。三人は一様に何かをやり遂げたという顔で、コンと拳をぶつけ合っていた。

（爺さんに見せるのはこれだな）

早速夏海にも見せようと綺麗に乾かした矢先、キッチンの方で何か物音がした気がした。思った通り、栄次郎は台所にいるらしい。士は残った写真をまとめて隅に置き、栄次郎を探しにキッチンへ入った。しかしそこに彼の姿はなく、テーブルには何も置かれていない。ブックラックも栄次郎が集めたらしき料理本が整然と並んでいて、調理道具まで綺麗に片付いていた。何かを作った後ならその跡があるはずだが、その痕跡もない。

「おい爺さん、どこにいるんだ？」
調理場用の掃除用具がしまってある戸棚に近付いた時、その後ろからぬっと栄次郎が歩いてきた。
「おっと、士君か。びっくりしたよ」
おどけたように言う栄次郎だったが、どこか浮かない顔をしている。
珍しいものを見た気がして、士は静かに瞬いた。
「お祖父ちゃん……ああ、二人ともここにいたんですね」
「お帰り、二人とも」
そこへ夏海もやって来て、栄次郎はやっといつもの柔和な雰囲気に戻った。
「その顔からすると、上手くいったんだね？」
栄次郎の言わんとするところは、恐らくこの世界の仮面ライダーのことだろう。士は待ってましたとばかりに、現像した中で一番の出来を掲げた。
栄次郎は写真を見るなり目を細め、手にとってじっくりと眺めた。
夏海の反応も「良い顔してますね」と上々で、ブレなどないかのようだ。
「もう一つ良い知らせがあるぞ。俺は仮面ライダーファイズの力を手に入れた」
「えっ、それは本当かい？」
写真から顔を上げた栄次郎に、今度は絵柄の現れたカードを渡した。中にはあの時出てこなかった、オートバジンの描かれたカードもある。
何度かカードと写真を見比べた栄次郎は、みるみるうちに目を輝かせた。
「そうか、それなら……よし！」
彼はカードを士に返すと、急ぎ足でキッチンを出て行った。二人がスタジオフロアに入った時には、部屋の雰囲気ががらりと変わっていた。
何かおかしいとよくよく窓辺を見れば、外には灰色のオーロラが広

がっていた。―写真館が次元の転移をしている。
「えらく忙しないな。一体どうしたんだ?」
「私たちは一応追われてる立場だからね。あまりファイズの世界に長居はできないよ」
栄次郎は背景スクリーンを見上げながらそう言った。そこに描かれた絵は、先ほどいた世界を現すものではなくなっていた。砕け散るガラスの破片の中、勢い良く躍る赤い龍の絵だ。
「次の世界だって、どこに始まりの世界の者がいるとも限らない。用心するんだよ」
「わかっているさ。俺を何だと思っている?」
士は心配の色を打ち消すように、自信満々で応えた。何が待ち受けていようと、やらなければならないことは変わらない。ならばそれを完遂できるのも、ディケイドとして戦える自分だけだ。
しかし、栄次郎はあまり聞いていないように見えた。何か他に気になる事象があるのか、一点を見つめてふらふらと歩き出した。
「お祖父ちゃん?」
夏海も不思議そうに祖父を見つめた。それでも栄次郎は彼女すら素通りし、窓ガラスに食い付いた。
最初の転移の時と同じ、宇宙空間がずっと広がっている。けれど何故か、星の河は動いていない。それに、いくつも並んでいた地球がどこにも見当たらない。
「まさか、妨害された?」
栄次郎の言わんとすることは一つ。誰かが―或いは始まりの世界の者とやらが、光写真館の次元転移を邪魔したということ。
栄次郎が次の行動を起こす前に、写真館が大きく揺れた。棚から物が落下し、壁に掛かった写真入りの額が外れる。やがて緩やかな揺れが家を震わせ、三人はそれぞれ近くのソファに掴まった。
「二人とも、今は堪えて。多少住所のズレはあっても、世界自体がズレたりはしないから!」
栄次郎の言葉に従い、士と夏海はそのままソファを頼りにした。栄

次郎は思ったよりずっとしっかりソファにしがみついているし、心配ないだろう。

スクリーンの絵は変わりなく赤い龍を収めている。ファイズの世界、そう呼ぶ方が便宜的な世界の時でも、コーヒーをぶちまけられて無事だったのだ。この程度のことで失われるものではないはずだ。

そう考えた士は、スクリーンから目を逸らさず揺れを耐え続けた。

ある街の一画に、ガラス張りのビルが立っている。通行人は何の変哲もないビルに目もくれず、忙しない都会の喧騒に紛れていく。しかし、そこには映るはずのないものが映っている。映り出す対象の

存在しない鏡像―赤を基調とした、鉄仮面の戦士が。
戦士は何かと戦っているのか、戸惑いつつも剣で相手の攻撃を受け止めていた。ほとんど反撃に出ることもできず、ただ後退するばかりだ。
やがて戦士は何かに吹っ飛ばされ、ガラスの表面へと浮き上がってきた。
「うわっ！」
戦士はまるで鏡像が実体になったかのように、ガラスの外へと吐き出された。そして地面にうずくまる戦士の姿がぶれ、一人の青年に変化した。青年の名は城戸真司。ＯＲＥジャーナルの駆け出しジャーナリストだ。
真司は今まで自分のいたガラスの中を見た。そこには街並みが映るばかりで、彼を押し出したものはどこにもなかった。
「あー、くそっ……」
生傷の残る顔を拭い、真司は立ち上がった。それでも通行人はただ転んだだけだろう、と全く取りあいもしなかった。
心身ともに疲弊していて、とにかく休む場所が欲しかった。仕事がある身だったが、あちこちできている傷で何か追求されるわけにもいかなかった。
真司はもやもやしたわだかまりを抱えながら、どこに行くあてもなく歩いた。何を探しているのかもわからず、何を見つけたいのかもわからずに。
すれ違う人々は日常を当たり前のように享受し、当たり前のように日常に溶けていく。ある人はスーツに身を包んで、ある人は流行の服を着て。すぐ近くに潜む非日常など、誰も気付きはしないのだ。
その瞬間に遭遇するまで。真司だって、ほんの少し前はその中の一人だった。
「……あれ？」
唐突に街中に現れた違和感は、いつもの違和感と違った。その前を通り過ぎる人々も一瞬不思議そうな顔をするのだが、他に用事があ

るのか立ち止まりはしなかった。
「ここって、喫茶店じゃなかったか？」
しかし、真司の前にある看板は確かに「光写真館」と書かれていた。
モダンな雰囲気の外装が凝っていて、まるで昔からあったかのような年季を感じる。
今の時代、写真館というものは珍しくなっている。けれど写真の質はやはり、未だプロの腕によるものの方が勝っていることを真司は知っていた。
「ちょっと入ってみるか……」
特に写真が必要ということもなかったし、取材しろと指示されたわけでもない。ほんの少しの好奇心が、真司をこの写真館に引き寄せてやまなかった。
高鳴る胸を落ち着かせ、一歩踏み出して写真館の扉に手をかけた。

第１１話　熱血ジャーナリスト

静まり返った室内で、三人はまじまじと今の状況を確認した。窓に映る景色は街並みに戻っていた。違うところがあるとすれば、ガラス張りのビルが多い点だろうか。

写真館の室内はちょっとした惨状になっていた。あちこちものが散乱していて、片付けなければ店としての景観が悪い。一番悲惨なのはフォトフレームかもしれない。いくつかはガラスが割れていて、使いものになりそうになかった。

三人の中で誰より先に動いたのは士だった。つい先ほどまで入り浸っていた現像室に直行し、部屋の中をくまなく見回した。幸運なことに、機材が破損したり薬品が落下していたりということはなかった。次いで現像したての写真の無事もわかり、一先ず安心といったところだ。

「士君、片付け手伝って下さいよ！」

現像室の入り口に立つ士へ、夏海の非難じみた声が届く。二度も自分本意に動いたのだ、次は確実に笑いのツボ攻撃が飛んでくるだろう。それだけは是非とも避けたかったので、士は素直に従った。

改めて部屋を見てみると、落下物は思ったほど多くなかった。額縁入りをフックや釘に引っ掛け、割れたガラスを箒とちりとりでかき集める。ズレた棚の位置は一旦中身を出して軽くし、士一人で元に戻した。夏海と栄次郎はそのついでに掃除まで始めて、写真館は世界転移前より綺麗になった気がした。

「掃除中にお客さんが来なくて良かったよ。ここだけ地震があった、なんて言い訳できないしねぇ」

「全くだな」

栄次郎の言うことは最もだった。普通の一般人相手に、異世界だなんだと言っても信じないだろう。

そう思っていた矢先、写真館の扉が開かれた。青いジャンパーを着

た青年は店内を目にした瞬間ポカンと口を開き、じっくりと室内を見渡した。その途端、栄次郎は見るからに機嫌が良くなった。
「いらっしゃい。タイミングがいいね、君。今ちょうど綺麗になったところなんだ。名前は？」
「え、あ……俺は城戸真司です」
青年は栄次郎の勢いの良さに若干戸惑いつつ名前を述べた。大体の客はここを喫茶店と間違えて来るのだが、この真司という青年はそれを尋ねる様子がなかった。彼は本当に久々の客になるのだろうか。
「それで、用向きは何かな？」
「いやあの、物珍しさっていうか。ちょっと覗いてみたいな～って」
真司は申し訳なさそうに人差し指を突き合わせた。
「あっ、でも！　こう見えて俺、ジャーナリストやってて。新人だから記事にしてもらえないかもしれないけど、良かったら取材させてもらえませんか？」
一気にまくしたてた彼の勢いも、栄次郎に負けないものだった。熱意とノリだけにも見えるが、紙とペンを用意する速さは目を見張るものだった。
「そうだねぇ、士君の写真を理解してくれる人を増やす機会になるなら。良いだろう？」
栄次郎の目が向けられ、士は自分の同意も欲しいのだと気付いた。真司まで好奇の眼差しを送っていて、悪い気はしなかった。
「ふっ、良いだろう。この俺の才能が認められないわけがない」
士は三度現像室に足を運んだ。ファイズの世界で撮った写真以外も、この部屋にしまいこんである。
日の目を見ることのなかった写真が、とうとう世に出られるかもしれない。そう思うと、いつになく足取りが軽かった。
士は選んだ写真を机に並べた。
真司は写真を見た途端、怪訝そうな顔をした。一枚一枚、ブレていない写真がないかを探していたが、それも無駄な話だ。士とて、ブレのない写真がないことくらいわかっているのだから。

「これ、その……士が撮った写真なのか？」
「ああ」
やはりダメだったか。そう思って視線を落とした士の耳に、意外な言葉が聞こえた。
「もったいないなぁ、これ」
「もったいない？」
士はオウム返しに尋ねた。何しろ、こんな反応が返ってきたのは初めてのことだった。
「そうそう、あれなんか特に。あれも士の写真なんだろ？」
真司が指差した物は、天真爛漫に微笑む少女の写真が入った額縁だった。草木が風にたなびく丘で、レンズの向けられた側に振り返っている。これも例外なくブレているのだが、士はこの写真を気に入っていた。
「まあな。俺が初めて撮った記念すべき写真だ」
士は懐かしい思いを胸に述べた。
記憶のない士にとって、写真館での記憶は唯一鮮明に思い出せる記憶だ。二眼レフを肌身離さないのも、新しく作ってきた記憶と共に歩んできたものだからだ。
「へぇ……そうなのか。なあ、その話もっと詳しく聞かせてくれよ！」
真司はついに前のめりになって耳を傾けた。ところがその時、彼のポケット辺りから携帯電話の着信音が鳴りだした。真司は手にしたメモの置き場所でしばらく迷った後、５コール目程でやっと携帯を取った。
はい、はいと丁寧な応えを返すところから見て、相手は恐らく彼の上司だろう。電話の向こうにいる相手に対して、深く頭を下げている。
「ごめん、一旦戻らなきゃならないみたいだ。悪いけど、一緒に来て会社の方で待ってもらってもいいか？」
「仕方ないな。行ってやろう」

申し訳なさそうに頭を下げた真司に、士は二つ返事で了承した。
「ちょっと、士君！」
「ありがとう。多分ここからならそんなに遠くないから！」
夏海が士に文句を付けるより早く、真司が帰社準備を整えた。栄次郎は少々残念そうにしていたが、「ぜひ、また来てね」と小さな菓子袋を渡した。真司はそれを受け取るなり、バタバタと写真館の扉を抜けていった。
「私たちには取材なんて受けてるヒマはないんですよ。何を考えて……」
真司が表に消えてすぐ、夏海が眉をつり上げて迫ってきた。士はそんな彼女の鼻っ面を指で押さえ、ニヤっと口角を上げた。
「この世界の仮面ライダーや怪人がどんな活動をしているかは知らんが、大きな動きであれば報道機関でも掴んでいるはずだ。運が良ければ真司の会社で情報が見つかるかもしれないぞ」
士は二眼レフとディケイドライバを忘れず携帯し、真司とは逆にゆっくりと家の敷居を跨いでいった。
「あ、なるほど……」
夏海は妙にやる気な士の態度に、若干の戸惑いを感じると同時に納得もしていた。今まで士の写真を肯定的に見てくれたのは、栄次郎ただ一人。それが今日初めて真司から話を聞きたいと言われて、この世界で仮面ライダーを探す原動力にもなったのだろう。
実のところ、巻き込んでしまったんじゃないかと思ってるんだ。
ファイズの世界で士が眠っていた時、栄次郎がそんな風に言っていた。けれど夏海は、この旅で待ち受けているものが、悪いことばかりではないと思う。真司のように、色んな人が士の写真を受け入れてくれる人が現れてくれるなら。
「士君、待って下さい！」
だから、自分も一緒にそういう人たちを探したい。夏海はそんな思いを胸に、士の後を追いかけた。

真司のバイクに着いていくこと数分、彼の働くＯＲＥジャーナルは本当にあまり遠くはなかった。あの時栄次郎は妨害されたと呟いていたが、その妨害は思わぬ方向に働いてくれたのかもしれない。ジャーナルに着いて早々、士たちは客間に通されて待つことになった。ＯＲＥジャーナルはそれほど大きな会社ではなかった。携帯電話で配信しているというし、規模が小さくとも問題ではないのだろう。それに携帯電話という情報媒体の使用ならば、仮面ライダー関連の情報が大企業に潰される心配も少なさそうだ。

もう一つ収穫があるとすれば、期待していた通り近々配信予定の記事を見せてもらえそうなことだ。編集長からは「企業秘密なんですがねぇ」と釘を刺されつつも、一部なら持ってくる、と今は記事待ちだ。ジャーナル側としても、購読者獲得に繋がるならばと思ったのだろう。

「門矢さん、お待たせしました。これが近々配信予定のニュースです」

ＯＲＥジャーナルの記者の一人、桃井令子が資料を持ってきた。優秀な記者とあってか、手際よく資料を机に並べていく。それが済むと、あっという間に仕事場へ戻っていった。今は他の記事の仕上げも控えているのだろう。

「これで一部って、随分サービスしてもらっちゃいましたね」

「一番の目玉記事なんだろ。そうでもなきゃ俺の目を引くことはできないな」

士は資料の中から最も気になった一枚を取り上げた。トリミング後少し大きめに引き延ばされた写真なのか、少し印刷が粗い。しかし、

それでも何が写っているのかは十分わかった。
例えるなら、緑色の鉄人形だろうか。牛の角をモチーフにした、鉄仮面を被っている。人のような姿ではあるが、仮面ライダーではなさそうだ。説明文には「鏡の中の怪異」と書かれている。一見都市伝説じみているが、この姿からしてこれがこの世界での怪人にあたる存在に違いない。
「良かった、二番目の世界でもかなり早めに情報がわかりそうですね」
夏海も別の資料に目を通していたのか、ホッと一息を吐いていた。
まだ仮面ライダーが何人いるか、どんな人間かはわからないが、怪人がわかっただけでも話は違ってくる。
「だが、気になるのは鏡の中というところだな。まさか鏡の中から現れるのか？」
士は夏海にも見えるように、資料を大きく広げた。ミラーモンスターと名付けられたこの存在、名前の通り鏡の中に生息しているようだ。つまり、鏡の外では遭遇できないということ。それは仮面ライダーも同じはずだ。
爺さんからもっと詳しい話を聞くべきだったな……。
士は自分のケアレスミスに頭を抱えた。思えばディケイドの能力は端的にしか聞いていない。果たして、ディケイドにも鏡の中に入る力はあるのだろうか。
「多分そうだと思います。でも、ディケイドにはそんなこと関係ないって聞いたことがあるような……」
「何？　そりゃあどういう意味だ」
士は驚き半分興味半分に先を促した。
まさか夏海がディケイドに詳しいとは思ってもみなかった。そういえばずっと長い間ディケイドライバを守ってきたとは聞いたが、それがどれほどの間かは話されていなかった。
「ディケイドは理を破壊する。つまり色んな世界の仮面ライダーにかかる制約が、ディケイドには無効だってことらしいです」

小さい頃、お祖父ちゃんが教えてくれました。夏海は何でもないことのようにさらりとかなり重要な話を締めくくった。

何故栄次郎は夏海にそんな話をしたのか。士が写真館に来る前は、夏海がディケイドの候補者とされていたのだろうか。

色々可能性は考えられたが、今考えるべきことではない。この世界の仮面ライダーを見つけることが先決だ。

そう考えて、士は話を戻すことにした。

「なら、ディケイドに変身すれば鏡の中にも入れるかもしれないのか。試してみる価値はあるな」

士は夏海の見ていた資料にも目を通してみた。鏡の向こうから現れるモンスターと、一年程前から謎の失踪が続いていることの関連性。更には凶悪な犯罪者までもが警察の手から逃れたことなどにも、鏡の向こうにもう一つ世界があることが関わっていると書かれていた。士は既に沢山世界があると聞かされていたので、鏡の中の世界は恐らくそれと似たような存在だろうと推察した。行き来に鏡を媒介にしただけで、異世界であることに違いはない。

気になるのは犯罪者も仮面ライダーの力を手にしているらしいことか。それならば何故、仮面ライダーになるための制約を設けなかったのだろうか。例えが極端になるが、先の世界のように蘇った死者のみだとか。

「士、退屈してなかったか？」

ちょうどその時、真司がひょっこり客間に顔を出した。士は読んでいた資料を畳み、まとめて夏海に手渡した。

「編集長がやっと放してくれてさ。さ、続きを聞かせてくれよ！」

休む暇なく働いているのか、彼の顔には若干疲れが見えた。けれど一度取材モードに入ると、その疲れも忘れてしまったらしい。そわそわと落ち着かない様子でペンとメモとを構えていた。

「そうだな……。あの写真はな、栄次郎爺さんにもらったこの二眼レフで取ったんだ」

その当時の士は見るもの全てが記憶にない場所で、どこへ行けば良

いのかもわからないという完全な記憶喪失状態だった。しばらくはリハビリということで入院していたのだが、日常生活を送ること自体は可能で。身よりも行く場所もない士がなかなか退院できないことを見かね、栄次郎が写真館へと招いてくれた。

君を犬猫扱いするわけじゃないんだけど、と苦笑した彼の顔は忘れられない。傷だらけで倒れていた士を助けてくれたのも、彼とその孫娘だった。

写真館に居候することになってすぐ、士は一枚の写真に目をとめた。それは一見何でもない写真だったけれど、そこに写る少女―これは夏海のことだ―はとても嬉しそうに笑っていた。

それから栄次郎はどういうわけか、酷く熱心に写真の現像方法を教えてくれた。マスターするまでに幾ばくもなかったことも十分彼を驚かせたが、士が初めて撮った写真には叶わなかった。

そこまでできる限り詳しく話をしているうち、ぐすぐすというすすり泣きが聞こえだした。なんと真司は人前で恥も外聞もなく泣いていた。

「お、おい……真司？」

「そっか、士も大変だったんだなぁ。それなのに、俺は無神経に聞いたりして。ごめんな、ごめんな」

真司はぼろぼろ零れ落ちる涙を拭い、二回も謝罪の言葉を述べた。士は別に感傷に浸ったつもりはなかったのだが、この真司という青年はどうも感じやすいタイプの人間らしかった。

「あ、あの真司さん。士君、確かにちょっとは悩むこともありますけど。でも変に前向きっていうか」

夏海はなんとか真司を泣きやませようと、言葉を探しながらなだめかけた。真司はくしゃくしゃになった顔中を、ポケットからちり紙を取り出して綺麗に拭った。そして夏海が手をつけなかった紅茶を一口もらい、ようやく涙がおさまった。

「人間だから当然なんだ。みんな同じなんだよな……」

真司はやけに達観というのか、何かを悟ったかのようにしみじみと

呟いた。
「俺さ、馬鹿だから。みんながみんな、色んなもの抱えて生きてるなんて思いもしなかったんだ。だからそいつらの考え方とか、否定したり変えようとしたり」
士は何か言うにも言い出せなくなっていた。真司は単なる熱血漢ではない。そんな直感がそうさせたとも言える。
「でも、色んな奴に出会ってわかったんだ。誰一人として、何も抱えていない奴なんかいないって」
「そう、だな……」
どうしてか、真司の独白に安堵を覚えた。失った記憶の中で、士が何かを抱えていたからなのか。それとも今の記憶のない状態が抱えているものだからなのか。
ただ、真司はどうしようもなく真っ直ぐで。そしてどうしようもなく優しい人間なのだと思った。
「よし、話を聞かせてもらったお礼だ。俺の手作り餃子、食べさせてやるよ」
真司はもう気を取り直したのか、立ち上がって両腕の袖を肘まで捲った。泣いていた時の切なげな顔は、見る影もない。
「えっ、良いんですか？」
夏海は真司の仕事を心配したのだろう。桃井の忙しそうな様子を見れば、締め切りか何かが近いことは明白だ。
「大丈夫、今日の分はとりあえず終わってるし。おっと、味の心配はしなくて良いぞ。料理上手な知り合いのお墨付きだぜ！」
「ほう、言うじゃないか。俺を唸らせられるかな」
士は意地悪く言ったつもりなのだが、それは逆に真司の火を付けたらしい。「っしゃあ、絶対唸らせてやる！」と俄然張り切りだしたからだ。
「そんじゃ、またちょっと移動するからな。花鶏ってとこが俺の世話になってるところなんだ」
真司は張り切った気合いのままに部屋を飛び出して行った。士はガ

ラにもないと思いながらも、ふわり微笑んだのだった。

第１２話　日常に潜む非日常

じゅううっと香ばしい匂いが漂い、空腹感を促進させる。ちょうど休業日だった花鶏で、真司はキッチンを借りて餃子を作り始めた。オーナーの神崎沙奈子も途中まで手伝っていたが、味付けの段階は真司に任せていた。

一連の流れはとても手際が良かった。キャベツは極細の千切りに、ニラ・ニンニク・生姜はみじん切りに。餃子を焼く段階に入っても、皮同士がくっつかないよう適度な感覚で並べられていた。

「そろそろだな」

真司が火を止めてフタを取り払った途端、蒸気とともにキツネ色に焼けた餃子が現れる。ザッと皿に盛られたところで、特性のタレが小皿で付け合わされた。

「おまちどー！　さあ、食べて食べて」

真司は自信たっぷりに胸を張って言い放った。士は箸で餃子を一つ摘み、小皿の上で割ってみた。たちまち中から肉汁が溢れ出し、ほくほくと湯気を立ち上らせた。

「わぁ……すごく美味しいです！」

一足先に餃子を口にした夏海は、感嘆の声をあげた。真司は照れくさそうに鼻の下を撫で、「遠慮しないでもっと食べろよ」と催促した。

「ふん。まあまあやるじゃないか」

士はそう言葉を濁したが、確かに美味いので箸を止めることはなかった。栄次郎の料理もなかなかのものだが、それに並ぶ程の味だ。

「正直に言えよ～。口元緩んでるぞ？」

「さて、何のことだか」

士はうりうりと肘で突いてくる真司を押しやり、一番に目がいった鼻を摘んだ。せっかく早くも仮面ライダーの情報が掴めたのに、それについて話しをするタイミングを失った腹いせだ。

写真を誉められた（？）以上、真司の好意を無碍にする気は起きなかった。だが、仮面ライダーの話は一般人のいるところでするものではないだろう。この世界でどんな立ち位置にあるのかがまだわかっていない。

「何をやってるんだ、お前は」

ほんのり赤くなった鼻を労っている真司に、葬儀の参列者のような全身黒尽くめの男が呆れた声で呟いた。

「知り合ったばかりの相手に餃子を作る余裕があるなら、俺からの借金を返す余裕もあるんじゃないのか」

「そういう蓮こそ、利子増やしすぎだろ。悪徳金融かよ！」

「何言ってる、俺はこれでも良心的だ」

「嘘付け、お前金にはケチくさいじゃないか」

全く終わる様子が見えない応酬を続ける二人だったが、沙奈子は全くと言っていいほど取り合わない。

いつものことなんだな、だいたいわかった。

そう結論づけた士が終わらない口喧嘩をカメラに収めた瞬間、二人はピタリと止まった。

「うわっ、変なとこ撮るなよ～！」

無言で睨みつけてくる蓮という青年とは対照的に、真司はカメラを奪おうとするように突進してきた。士はそれを軽々かわし、真司の手が届かないよう高々と掲げた。

「残念ながら、こんな面白いショットは渡せないな」

更に追いかけてくる真司から逃れるべく、わざわざ花鶏からも離れる素振りを見せる。少し不満げに口先を尖らせる真司だったが、仕方なさそうに諦めていた。―その時。

高い鈴の音に似た、耳障りな耳なりが始まった。いや、耳なりではなかった。真司と蓮にも聞こえているのか、二人は突然緊張の糸を張り詰めた。

そのうち蓮は足早に士に詰め寄ると、強引に退かせて花鶏を出て行ってしまった。続いて真司もあっという間に飛び出し、店内は士と

夏海と沙奈子の三人だけになってしまった。
「何だったんだ一体……」
「士君、私たちも外に出てみませんか？　何かわかるかもしれません」
忙しないわねと呑気にのたまう沙奈子には聞こえぬよう、夏海がすぐ側で囁いた。
「そうするしかなさそうだな」
士はマシンディケイダーを停めた庭先に出た。入店時にも迎えてくれた蔦の群れをくぐり抜けると、真っ先にスクータータイプのバイクが目に入った。真司の乗っていたものだ。だが、肝心の本人はどこにもいない。真司より先に出て行った蓮も、どこかへ消えてしまったように忽然と行方がわからなくなった。
おかしい。一分にも満たない間に花鶏から見えなくなるには、全力疾走でも間に合わない。もちろん別れ道で曲がったと考えることもできるが、遠くに行くつもりならバイクを使うはずだ。
「つ、士君！　この角度から窓ガラスを見て下さい！」
取り乱した夏海の声に、士も彼女の隣から窓ガラスを覗き込んでみた。するとそこには、龍の顔を象る鉄仮面の戦士が映り込んでいた。そしてもう一人、羽を広げた蝙蝠の仮面を持った黒い騎士もいる。
「まさか本当にいるとはな……。それに、『鏡』になればガラスでも見えるのか」
士は自分の目で見るまで信じられなかった。ガラスの中の戦士は、二人ともこちら側には存在していない。ＯＲＥジャーナルは本当に真実を掴んでいたのだ。
「よし、ちょっと行ってくるか」
「気を付けて下さいね！」
夏海には片手を振って返事を済ませ、士はディケイドライバを手に取る。窓ガラスの前でバックルを巻きつけ、カードを通してサイドハンドルを引いた。
「ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ、ＤＥＣＡＤＥ！」

士はディケイドの像がマゼンタに染まるのを確認し、勢いをつけてガラスの中に飛び込んだ。ディケイドの体は大きさも関係なくガラスの中を通り抜け、先ほどまでいた通りに似た場所へと着地した。

但し、全てが反転した世界へと。

通りは昼間だというのに、人の気配が殆ど感じられなかった。その代わり、窓ガラスで見た二人の戦士が怪人たちと武器を交える音がその場を支配していた。二人が相手をしていたのは、口がヤゴに似た白い怪人の群れだった。その数、実に何十匹といるか知れないほどだ。

「あーもう、こいつらキリがないな！」

赤龍の剣士の方から、グチのような言葉が発された。一体のヤゴを頭部を串刺しにしつつ、龍の盾を用いてもう一体の介入を防いでいる。黒い騎士も巧みにマントで相手を翻弄しており、付け入る隙がない。

「無駄口を叩くな、黙って戦え！」

騎士は黒い大剣で難なく拳を受け、細身の剣でヤゴを切り払う。流れるような二刀流の動きに、ディケイドは思わず目を奪われた。黒い騎士の方は混戦に慣れているようだ。

とはいえ、赤い剣士が言うようにミラーモンスターの数は一向に減る様子がない。二人だけでは消耗しきってしまうだろう。

「やれやれ、少し手伝ってやるか」

ディケイドはソードモードを起動し、マゼンタの光刃を放った。かまいたちの如き刃が複数のヤゴ怪人を切り裂き、うち何体かは光の玉となって飛んでいった。すると先を争うように二体のモンスターがその玉を追いかけ、いくつかを腹に収めていった。それも巨大な蝙蝠と赤い龍で、今まさにヤゴ怪人と戦っているライダーにそっくりだ。

ＯＲＥジャーナルの記事によれば、この世界のライダーはモンスターを従えているらしかった。とすれば、この二体は二人のライダーの相棒のようなものだろう。

「お前は……！」
黒い騎士が警戒するように剣を構えた。赤い剣士は剣を持ってはいたが、呆然としていて隙だらけだった。
「何をぼんやりしてる。まだモンスターはウジャウジャいるぞ」
ディケイドは横薙ぎにソードを振い、横槍を入れてきたヤゴ怪人を葬る。しかし赤い剣士は未だに構えようとはせず、まるで忠告が聞こえていないようだった。
「……世界の、破壊者？」
赤い剣士はポツリとそう呟いた。その言葉は、紛れもなくディケイドを見て告げられていた。
「あ？　なんだそりゃ……」
突拍子もない名詞に、ディケイドは頭を捻った。ディケイドが世界の破壊者ということなのか、もしそうだとするなら何故剣士が知っているのか。情報が足りなさすぎてワケがわからない。そんなディケイドに向かって、黒い騎士が大剣で切りかかってきた。
「うおっ！？」
のけぞって避けたディケイドの真上を、大剣が勢いよく通り過ぎていく。間髪おかずに細身の剣が胴を狙ってきて、ソードを以て受け止めた。
「何だ何だ、ちょっと待て！」
「問答無用だ！」
黒い騎士は話を聞く気もないらしかった。ディケイドは次々と突き出される切っ先を反らすだけだというのに、騎士の方は本気で倒そうという気迫を放っている。まるでライダー同士の戦いが当然であるかのように。
栄次郎は怪人と戦うもの、というだけがライダーではないと言っていた。それはもしや、こういう意味だったのだろうか？
そんな疑問が念頭に浮かんだ時、どこからともなく一陣の突風が吹き抜けてきた。
「うっ！？」

ディケイドは一体の鳥型モンスターによって空高く連れて行かれた。地上にはもう一体の同型モンスターが現れており、黒い騎士を相手に嘴で応戦していた。

鳥のモンスターは建物の屋上にディケイドを下ろし、そのままっすぐ一人の青年の隣へとかしずいた。青年は長いコートを翻し、ディケイドの方へ振り向いた。

「お前がミラーワールドに来るのを待っていた。世界の破壊者……ディケイド」

士がミラーワールドに突入してから、何分が過ぎたのだろう。夏海はなかなか戻ってこない士を心配し、窓ガラスを凝視していた。けれど映り出すのはヤゴ怪人の姿ばかりで、よく目立つあのマゼンタ色は全くガラスに映らない。

こんな時、自分にもライダーに変身する力があれば、『彼女』がいてくれたなら事情は違ったのに。少なくとも不安を抱えたまま待つだけにはならなかったはず。―ミラーワールドに入ることができなくとも。

夏海は胸に置いた手をぎゅっと固く握りしめた。

「ど、どいてどいて！」

突如降って沸いた呼びかけに顔を上げた瞬間、夏海の視界一杯に赤い剣士が飛び込んできた。もちろん避けるための間などないに等しく、夏海は思い切り剣士と正面衝突してしまった。

「きゃっ！」
勢いのままに後ろへ倒れ込みかけた夏海を、グイッと引っ張る手があった。おかげで強く尻餅をつく羽目にはならず、しっかり一人で立てるまでに体勢を戻してもらえた。
夏海の手を取ってくれたのは、先ほど花鶏にいた蓮だった。ぶっきらぼうなのは外見だけというところは、どこかの誰かにそっくりだった。
しかし、助けるだけ助けて蓮は夏海の腕を離さなかった。何かを探っているような、それとも疑っていると言えるような眼差しを送ってくる。
「あ、あの……？」
果たして夏海が彼に何かしたかと思った時、視界の端から真司が起き上がってきた。
「蓮、離してやれよ。優衣ちゃんみたくミラーワールドが見えるだけかもしれないだろ」
「お前は楽天的だな。ライダーの中に女がいないとも限らないんだぞ」
二人は睨み合ったまま動かない。お互い、一歩も主張を譲る気がないようだ。
ミラーワールドが見える。ライダー。
二人の発した数少ないキーワードから、これまでの僅かなできごと全てが結び付いていくような気がした。
耳なりのような音を聞いて飛び出した真司と蓮。それなのに花鶏から出ても姿が確認できず、そして赤い剣士が現れてすぐにこの通りに帰ってきた。
士でなくとも、ＯＲＥジャーナルの記事をしっかり読んでいれば二人の正体に気付けたろう。二人は恐らく、鏡に映り怪人と戦っていた張本人だ。
「私は仮面ライダーを知っていますが、ライダーじゃありません。だから、教えて下さい。ライダーだというだけでそんなに警戒する

のは、何故なんですか？」
夏海は真実のみを述べ、次いで一番知りたい理由を尋ねることにした。先ずはそれを知ることが重要だった。
夏海が栄次郎と渡り歩いてきた世界は、様々な事情を抱えていた。仮面ライダーが悪だと教えられ、ライダーを敵と見る世界があった。仮面ライダーが怪人と同じように恐れられ、怪人と同じように葬られていた世界があった。仮面ライダー自身が悪そのもので、人々がそれに怯え暮らす世界があった。
どれもみな、始まりの世界の怪人たちが関わったことで変わってしまったのだ。もしもこの世界も始まりの世界の干渉を受けているのなら―。
「どうやってライダーを知った？」
夏海の真剣な思いが通じたのか、蓮は掴んでいた腕を離してくれた。代わりに質問をし返されたが、これでまともな会話が成立する。
夏海はしまっていたＯＲＥジャーナルの記事を取り出し、蓮に差し出した。それを見るなり、真司が「あっ！」と息を飲んだ。
「真司さんとＯＲＥジャーナルに行った時にもらいました。これで仮面ライダーのことを知ったんです」
本当はそれより前から知っているのだが、異世界の話をしている時間が惜しかった。それに、半分くらいは間違いではない。
「なるほど。お前のところの仕業か」
蓮はざっと記事を眺めた後、仕方なさそうに真司を見た。
「言っておくけど、書いたのは編集長だからな？」
真司は自分のせいではないと言わんばかりにむくれた。
「まあいい、一つ確実なことを教えてやる。俺たちライダーはみな、自分の願いを叶えるためにライダーになったんだ」
そう語った蓮の表情は、悲壮な決意を抱いた、切なく痛ましいものに見えた。

第１２話　日常に潜む非日常（後書き）

ディケイドにおいて、「世界の破壊者」という名詞は欠かせないものなんじゃないかと。そんなわけでようやくこの名詞が出せました。どうやって落とし込むかはとりあえず決めていますが、まだ変更される可能性はなきにしもあらず。

それからディケイドとナイトの戦い。本当はもっと長引かせたかったんです。でもまだデッキ壊したり契約モンスター倒したらどうなるか知らないのに、それをせずに戦いを中断させるのはリアリティに欠けるなと思ってこんな形になりました。

第13話　錯綜する思惑

ある者は己の保身のために。ある者は自らの幸せを掴むために。またある者は、誰もが認める英雄になるために。されどその願いを抱いたが故に、沢山のライダーたちが散っていった。

だから蓮も真司も、いずれ同じ運命を辿ることになる。―残る3日間の内に、勝ち残ることができなければ。

蓮がそう言葉少なに打ち明ければ、夏海は見るからに悲しみの色を濃くした。

真司は彼女を巻き込むべきではないと思った。仮面ライダーでないのなら尚更だ。

「もうこれ以上話すことはない。俺は帰らせてもらうぞ」

蓮は会話を打ち切らせ、花鶏に続く緑の門に消えていった。夏海はそれを制止するかのように手を伸ばしたが、彼の黒いコートにすら触れられなかった。

「酷すぎます、そんなの。何で、どうして真司さんたちがそんな……。どうにかならないんですか！？」

夏海は叫ぶようにして悲痛な声をあげた。

彼女の思いは痛いほどわかる。人の複雑さを知らずに戦いを阻止しようとしてきた、以前の真司自身に似ているから。

「俺にも、わからない。見つけたと思っても全然届かなくて。今も探してるんだ……その答えを」

けれども、真司には応える術も答えもありはしなかった。

一度だけ戦いを止めずに、戦おうとしたこともある。その途端、蓮も北岡も戦おうとしなくなった。嫌なものを見るような、或いは傷ついたかのような顔をして。じゃあどうしたらと慟哭しても、誰も真実を導き出せはしなかった。

ところが、夏海は急に何かを思い切ったかのように真司を見据えた。

「……それなら、私も一緒に探します。一人よりも二人で探した方

が、答えも見つかるはずです！」
真司は目を見張った。
彼女は希望があると信じて疑っていない。それは、真司とて同じだったはずだ。なのに、いつの間にか忘れかけていた。
（そうだ。最後まで、諦めちゃいけない！）
真司は強く頷くと、夏海と固く握手した。
「やろう。俺と夏海ちゃんと、士とで！」
その名前が出た瞬間、夏海は「あっ！」と今し方何かに気付いたかのような顔をした。
「そうでした……士君、まだ戻って来ていないんです！」
「……ええっ！？」
あまりに予想外のことに、真司はその事態を把握するまでに時間を要した。

その頃、ミラーワールド内にて―。

ガラスの中をくぐり抜け、ディケイドに似た風貌の青いライダー―ディエンドはミラーワールドに侵入した。ミラーモンスターたちがその気配を察知する前に、ディエンドライバーにカードを挿入する。
「おいで、僕の兵隊さんたち」
「ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ、ＲＩＯＴＲＯＯＰＳ！」

銃口から射出された複数の光が、大勢のライオトルーパーとなって降り立つ。その数、優に１０人は超えていた。
「じゃ、捜索は頼んだよ」
ディエンドがドライバーで指示を飛ばすと、ライオトルーパーは彼に従ってバラバラに散開した。彼自身ものんびりとだが、数人のトルーパーを引き連れて歩き出す。早速いくつかの部隊はモンスターたちに遭遇したのか、遠くで戦闘音が轟いた。
その音を気にとめることもなくディエンドが散策していると、目の前にどさりとライオトルーパーが放られて消えた。遅れてやって来たディケイドは、剣で肩を軽く叩きつつ首を傾けた。
「他人の言うとおりに動くのはシャクだが……お前の邪魔になるならやらせてもらうぜ、海東」
「おや、もう知られていたのか」
それでも何も問題ないということなのか、ディエンドはもう一枚カードを挿入する。認証までのロスタイムは、ライオトルーパーがディケイドに斬り込むことで帳消しになった。
ディケイドがライオトルーパーを迎え撃つ先で、ディエンドライバーの音声が響く。とっさに体を横に逸らすと、青い光線が肩を掠めていった。その後ろからガルドサンダーが現れる。ディケイドを支援すべく、ライオトルーパーに爪を突き立てた。
「でも、それだけじゃないだろう。願いを叶えてやる、なんて言われたんじゃない？」
トリガーを引く手を止めずにいながら、ディエンドは会話を繋げた。ガルドサンダーが顔面を撃ち抜かれ、悲鳴をあげてもんどりうった。
「そんなことは関係ない。お前が気に食わないだけだ」
仮面の下でディケイドが笑う。その気配が伝わったのか、ディエンドもまた鼻で笑った。
この二人の戦いの様子を、一人の男が不死鳥の上から見下ろしていた。その周りには、ライオトルーパーの集団と戦った後と思わしき煙が立ち上っていた。

「これでいいのか、鳴滝？」
男が独り言を言ったのかと思えば、彼の背後で輝く銀のオーロラが広がった。その中から、ベージュのコートを着た男が現れる。
彼、鳴滝は男の隣に並ぶ。ディケイドとディエンドの戦いを目にすると、堅く結ばれた真一文字が緩んだ。
「ああ、君には感謝するよ神崎士郎。ディエンドには僅かだが役に立ってもらう」
「そうか。ならば俺は引き続き残るライダーを減らしに行くとしよう」
それが確認できれば良かったのだろう、神崎士郎は不死鳥の鎧に包まれ、オーディンへと変身する。そして控えていたゴルトフェニックスの背に乗り、空高く飛び立った。まだ生き残り願いを叶えようと足掻く、哀れなライダーたちのもとへ向かうために。
鳴滝は彼方に霞む不死鳥を見送るように、そっと帽子の鍔を上げた。
「だが、私は君も見過ごしはしない」
そうして彼が再び戦いの場を見下ろせば、長期戦に縺れ込む気配を見せていた。
ディケイドが剣の胴で青いＢＬＡＳＴを弾く。かと思えばディエンドの銃撃が足元を通り抜け、ディケイドが物陰に隠れることを余儀なくされている。まさに押しと引きの繰り返しだ。
「例えこの世界で失敗しようと、必ず阻止してみせるぞ……ディケイド」
鳴滝は静かにそう宣言すると、再び展開された銀のオーロラに入っていった。

通りにいても何ができるわけでもなく、真司は夏海と一緒に光写真館まで戻って来た。住み慣れた写真館の方が、彼女も気持ちを落ち着けられると思ったのだ。けれども夏海は、そわそわとしてどこか落ち着かない様子だった。士がミラーワールドでモンスターに連れて行かれたのだ、心配にならないはずがない。いくら活動限界時間が関係ないのだとしても。

真司はもう一度変身して戦いの場を探し回ってみたが、かなり遠くへ移動したのかどこにもディケイドの姿は見つからなかった。限界時間があることを逆にネックに感じることなど、初めての経験だった。

士には色々聞きたかった。何故士がディケイドなのか。世界の破壊者というのは本当なのか。

ディケイドが敵か味方かも判断しかねる。真司は二度三度と騙されてきているが、同じ相手に騙される程バカでもない。もちろん味方であって欲しいのだけれど、鳴滝という男の話では敵とも取れる。それら全てを夏海に尋ねられたらいいのだが、今はそんな話ができる程心の余裕はないだろう。彼女が落ち着けるようにと栄次郎が出したお菓子にも、全く手をつけていない。

（どうしたらいいんだ……）

真司はがしがしと強く頭をかきむしった。

こんな時、もっと自分の頭が良ければと思う。夏海にかけるべき言葉がすぐに見つかるだろうし、ディケイドとしての目的にも予測がつけられただろうに。

「真司さん」

「……んっ、何？」

思わぬタイミングで夏海に声をかけられ、間抜けな返答になる。何か重要な話をしようという重みというべきか、彼女の顔付きは酷く真剣だった。

「私、秋山さんに言っていないことがあります。ここ何年かは確かにライダーではありませんでした。ですが、以前私は仮面ライダー

でした」
「え……」
二の句が告げられず、沈黙が館内を支配する。
（そんなまさか、夏海ちゃんが？）
「大丈夫です。仮面ライダーと言っても、この世界のライダーじゃありません。それはディケイドと同じです」
うろたえる真司を気にすることなく、夏海は更に続けた。
「とある事情で手放していましたが、今はそんなことを言っている場合じゃありません。だから……私、もう一度仮面ライダーになろうと思うんです」
「っ……だけど！」
「わかっています」
真司の反論は始まる前に遮られた。夏海は真司の思っている以上に、仮面ライダーとして戦っている。そう直感できるような切り返しの速さだった。
果たして真司に想像できただろうか。真面目で物腰の丁寧な夏海が、かつてとても過酷な戦いの中にいたことを。それも、今まさに真司が巻き込まれている戦いのような。
「本当にいいのかい、夏海」
栄次郎がそっと囁きかけるように問う。
このまま夏海がライダーに復帰すれば、ライダーバトルに巻き込まれることは確実だ。それをわかっているからこそ、栄次郎はあえて聞いたのだろう。
「はい」
対する夏海はより固い決意のこもった声で返答した。
「そうかい……それなら、夏海にお客さんが来ているよ」
その言葉を待っていたかのように、キッチンの方から白いコウモリが飛んできた。掌に収まる程小さなコウモリは、パタパタと三人の囲むテーブルに舞い降りた。
「は～い、夏海ちゃん。元気だった？」

「喋ったぁ！？」
真司は驚愕のあまりに、腰を抜かしたのだった。

キバーラ、と名乗った白コウモリは夏海たちと旧知の仲らしい。今そのキバーラは、シュークリームにかぶりついている。サイズがサイズなだけに、体中カスタードまみれになっていた。それをかいがいしく拭き取ってやる栄次郎の姿は、まるで夫婦のよう。つい先ほどまでの深刻な空気はどこへやら、実に微笑ましい光景だ。
「ん～、やっぱり栄ちゃんの作るお菓子が一番だわ」
「そうかい。それは嬉しいね」
ぽふんと満腹を告げる音を出したキバーラに、栄次郎はにこにこと布巾を差し出した。羽についたカスタードをすっかり綺麗にしてもらい、キバーラはまた真っ白な体に戻った。
真司はまだ信じられなかった。このみょうちくりんな生物（？）が、ライダーに変身する鍵になるなど。実際に変身するところを見たならば信じられるのだろうが。
「キバーラ、それよりも士君を迎えに行きませんと……」
「それもそうね。急がなくちゃ手遅れになるわ」
キバーラは夏海に急かされ、パタパタと宙に舞い戻った。
「迎えに行くって、今から！？」
夏海たちがのんびりした時間はほんの数十分だけだった。
まだミラーワールドのどこにいるかもわからないというのに―いや、だからこそかもしれないが。

真司は慌ててカバンをひっくり返し、龍騎のカードデッキを取り出した。それから鏡になりそうな物体がないか、部屋の中を見渡す。
「あら、鏡なんて必要ないわよ。私にかかればね♪」
「え？」
そんな馬鹿な、とキバーラに振り返った先で、銀色のオーロラが煌めいていた。真司と夏海の周りは一瞬でオーロラに包まれており、どこを見ても光の道だらけだ。
「ウソだろ……」
「ほら、早く変身して。そのままじゃこの空間が解除できないわよ」
呆ける真司にキバーラの注意が飛ぶ。
真司は「あ、ああ！」と返事をして、いつものようにデッキを前方に突き出した。すると彼女の言うとおり、鏡がなくても腰にベルトが現れた。そのままデッキを腰の辺りに戻し、右腕を左斜め上に突き出す。
「変身！」
龍騎の像が幾重にも真司に重なり、ライダースーツとなって実体化した。
「っしゃあ！」
ぐっと気合いを入れた隣で、夏海もキバーラを自分の前でかざしていた。
「変身」
夏海の周りで風が吹く。白く大きな翼が二対はためいたかと思えば、全身が真っ白なコウモリの女性ライダーが現れる。開かれた翼はそれぞれ縮小し、肩と腰回りを守るプロテクターとなった。
（あれ……何でだろ？）
何か既視感のようなものを感じ、真司は首を傾げた。夏海の変身したライダーの姿は初めて見たはずなのに、誰かに似ているような気がしたのだ。
「さ、このままあの子の居場所に繋ぐわよ。準備はいい？」
ローライズなベルト部にくっついているキバーラが言う。

そうだ。今は既視感など気にしているヒマなどない。
（気のせいだよな、多分）
真司は一人自分を納得させ、キバーラに頷いてみせた。夏海もまた真司に対し頷くと、共にキバーラの導きに乗ってミラーワールドの中へと突入した。
銀色のオーロラが引くに従い、遠くでマゼンタのライダーが像を結んでいく。ちょうど何かと戦っていたのか、切り払うように剣を振るっていた。
「士君！」
キバーラとなった夏海の声に、ディケイドがこちらに気付く。彼に切り裂かれていたライダーらしき影は、倒れたかと思えばすぐに消え失せる。まるで幻のように。
「夏海……いや、今はキバーラか。ちょうどいい、少し手伝ってくれ」
合流したディケイドが示したのは、ライオトルーパの群れ（龍騎はそうとは知らないが）。龍騎が戦っていたシアゴースト並みに溢れかえっている。
「何だよあれ！」
「いいから蹴散らせ。心配するな、あれは紛い物だ」
「ええーっ！？」
ディケイドが有無を言わさず走り出す。
「勘を取り戻すにはちょうどいい相手ね。夏海ちゃん、あまり固くならないで」
「はい！」
キバーラも細身の剣を取り、颯爽とライオトルーパに立ち向かっていった。
「頼むから説明くらいしてくれよ……！」
文句を言いつつも、龍騎はカードをバックルから引いてドラグバイザーに挿入した。戦いが始まっているからには、戸惑っているヒマ

などないのだから。
「ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ」
バイザーの声に応え、ドラグレッダーの力を宿すドラグセイバーが召還される。
「うりゃああっ！」
龍騎は赤い青龍刀を手に、ライオトルーパの一団に切り込んだ。先頭のトルーパが持つ銃器とかち合い、火花が散る。遠慮の抜けきらない龍騎の肩口で、銃撃が爆ぜた。
「くうっ！」
龍騎は本能的に反撃に出た。青龍刀の切っ先がトルーパの胸全体を切り裂くと、トルーパは簡単に吹き飛ばされた。後ろの一団を巻き込んだトルーパはたちまち消え失せ、何一つ残らなかった。
まるでミラーワールドで消滅したライダーのように。
「ああ、くそっ！」
龍騎はその思考を振り払うかのように頭を振った。
一方復帰初戦のキバーラは、複数のトルーパを前にしても冷静だった。銃口が定まらない内に懐へ切り込み、次々と切り伏せていく。
「ブランクがあるわりにいい調子ね。私のフォローはいらないかしら」
「そんな、キバーラにはいつも助けてもらってるんですよ」
注意の逸れたキバーラに、トルーパの銃撃が飛ぶ。しかしそれはキバーラの腕が意思とは関係なく振るわれたことで、剣が跳弾した。
「ね？」
「もう……そういうところは相変わらずね」
軽口を言い合う二人の姿は余裕の一言だった。
（夏海のやつ、やるじゃないか）
そしてディケイドはというと、残ったトルーパたちと交戦していた。ここまで減ってくると最早脅威にもならず、軽々と相手取れる。
左方のトルーパを切り倒し、正面のトルーパは柄で怯ませる。右方のトルーパを足払いで転ばせると、二体纏めて叩き切った。

「終わった、みたいですね」
「ああ、お前もか」
キバーラが腰に剣を収めつつディケイドに並び立った。龍騎はようやっと会話をする余裕が生まれ、改めて二人のライダーと顔を会わせた。
「それで、あれは一体何だったんだ？」
倒すと消えるということは、少なくとも人が変身したものではないらしいが、それでもあまり気持ちの良いものではなくて、龍騎はなんだかいたたまれなかった。
「あれは海東の呼び出した虚像だ。ミラーモンスターとそう変わらない。何しろ、召還者の言うとおりにしか動かないしな」
「海東さんが？」
「え、誰？」
キバーラだけがディケイドの話をわかっているのに、彼は一向にフォローを入れる気配はなかった。ディケイドは何かを探しているかのように、じっとどこかを見つめていた。
「とりあえず一難去ったぞ。そろそろ出てきても大丈夫だ」
その言葉を待っていたのだろう。ディケイドの視線の先から、一人の人間が顔を出した。
「……真司くん？」
「優衣ちゃん！」
どうしてここに。そんな言葉は出てこなかった。やっぱりもう時間がないのか、と龍騎は実感していたからだ。
現実の世界で姿を見なくなった神崎優衣は、今やミラーワールドの中で生きているのだ―。

ライダーバトルが終わるその日まで、残りあと2日―。

第１４話　揺れ動く戦線

夏海と真司がミラーワールドに突入する数十分前―。

神崎優衣はミラーワールドを逃げ回っていた。現実世界は危険だからと兄は言ったが、ミラーワールドももう安全ではない気がした。優衣を追っているのは、士郎からデッキを譲り受けたライダーではない。皆同じ外見の、ｏを象る仮面を付けている。装備も個体差はなく、一つの意思に従って動いているようだった。

優衣を守るガルドサンダーにとっては、一個体で見れば脅威ではない。問題は数だ。故にそのガルドサンダーも敗れ、今はもうここにいない。

「あ！」

足がもつれ、前のめりに倒れ込む。ライダー部隊はその間に追いつき、優衣に照準を合わせて止まった。

これで自分の生が終わるのなら、むしろ終わらせて欲しかった。どうせあと数日もすれば、現実世界にはいられなくなる。兄が繰り返し続けるライダーバトルも、自分さえ消えたなら。

優衣は酷く冷静に視界を閉ざした。思い出すのは幼い日のこと。士郎と描いた、自分たちを守る沢山のモンスター。その全てが走馬灯のように思い出される。

鳴り響く銃声。だが、いつまでたっても痛みは襲ってこなかった。恐る恐る様子を伺ってみると、兵士のようなライダーたちの向こうに、またしても見慣れないライダーが佇んでいた。ただその特徴は、兄や鳴滝という人物から聞いていたものと全く同じだった。

「どうやら間に合ったらしいな」

仮面ライダーディケイド。世界の破壊者。その言葉通りに、ライダー部隊はみな一斉に倒れ消えていった。

「神崎優衣、か？　あんたの兄に、あんたを守るように依頼された。仮面ライダーディエンドからな」

―「それじゃあ海東って奴の狙いは、神崎の持ってるデッキなのか……」

「そういうことだ。神崎は最後に生き残ったライダーとしか戦わない。それを引きずり出すために、妹を人質にしようとしたんだろう」

現実世界、人の気配がしない一軒家。かつて神崎兄弟が暮らしていたという家で、士たちは一時休息をとっていた。ディケイドやキバーラと違い、龍騎には制限時間がある。長話をするには、現実世界の方が都合が良かった。

「なんだよそれ……一体何が目的なんだよ！」

「恐らくはオーディンデッキにしかないタイムベントだろうな。世界の理に触れる程の力だ、奴には相当な宝になる」

士郎が見返りとして士に提示したのもまたタイムベントだった。少なくとも年齢分の時間を遡れば、士の過去もしくは士のいた世界がわかるだろう。そう言って士郎は取引を持ちかけた。

実のところ自分の年齢すらわかっていないのだが、その方法はそれなりに画期的な方だと思った。遡る時間は手に入れてからでもいくらでも考えられる。だからこそ士も取引に応じた。オーディンデッキを譲り受ける代わりに、優衣を守ると。

「でも、一体どうやって守りきるつもりなんだ？　ディエンドも制

限時間は無視できるんだろ？」
「そのことだが、しばらくは海東も大人しいはずだ。ディエンドがディケイドと同じシステムならな」
真司の疑問に、士はライドブッカーを出して答えた。ディエンドのカードホルダーはまだ見ていないが、機能は共通している。それは特性や制限の点でも同じはずだ。
全てのカードには使用制限がある。例えばＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥなどは、その威力によってもう一度使えるまでに必要なスパンが変わってくるのだ。ＦＩＮＡＬと付くカードに至っては、一度の変身につき一回のみしか使用できない。これらのことはみな、これまでの戦いの中で気付いたことだ。
「つまり神崎優衣を追いたくても、俺と戦ったことでカードを消耗している分手が足りなくなっているってことさ」
「なるほど……」
しかし、問題となるのはむしろこれから。条件が同じだとしても、ディエンドの方はカードが多い。少し戦っただけだが、それだけは確実に言える。
夏海は迷わず協力するだろう。目的がカードでないにせよ、他者の身が危険に晒されているならば。
真司は難しいところだ。今の真司はどこか危なっかしく感じる。芯のない状態では、単なる足手まといにしかならない。仮面ライダーの力を手に入れるには、一番協力的な彼と行動を共にするのが望ましいというのに。
海東に至っては神出鬼没だ。待ち伏せは意味がないし、探し当てるにもアテもない。
そしてもう一人、この世界でキーになるであろう神崎優衣は、相変わらず鏡の向こうにいた。まだ現実世界に出ようと思えば出られるらしいが、ミラーワールドの方が比較的安全だという。
（さて、どうしたものか……）
「なあ、士。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

士が深く考え込みだしたことでタイミングを得たのだろう、真司が嫌に緊張した面持ちで話を切り出した。
「ディケイドって、本当に世界の破壊者なのか？」
「あ？　何なんだ、その『世界の破壊者』ってのは？」
またしても世界の破壊者。三度も聞いた名詞だが、やはり士にはその言葉の意味がわからなかった。それが質問の答えになったようで、真司は見るからに嬉しそうだった。
「やっぱりあいつがただそう呼んでるだけなんだな。お前が悪い奴になんて到底思えないし」
「だから、どういう意味なんだよその『世界の破壊者』って」
尚も食い下がる士だったが、真司は全く話を聞いていない。一人だけ何かを納得したように頷いている。
「よっし、蓮に話をつけにいこう。あいつきっと勘違いしてると思うし」
「おい、人の話を……」
「あの、士君。真司さんも多分、あんまり意味がわかっていないと思いますよ」
夏海の耳打ちに心を傾けて冷静になってみれば、成る程確かにそうだと思える節があった。悪い奴だの勘違いしてるだの、意味がわかっている言い方とは思えない。わかっているなら、例えば夏海が「理を破壊する」という事象を説明した時のように言うだろう。
神崎士郎に聞いておけば良かったな……。
士はそれに思い至らなかったことを、ほんの少しながら後悔した。

士が名を聞いたライダーは１３人。そのうち５人はすでに死んで脱落しており、残り８人の中の３人は恐らく神崎に脱落させられ、あとの４人も確実に死の瞬間へと歩んでいた。北岡秀一もその一人。特に彼は、他の誰より死が迫っていた。―だから、鏡に映った神崎士郎を目にした瞬間も、彼はさほど動揺しなかった。

北岡自身、驚く程冷静だった。元々覚悟の上でライダーになったからだろう。病気で死ぬか、ライダーに殺されるか。そのどちらかでしかないと。

あっけないものだ。これまで必死に戦って来たことが馬鹿馬鹿しく思えるくらいに。それとは別に、よくぞこれまで持ったとも思う。医者の宣告はあくまで予測でしかないが、分かり易い指標でもあった。酷く具体的で確実な、死の瞬間の。

（ああ、でも）

神崎を前に逃げることも戦うこともせず、そっと目を閉ざす。

吾郎はきっと怒るだろう。それとも泣かせてしまうかもしれない。

北岡の事情を全て知っていても、吾郎は優しいから。

城戸真司には少し厳しいことを言った。戦いを否定していた真司を、ずっとバカな奴だと思っていたのに。いざその彼が戦うことを選んだ時、北岡は協力を拒んだ。

（俺たちのせい、なのかな）

優衣のために戦おう。そう迫った真司の顔は見ていられなかった。真似できない生き方にほんの少し憧れたから、余計に。

浅倉はまだこの事態を知らないだろう。知ったとして、何を思うかなどは計り知れないが。

それに、桃井令子。一度でいいから、デートをしたかった。お節介な連中には病気の話をしないよう釘をさしておいたから、まかり間違っても知らないままでいられるだろうが……。

北岡の胸には、やりきれていないことばかりが思い浮かぶ。きっと

誰もが同じなのかもしれない。理不尽に降りかかる死の影に晒されたなら。
―しかし、死を覚悟した北岡への宣告は終わりの瞬間ではなかった。むしろ死にも等しい、もっと非情なものだった。

「それで、よく知りもしない人間のことを信じろと言うのか？」
蓮はあからさまに疑惑の目を向けてきた。
この返答は予想の範囲内だった。秋山蓮という人間を初めて見た時、士は自分に近い人間だろうという気がしていた。
「そりゃあ蓮は知らないかもしれないけどさ、俺は知ってるわけだし」
「だから無理だと言っているんだ。お前が騙されてきたのを何度見ていると思っている」
蓮は顔も合わせず、早歩きに病院の廊下を行く。
士はその場面を見たことはなかったが、真司のそんな姿がありありと目に浮かぶようだった。なんと言っても、世界の破壊者と呼ばれていたらしい士を簡単に信じているのだから。
「真司、もういい。そいつにはいくら言っても無駄だ」
「だけど……！」
「俺が破壊者ではないと証明すればいい。あいつがどういう意味でとっているにしろ、百聞は一見にしかずというからな」
まだ納得のいかない様子の真司だったが、少なくともたった今病室

に入って行った蓮の邪魔をするほど無粋ではなかったようだ。
きっかけがライダーバトルとはいえ、真司と蓮は誰より長く付き合って来たのだろう。運が良かったのか、それとも彼らの実力なのかはわからないが。何にせよ、二人の奇妙な信頼関係は微妙なところでお互いを助けてきたに違いない。士もそれに倣うまでだ。
「でもさ、優衣ちゃんはどうすんだよ。神崎に任されたんだろ？」
「それなら心配しないで」
士が応えるより早く、近くの窓ガラスから優衣が応えた。
「鏡を転々として、みんなについていくから。それなら、私が襲われてもすぐにわかるでしょう？」
「いいや。君がそんな危険を冒す必要はない」
唐突に会話へ割って入った声に、聞き覚えはなかった。声の主は室内だというのにコートを羽織ったまま、帽子を目深に被っている。
「鳴滝！？」
真司が男の名を呼んだ。鳴滝はライダーデッキを持っている様子もないのに、鏡の中の優衣が見えているらしかった。
「世界の破壊者、ディケイド。お前は全てを破壊するものだ。この世界ばかりではない、お前自身もだ！」
「大体わかった。お前が元凶だな」
士は鳴滝に詰め寄った。
鳴滝とは初対面だ。言い掛かりにも程がある。何のためにそんな活動をしているのかは不明だが、元凶が目の前にいるなら好都合だと言っても、その前に確かめねばならないことがある。
「あんたは怪人なのか？　にしては人間にしか見えないな。オルフェノクと同じタイプか」
仮面ライダー、ディケイドの力を奮うべき相手であるのか。それとも話の通じる相手なのか。
士とて、非力な人間にライダーの力を使用するようなことはしたくない。もちろん、あの優しいオルフェノクたちと同じように、何らかの事情があるなら、怪人だとしても譲歩はするつもりだった。

だったというのにだ。士のほぼ対角線の方向から、鋭い殺気が放たれた。
振り向いた瞬間目に映ったものは、深海の色をしたホオジロザメ。とっさに身を翻す前に、飛び出してきたドラグレッダーがサメの突進を食い止めた。
「神崎の手から逃げ切ったライダーだ。貴様に倒せるかな」
鳴滝は士をけしかけておきながら、すぐにその場から消え去った。
彼自身の正体はあやふやなままに。ホオジロザメはしつこくドラグレッダーに突進し、攻撃の手を止めない。
真司は既にライダーデッキを取り出していた。ならば士も行くべきだろう。そのライダーの目的は士のみではないはずだ。
「夏ミカン、優衣を頼むぞ！」
「任せて下さい！」
頼もしい応えを耳に、士はバックルを腰に巻いた。
「ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ、ＤＥＣＡＤＥ！」ディケイドと龍騎が並び立つ。ドラグレッダーがアビソドンの相手をしている間、二人は同時にミラーワールドへ飛び込んだ。
「何の騒ぎだ？」
二人を見送った夏海の背後から、蓮が声をかけてきた。二人はまだミラーワールド内の病院から移動していないらしく、窓にはっきりと像が映っている。夏海は反射的に窓を背にかばった。
「士君は……ディケイドは確かに驚異的な力を持っています。だけど、士君に世界を壊す気なんてありません！」
蓮は窓の中から消えたディケイドと龍騎を見送った。持っているデッキで呼び出したのだろうか、入れ代わるようにしてダークウイングが窓に映り込んだ。しかし何故か蓮はダークウイングを睨みつけた。鏡の中のコウモリはすごすごと引き下がり、すぐに姿が見えなくなった。
「その気がなくても、壊してしまうことはある。物だろうと、人の心だろうとな」

「それは……」
確かに蓮の言う通りだ、と夏海は思う。壊す気がなくとも壊れるものは、日常にありふれている。実際、夏海とて何も壊したものがないと言えない。だから士が望まなくとも、世界を壊してしまう可能性は否めない。
けれど。
「だからといって、士君が倒される理由にはなりません。私が、そんなことにはさせません！」
人は過ちを経て学んでゆける。士もまた、ディケイドの行使を通して力の使い方を学べる。壊した後に何も残らないことがないように、終わりが新しい始まりをもたらすように。
「それでも士君を倒そうと言うなら……私は秋山さんを止めます！」
夏海の決意を聞き届け、キバーラが手中に収まった。その途端白い剣士の鎧が夏海を包み、仮面ライダーキバーラへと変えた。
「それから一つ訂正します。仮面ライダーではなかったのは、今までのことです」
蓮は明らかに動揺を見せた。それがどんな意味かを知ることはできなかったが、次の瞬間には戦士の顔へと様変わりした。
「そうか。なら、俺がすべきことは決まっている」
龍騎とは違う、コウモリの紋章が刻印された黒いデッキを窓ガラスにかざす。ガラスに映るベルトが蓮の腰にも現れ、そこに仮面ライダーナイトのデッキが収められた。
「変身！」
ナイトの鏡像が複数重なることで、蓮は黒装束の鎧を纏った。それと同時に銀のオーロラが発生し、病院の中を別の景色へと塗り替えていった。
そこは人気のない、廃工場のような倉庫街。但しミラーワールドではなく、現実の世界である。制限時間のないキバーラと同じ士俵になるように、ミラーワールドには飛ばなかったのだ。
「士君の邪魔にならないよう、場所を変えさせてもらいました。こ

こなら思い切り戦えるはずです」
「ふん……」
夏海が剣を上段に構えると、ナイトが剣を引き抜いた。
この先言葉などいらないのだ。あるのは、信念のぶつかり合いのみ。
「行きますよ、キバーラ！」
「まっかせて～♪」
優衣が離れた場所で見守る中、夏海は真っ直ぐにナイトへと切りかかっていった。

第１４話　揺れ動く戦線（後書き）

倒されたガルドサンダーは士についてきていた奴です。どうやっていれるか悩んでるうちに書けなくなってしまいました…（汗）

第１５話　譲れぬ願い　―？―

仮面ライダーアビス。名前と特徴は神崎士郎から聞いている。そのため、契約モンスターが鮫型であることは予測できた。だが、まさか一筋縄ではいきそうにないあの神崎を出し抜くとは思わなかった。もしかしたら鳴滝がディケイドを倒すため、わざわざ助けたのかもしれない。世界を転移する手段を持つのかは確かめられなかったが、ディケイドを知る以上あると思っていいだろう。

ミラーワールド内に突入してすぐ、アビソドンはガラス窓に潜って姿を消した。狭い病院の廊下で呆然としていた時、龍騎のすぐ真横の窓ガラスからアビソドンが襲いかかってきた。

「うわ！」

龍騎の腕が噛み砕かれんとした瞬間、ディケイドの剣が煌めく。その切っ先を軽々かわし、アビソドンは再び窓ガラスに潜り込んだ。まるでシャチのようだ。シャチは獲物を水中から放り出し、散々痛めつけて補食する。鮫はこんな狩りの仕方をしない。

と言っても、このアビソドンはミラーモンスターだ。模した生物と全く違う方法で攻撃するのは、補食対象が違うからだろう。

今度はディケイドを狙い、アビソドンが飛び出してくる。やはり、二人ともじわじわと弱らせて倒すつもりでいるらしい。姑息な真似だ。

ディケイドは出し惜しみすることなく、剣にエネルギーを纏わせた。それを以て、廊下に列を成す窓ガラスを薙ぎ切る。衝撃波の届いた先から窓ガラスが砕け散り、アビソドンの避難先が一気に減った。

「どうだ。これなら出てこざるを得ないだろう」

ディケイドは得意げに鼻を鳴らした。ダイブする窓ガラスがなくなり、アビソドンは困ったようにウロウロした。かと思えば、すかさず病室側の窓ガラスに飛び込んだ。

「えーっ、キリがないぞ！」

ギリギリで突進をかわし、龍騎が地団駄を踏んだ。病室の中にはテレビがついていることもある。確かにキリがなさそうだ。
「真司、ドラグレッダーを。あいつに乗って屋上にでるぞ！」
「あ、そうか！」
龍騎が意識の底で呼べば、あっという間に無双龍が駆けつけた。二人が背中に乗って指示を送ると、病院の壁をぶち破って一気に屋上へ躍り出た。
追跡してきたアビソドンに追随して、ようやくライダー本人も姿を表した。仮面ライダーアビスは、その場に留まっていたアビソドンから牙の剣を受け取った。
「何故だ……何故オレじゃない！　何故残されるのがお前らなんだ！」
アビスはバイザーから複数の水の刃を飛ばした。龍騎はドラグセイバーを奮うが、すり抜けて直撃を受けてしまう。
「くそ、剣じゃダメか！」
「ＳＴＲＩＫＥ　ＶＥＮＴ」
胸部の小さな傷には構わず、ドラグクローを召喚する。そのままそれを突き出すと、ドラグレッダーが火球を吐き出して水刃を霧散させた。
「俺たちが知るか。文句なら神崎に言え！」
マゼンタ色の衝撃波が走る。それはアビスセイバーで拡散させられ、アビスには届かない。
「当に言った。それがこのざまだ！」
アビソドンが真っ直ぐに突っ込んできた。迎え撃つ形で剣を振り下ろせば、アビソドンの体が二つの影に分かれた。しかし切った感触はない。直後左右から二つの影に追突され、ディケイドは呻いた。よろけた拍子に、追突してきたものが見えた。アビソドンが二体の鮫になっている。一匹は一般的な鮫だが、もう片方はシュモクザメに似ている。
「契約モンスターの数には制限がないのか！」

「ああ、契約のカードが複数あればな！」
すぐさま一体のホオジロザメに戻ったアビソドンに対し、二人は背中合わせになる。もしまた分離したならば、今度はアビスも仕掛けてくるはずだ。
「そっちが深海の鮫なら、こっちは音速の鮫で行かせてもらうか」
ディケイドは何かを名案思いついたのか、ファイズの姿が収まったカードを切った。
「ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ、ＦＡＩＺ！」
彼の世界で出会った巧と同じように、ディケイドの上をマゼンタ色の光が走る。光の線がφの仮面を形作った時、黒金の装甲を持つ戦士へと変身した。腰にディケイドライバーを残して―。
「更に、こいつだ！」
もう一枚、今度はバトルモードのオートバジンが描かれたカードを切る。
「ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ、ＡＵＴＯ－ＢＡＪＩＮ！」
瞬間、颯爽と現れたマシンディケイダーが変形し、変色までしてオートバジンへと変身した。オートバジンはディケイドと龍騎のカバーしきれない範囲を守るように、堂々と仁王立ちした。
「そいつが士の契約モンスターか？」
龍騎の頼もしげな声が響く。ディケイドは仮面の下で眉をひそめ、顎をしゃくった。
「違うな。こいつは俺の相棒だ」
ドラグレッダーが最初にアビソドンをけしかけ、ホオジロザメは二体のサメに分離した。アビスラッシャーはオートバジンの前に、アビスハンマーは龍騎の前に。アビス本人はＤ－ファイズの前にそれぞれ立ちはだかった。
Ｄ－ファイズが走り出すと、またも複数水の刃が放たれた。それでも進行方向を変えないのは、切り払わねばならない刃を最小限に抑えるため。他の水刃はいわば牽制のようなものだ。頭目掛けて迫る刃を破壊し、足元を狙う刃は歩幅を変えてかわす。差し向けた刃に

交わるように、アビスセイバーが金属音を響かせた。
「貴様は特に気に入らない。後からライダーバトルに加わったくせに……！」
「そりゃ悪かったな。だが抜けたくても抜けられないんだ。龍騎もな」
「そういうこと！」
龍騎の相槌と同時に、刃を弾き返すようにして距離を取る。
謂われがないわけでもないが、勝手に恨まれてもこちらはどうしようもない。神崎の決めたことを変えられるような影響力はないのだから。
「そうか。なら、その場所を奪い取るまでだ」
アビスそう言ったかと思えば、ハンマーがスラッシャーに加勢してオートバジンを吹っ飛ばした。そのまま二体はアビソドンになり、ノコギリ状の牙を剥いて突進してきた。
「ぐっ！」
「ってぇ！」
素早さもさることながら、巨体の生み出すパワーは尋常ではない。が、合体している間は二体同時に撃破するチャンスでもある。
「仕方ない、取っておきを使う！」
「ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ、ＦＡＩＺ　ＡＣＣＥＬＥ！」
「ならあのライダーは俺に任せろ！」
龍騎はオートバジンの援護を受けながら、アビスへと向かって走った。水刃はオートバジンの盾に隠れて避け、確実に距離を詰めていく。
「ＳＴＡＲＴ　ＵＰ」
後ろで響いた音声を聞いた時、龍騎もアビスもＤ－ファイズの姿を見失った。本家譲りの最大の武器、アクセルモードに入ったからだ。
複数の紅い三角錐がアビソドンを捉え、宙に縛り付ける。それを見て焦ったか、アビスは契約モンスターの描かれたカードをバイザーに通した。

「ＦＡＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ」
アビソドンは三角錐を振り払おうと、頭や尻尾を滅茶苦茶に振り乱した。
しかしポイントマーカーの照準は外れず、暴れるアビソドンの体について離れない。
「くそっ、させるか！」
アビスは龍騎を突き飛ばし、ポイントマーカー目掛けて水刃を放った。だが非情にもポイントマーカーは消えず、龍騎とアビスが見ている前で多段クリムゾンスマッシュが炸裂した。
「ガアアアッ！」
「ＲＥＦＯＲＭＡＴＩＯＮ……」
高熱の閃光に焼かれ、アビソドンがのたうち回って地面に横たわる。その二三歩手前にＤ－ファイズが着地し、像がブレてディケイドに戻った。
「すっげえ……」
龍騎が呆然と見守る中、アビソドンの合体が解かれ、二体の鮫型モンスターに分離した。アビスハンマーはなんとか浮き上がろうとしたものの、力尽きてそのまま粒子として崩壊してしまった。そこに残ったアビスハンマーの命とも呼べる光は、宙で出番を待っていたドラグレッダーに喰らわれた。
アビスラッシャーは相棒が消えたことで浮き上がる気にもならなかったのか、じっとその場で佇んでいた。
「お前の力はこれで半分になったはずだ。大人しく棄権した方が身のためだぞ」
「黙れ！　諦めてたまるかよ……もう少しなんだ、もう少しで！」
セイバーの鋭い先端が仮面を掠めた。更に右、左となりふり構わず刃が向けられ、ディケイドは防戦一方になる。
士とて、叶えたい願いがある。それこそアビスのように必死になるほど、自身の出自と記憶を知りたいのだ。だから。
だから、反撃に出ようとライドブッカーをアビスに突き立てようと

振り払ったのだ。それがセイバーとかち合い、軌道がずれてアビスの腹部に当たるとも思わずに。

いとも容易く、ぱきんという音がした。ホオジロザメの紋章がひび割れ、その中心に剣先が埋まっている。それを認識した途端、アビスは明らかにうろたえ出した。

「なっ……こんなに簡単に壊れるものなのか!?」

ディケイドは思わず後退りした。アビスの鎧は、その間にも無数の粒子となって消えていく。

「い、嫌だ！　消えてなるものか……！」

アビスは一目散に駆け出した。その後を、ようやく起き上がったアビスラッシャーが追いかけていく。鋭い牙を剥き、主人のアビスを飲み込もうとするかのように。

「ヤバい！」

龍騎が叫んだと同時、ドラグレッダーがアビスラッシャーに火球を吐いた。邪魔をされた怒りからか、ノコギリザメは標的を赤龍に変えた。ワケのわからぬまま、ディケイドも深海の鮫を倒すべく衝撃波を飛ばす。

神崎はごく簡潔にしか語ってはくれなかった。仮面ライダーになった者には、生か死しかないと。それはまさか、こういう意味だったのだろうか？

ドラグレッダーは長い体をスラッシャーに巻きつけ、鮫肌にしつこく噛みついていた。スラッシャーはノコギリ状の牙で切りつけようと抗うが、赤龍が締め付けているために体が曲がらずにいた。

「いっけぇぇぇ！」

龍騎はドラグクローを何度となく突き出し、相棒に合図した。ドラグレッダーはそれに呼応して、連続で火球をぶつけていく。激しい猛攻に続く猛攻により、アビスラッシャーは悲鳴をあげて光の粒子と散った。

「あいつはどこに行った？」

辺りを見回しても、アビスに変身していたと思わしき人物は見つか

らなかった。龍騎は「えっと……」と躊躇うばかりで、どうにもはっきりしない。

嫌な予感がする。先ほどアビスラッシャーは契約したはずのアビスを襲おうとしていた。ならば、ミラーモンスターとはもしかすると。

「良くやってくれた、ディケイド」

と、いつの間にか神崎士郎がそこに立っていた。ほとんど無表情と言ってもいい彼が、今は少しばかり機嫌が良さそうに見える。

「アビスも脱落してすぐ俺に逆らってな。邪魔が入って見失っていたんだ」

「お前っ……！　なんで士に教えなかったんだ！」

龍騎が掴みかからんばかりの勢いで詰め寄る。神崎はその途端に瞬間移動し、二人より少しばかり高い位置に立った。

「それはデッキを失ったライダーの末路か？」

「ああそうだよ。一体どうして！」

「聞かれなかったからな」

しれっと、何でもないことのようにのたまう。それもまた感情のこもらない、淡々とした応えだった。

「そんな理由で……そんな理由で誰かが死んでもいいってのかよ！」

龍騎はドラグクローを振りかぶった。ドラグレッダーは命ざれるまま、空中へ舞い上がった。そして深々と息を吸い込み、神崎へ火球を吐き出した。神崎は動かなかった。代わりにゴルトフェニックスが翼を広げ、火球を真っ二つに切り裂いてしまった。

「真司……」

予感は当たってしまった。ミラーモンスターとの契約条件は、餌となる命を定期的に食べさせること。それが破棄されれば、ライダー自身が食われるのだ。

龍騎はハッとしてディケイドを見た。仮面のせいでよくわからないが、どことなく戸惑っているようだった。

「そうか。ドラグレッダー、お前も……」

龍騎が手を出したにも関わらず、神崎は全く反撃に出てこなかった。

それどころか独白する声に僅かな寂しさを滲ませ、姿を眩ませた。
龍騎の鎧から粒子が散り始める。制限時間が近づいているらしい。
ここに長居してはいられない。
「帰るぞ、真司」
「あ、ああ……」
二人の会話もそこで途切れた。後には静けさだけがその場に残り、
終わった戦いの虚しさを強調していた。

第15話　譲れぬ願い　―？―

白と黒、対の色がぶつかり合う。細身の剣が圧されるかと思えば、難無く拮抗を保つ形となった。二人は互いに弾かれあうようにして距離をとった。

キバーラの魔皇力に満ちた鎧は、女性であるが故の足りないパワーを補う機能を持つ。だからこそ夏海は力負けを心配することなく斬りに行ける。「仮面ライダーキバーラ」は、一人と一匹のコンビネーションあってこそのライダーなのだ。

肩と腰の翼が大きく展開し、複数の風刃を放つ。ナイトはマントを広げてそれを打ち消し、その陰からダークバイザーを突き出した。それを受け流すようにクルリと身を翻し、向き直る勢いを利用して斬りつける。黒いマントに火花が散るも、踏み込みが浅く弾くことはできなかった。

「最初の『あいつ』よりはマシなようだな」

ナイトは半ば感心したような口ぶりで言う。その傍ら、バイザーに蝙蝠の描かれたカードを装填した。途端、ナイトのマントが切り離されたように外れ、ダークウイングへと戻る。グライダー並の翼から強烈な超音波が発生し、庇おうとした腕諸共吹き飛ばされた。やはり一筋縄ではいかない。畳まずにいた翼で少しばかり衝撃を和らげたものの、かなり痛みが残る。だが夏海は弱音を吐いたりしない。今は仮面ライダーキバーラなのだ。そして彼女自身の想いをナイトに伝えねばならない。剣を交えてしか通じない物事がある、とどこかの誰かが言っていた。それが正しいかどうかはわからない。それでも、夏海が本気を伝える手段は今のところこれだけだ。

「私にも、意地がありますから」

言ってキバーラは剣を掲げる。魔皇力が剣を変質させ、怪しく光を灯す。キバーラがそれを振り下ろせば、光が鞭のように伸びてしなった。ナイトはひらりとそれをかわす。通り過ぎた鞭はそのままダ

ークウイングを捉え、縛り上げた。
ベルトを破壊してしまうと、秋山がダークウイングに襲われる可能性がある。だから夏海は先に契約モンスターを倒し、それからベルトを破壊するつもりでいた。みしみしと音を立てるダークウイングに、初めてナイトが焦りを見せた。この世界の仮面ライダーにとって、契約モンスターは力そのもの。失えばまた得るに苦労を強いられる。
しかし、ダークウイングが怒ったように体を螺旋状に縮め、勢いよく回転し始めた。その回転の速さはまるで電動ドリル並みで、光の鞭は瞬く間にひき千切られた。
どちらにせよ、まだ弱らせ足りなかった。まだ戦いは始まったばかりだ。
キバーラは剣の光を鎮め、自身に言い聞かせた。
ダークウイングばかり狙ってもいられない。ナイトがダークウイングを控えさせてしまえば本末転倒だ。あくまで理想だが、同時に撃破した方がいいだろう。そのためには、もっと力が必要だ。
「力を貸して下さい、サバタ！」
今度は胸の前で剣を掲げた。その声に呼応するように異空間が開ける。飛び出してきたのは山吹色をした二対のダガー。それが一つに融合し、人型をしたものへと変化していく。
「させん！」
人型が完全な姿を取る前に、ナイトが切りかかってくる。そんなナイトを阻止すべくか、人型のものから鋭い電撃が迸った。そうして電気の壁が互いを完全に分断した時、人型の輪郭がはっきりしてきた。頭部には鳥のクチバシを象る仮面。その奥に宿る瞳は電撃と同じ色だ。胴体はカナリアのようにも、ダンデライオンのようにも見える。そして何より特徴的なのは、引きずるような長さの、翼を模した袖だった。
鳥人は電撃の壁からキバーラに振り返ると、艶やかな唇をほんのり緩めた。キバーラは一つしっかりと頷くのみだった。

「さあ、あたしが来たからには飛ばして行くよっ！」
鳥人―サバタはバックステップすると、キバーラの体に浸透するように消えた。それに併せてキバーラの複眼は山吹に染まり、鎧もどこか電気を帯びたように形状を変えた。電撃の壁が消えた時には、キバーラの得物は二つのダガーに変わっていた。
キバーラ『サバタフォーム』。素早さと動体視力に秀でた形態で、サバタの力でもある雷の属性をも宿す。
山吹色のキバーラが地面を蹴る。瞬間ナイトの背後に回り、踵から飛び出す爪を叩き込んだ。体勢を崩したそこへ一回二回と斬りつけ、背中側に傷が生まれた。立て直したナイトの刃を片手でいなし、空いている手で仮面を捉える。傷こそつけられなかったのだが、明らかな動揺が見て取れた。
甲高い鳴き声が聞こえた。かと思えば、ダークウイングの突進に弾き飛ばされる。山吹色の翼で羽ばたいて勢いを消し、獣のように体を屈めた。ナイトの雰囲気が再び静かなものに戻ったからだ。スピードが速くても、夏海の経験は恐ろしく低い。攻防のタイミングを誤れば負ける。
「ＴＲＩＣＫ　ＶＥＮＴ」
「お前の本気、確かに感じたぞ。今度は俺も見せてやろう」
ナイトはカードを装填しながらそう告げ、三人に分身した。それはディケイドの持つカード、ＩＬＬＵＳＩＯＮと同じだろう。実体を伴う影だ。
キバーラは敢えてそのうちの一つに突撃した。それはバイザーに難なく阻まれる。後ろから迫る別のバイザーは翼が受け、斜め向かいのナイトへ放った。
「あうっ！」
三方向から衝撃波に襲われた。崩れ落ちる中で三匹に増えたダークウイングの姿が見えた。迫り来る脅威を払うべく電流を走らせる。吹き出した雷の波は二匹を捉えてかき消した。
首にヒヤリとした感触。本物か虚像か、ナイトの銀剣があてがわれ

ていた。
「どうした、その程度か？」
キバーラはとっさに刃を掴み、手加減なしで電撃を浴びせた。ナイトは黒い煙のように立ち消え、跡形もなくなった。残りは本物ともう一つの虚像のみ。
少しばかり息が切れている。キバーラが立ち上がるのを待っていたのか、二人のナイトが剣を構えていた。
剣先とダガーが不協和音を奏でた。フェンシングの試合の如く、研ぎ澄まされた突きを繰り出してくる。ダガーにとって必要な距離を取らせない気だ。
「まだ、です！」
先の問いに答えるように、キバーラは高く飛び上がった。華麗なサマーソルトは剣を奪うだけに留まったが、猛攻の届かぬ高所に避難できた。
ダガーをクロスさせ、電子の量を調整する。少しでも確実にナイトに当てられるように。超音波で足場が攻撃されたが、崩れるほどには破壊されない。
ダガーの刃から何かの弾けたような音がした。かと思えば、眩い光が視界を覆った。巨大な爆発音で耳もやられ、キバーラは目標を見失う。
雷を起こすのはできれば避けたかった。高すぎる視力を閃光に奪われれば、身の危険は増す。それでも起こしたのは一種の賭けだった。無音の空間が続く。一時的な盲目に陥ったキバーラに、音もなくダークウイングが口蓋を開けて迫った。
キバーラは瞬間的に足場から飛び降りた。微弱な電磁波を察知したサバタからの指令であり、夏海の判断ではなかった。それが命運をわけたのかもしれない。視力の戻りかけた夏海の目に、黒いドリルのようなものが映った。
「あああああっ！」
まともに飛翔斬を受けたキバーラは床を削りながら吹き飛ばされ、

夏海の姿に戻った。痛みで動けずにいる夏海に、多少ふらつきながらナイトが歩み寄る。あと少しで剣も届くというところで、サバタが再び姿を現した。

彼女も無傷というわけではなかった。キバット族の鎧に融合するということは、少なからずともダメージを共有するということでもあった。

「夏海を殺すなら、あたしをやってからにしな！」

サバタは唸るように叫んだ。単なる袖でしかなかったそれは、いつの間にか鋭い翼に変わっていた。

「大丈夫、です。秋山さんは……そんなこと、できる人じゃありません」

しかし、思いもよらない人物から答えが返ってきて、サバタは思わずたじろいだ。ナイトもため息を吐いたかと思うと、腰のバックルからカードデッキを外し、仏頂面のまま夏海に手を差し伸べた。

夏海は弱々しく微笑むと、その手を取って身を正した。

「ほらね。私の言った通りでしょう」

まるで何もかも見通したかのような言い種に、蓮は益々不機嫌を露わにした。

―巡回する看護婦の姿もない廊下に、銀色のオーロラがかかる。その中から夏海と蓮、そしてサバタが現れると、オーロラは誰にも目撃されることなく消えていった。夏海よりずっと大人っぽいスタイルで、身長もモデル並だ。怪人態の姿に似ているドレスがとてつもなく目立つ。

「あれ？　士君たち、まだ戻ってきていないみたいですね」

人っ子一人いない病院の廊下を眺め、夏海は訝しげに首を傾げた。

蓮は一瞬ガラス窓を見つめたが、何の収穫も得られなかったようだった。

「相手がただのモンスターじゃなかったんだろう。ここで死ぬよう

な奴なら、それまでだったということだ」
「お前な、どうしてそうトゲのある言い方をするんだよ」
サバタの目が鋭く尖る。そこで掴みかからないのは夏海の意志を尊重してだろう。しかし、夏海はサバタの危険な指先を制した。
「士君なら心配ありません。それよりも、秋山さんは私に何か聞きたいことがあるんじゃありませんか？」
蓮は目を瞠った。
実のところ、蓮は夏海の経験値を甘くみていた。故に先の戦闘で後手に回ることもあった。それを打開するだけの実力はあったが、改めて夏海の芯の強さを知らされたようだった。
「確かめたいことがある。ディケイドに『世界』そのものを破壊する力はあるのか？」
夏海は目を奪われたように蓮を見上げた。その言葉の意味が瞬間的には理解できなかったのだ。
「それは、ミラーワールドについて言っているんですね」
蓮の指す「世界」。この他にはならないだろう。
彼には譲れぬ願いがあるらしかった。少なくとも、他者の命を犠牲にしてでもと思うほどの。その願いを叶える手段があるミラーワールドがなくなってしまえば、戦いの意義を失う。
だから蓮はディケイドを倒そうとしたのだろう。ミラーワールドを壊させないために。
―だが。
「もし仮にそんな力があるとしたら、もうこの世界は存在していませんよ」
それこそ盲点というべきだろう。蓮ほどの人間ならば、それに気付いてもおかしくはなかったはず。それだけ、彼が追いつめられているという証でもあるのだろうが。
「……確かにお前の言う通りだな。やはりあれは、俺の気のせいじゃあなかった」
―気のせい？

何のことだろうと夏海が尋ねる前に、遠い空の上に何かの影が見えた。その影は鏡の中から現れ、無数の群れを成して飛び交いだした。

「あれは一体……！？」

「ぼやぼやしているヒマはない。急いであそこに向かうぞ！」

休む間もなく訪れたそれに、蓮は迷うことなくのたまった。その足は間違いなく病院の外へ向かっていた。

夏海の見込んだ通りだった。巧がそうだったように、蓮も士に似た部分があると。完全には捨てきれない、彼本来の優しい気持ちが。だから、少し申し訳なくなってしまった。

また一つ、大切なことを言えなかった。それだけではない。そのことは、士にさえ言っていない。それが余計に罪悪感を煽り、抑えきれない喜びもすぐに消えてしまった。

「……私も、行かないと―」

夏海は自分の頬を軽く叩くと、気持ちを切り替えた。今するべきことは、街中に現れたミラーモンスターを倒すことだ。

見えなくなった蓮の背中を追うべく、夏海は黒い影の蠢く最中へと駆け出した。

鏡の中から現れたものに、粗方予測はついていた。以前見たヤゴ型のミラーモンスター、シアゴーストだ。しかし、街中を埋め尽くしていたのはそれではなかった。強いて言うなれば、それは青いトンボ。まるでシアゴーストが羽化を果たし、現実世界に適応したかのようだった。

そう、それが問題だった。この青いトンボの群れは、全くミラーワールドに戻る気配がなかった。

「何なんですかこれ……！」

あまりにおぞましい光景に、夏海は背筋の凍る思いだった。

「夏海！」

「夏海ちゃん！」

この事態をどこかで知り得たのだろう、士と真司もこの青い群れの中に現れた。彼らがいつミラーワールドから出たのかはわからないが、今やそんなことを気にしている場合ではなかった。

このままでは、街中が青いトンボに食い尽くされてしまう。

「お前ら。帰ってきたばかりで悪いが、キリキリ働いてもらうぞ」

士は冗談めかしたように言っているが、真司も蓮も初めから答えは決まっていたらしい。二人とも互いに頷いた瞬間、自動車のドアミラーを利用してバックルを出現させた。

確かに夏海は他の三人に比べ、若干の疲労を残していた。けれどもこの無数のモンスターの前では、万全な体調でも大差はないだろう。いつ駆逐できるかもわからず、いくら増えていくのかもわからないのだから。

「当然です。無関係の人たちまで、巻き込むわけにはいきません！」

夏海はキバーラを手に取った。白い翼の羽ばたきの後に、仮面ライダーキバーラが降臨する。それは、長い長い戦いの始まりの合図だった。

ライダーバトルが終わるその日まで、残りあと1日―。

【番外】オリジナルキャラクター設定集　－サバタ編－

オマケと致しまして、決定稿版のオリジナルキャラクター紹介をします。このキャラクター以外にも名前のあるキャラクターを登場させる場合は、番外編として紹介します。

【名前】サバタ
【種族】ハルピュイア
【性別】♀
【性格】
一人称は「あたし」。さっぱりした性格で、典型的姉御と言える。
【特徴】
鳥らしく視力が高く、聴覚にも優れている。身軽で身のこなしも速い。モチーフはカナリヤとタンポポ。
腕は翼と鳥の足の二種に変化させることができ、状況によって使い分ける。
固有の属性は電気。大気中の電子を操作して雷を発生させることもできる。しかし最大の武器である視覚や聴覚を保つ意味でも、遠距離向きの攻撃方法である。
【備考】
ハーピーやセイレーンの伝説の元となったハルピュイア族の最後の生き残り。ガルルたちと同じように最後の一人になった時、過去キングに封印されて長い間眠っていた。その後渡たちがキングを倒したことで若干封印が弱まり、いくらかは外界の情報を掴んでいた。本編では確定していないが、たまたま封印の近くに立ち寄った夏海とキバーラに声をかけ、封印を解除してもらった。その恩に報いるために、アームズモンスターとしてキバーラに従っている。
変化する武器は二刀流用ダガー。サバタの属性である電気も帯びて

いる。
投げナイフのように使うもよし、接近して舞うように斬りつけるもよしと割と可変長のある武器になっている。
サバタ自身が戦う場合には、鋭利な羽を投げつける遠距離型、翼全体を鉄扇に見たてた近距離型とこちらも状況で使い分けることができる。

第16話　それぞれの願い

正当防衛、という言葉がある。それを理由に納得できる人間は、果たしてどれくらいいるのだろうか。間接的にでも、人が死ぬ原因を作った場合には。

少なくとも士の心は凪いでもいなかったし、荒れてもいなかった。ただ空っぽな何かがあるだけだ。

記憶を失う前はどうだったのだろうか。誰かの命を奪うようなことをしていたのだろうか。

改めて士は自身を全く知らないという事実を知らされた気がした。いずれにしても、仮面ライダーアビスは死んだ。もうこの世にはいない。ミラーワールドで、誰も知らない場所で消えていった。

なんとなく、ライドブッカーを見てみる。さっきまではとても気持ちが悪い感覚があったのだが、今は全く感じない。

あの感覚は一体何だったのか。正体の掴めない混沌としたそれを知りたかったのに、理解する前に完全に消滅してしまったようだ。

しかし、やはり落ち着かない。過去を知らないからか。罪の意識があるからなのか。考えても考えても答えはでない。

夏海にどんな顔をして会えばいいのだろうか。それに栄次郎には。

そんなことばかりが頭に浮かぶ。

「あのさ……」

声をかけられるまで、真司が側にいることをすっかり忘れていた。

いや、そもそも眼中になかった。

真司は無言で緑茶の缶を差し出していた。わざわざその辺りで購入してきたと見える。

士も口を結んだままそれを受け取り、プルタブを引く。直に伝わる熱と飲み口からの湯気に、そういえばこの世界は冬だったなと思い出す。

しばらく沈黙が続いた。真司は律儀にも何かしようとそわそわして

いるが、結局何もしていない。それが逆にありがたかった。気を使った言葉なんて言われたら、自分がどうなってしまうかわからない。

何が違うと言うのだろう。

ファイズの世界では、元人間の怪人を倒した。元人間の、心は人間な怪人と共に協力した。そしてこの世界で倒したのは、人の姿をした怪人だ。

何も違わない。どちらも人間だった。だったらどうして違う反応をするのだろう。

自分が、わからない。

「今日さ、桃井さんがデートに行くんだ。あっ、桃井さん覚えてるか？」

真司は何の脈絡もなく話を始めた。とりあえず覚えていたので、適度に相槌を打っておく。

「デートの相手、色々と忙しい奴なんだ。ちゃんとデートできてるといいんだけど……」

真司の話は尽きない。

そのデートの相手が使用人にしている（らしい）男が、餃子の腕を誉めてくれただとか。デートの相手とはわりと気が合うから、邪魔が入らなければいいだとか。

ふと空を見上げる。冬の寒空に浮かぶ雲は、風に流されていくだけだ。決して一つの形のままで留まらない。

そっと二眼レフに触れてみる。写真を撮る気分にはなれなかったが、何だか落ち着くような気がした。ずっと肌身はなさず持ち歩いているからか。

街中の人々も、誰かが死んだことも知らずただすれ違っていく。自分の向かうべき場所に、迷いもなく。

そうだ。止まっていても、何も変わらない。この旅は何のための旅だった？

記憶を取り戻したいとは思う。ディケイドライバーを、ひいては世界を守るためというのも、約束したのだから守りたい。

それに、それにだ。
「真司」
「えあ？　な、何？」
急に話を遮られ、真司は煮え切らない声をあげた。何を気掛かりにしているのか、若干おどおどしている。
さしずめ、俺を怒らせたんじゃないか、ってところか。
そんなものは杞憂に過ぎない。むしろ何の励ましにもならない慰めの言葉よりも、ずっと気が楽だった。
「俺はまだ、自分のことがわからない。だが、お前が俺を信じるというなら……俺はそれを信じる」
「……士！」
真司の目が輝いた。
後悔なのか、戸惑いなのか。そんなことはどうでもいい。
受け止めなければならない。今さっき、確かにあった命が散っていったことを。直接か間接かに関わらず、その命を奪ったという業を背負うのだということも。
それに、こんなお人好しが信じてくれるのなら、自分も捨てたものではないと思いたい。士の過去に、例え許されない過失を犯したという事実があったとしても。
―その矢先に起きたのが、まさかミラーワールドの崩壊だったとは。
最初に何かおかしいと気付いたのは真司だった。耳なりとして響き渡るその音が、どこか遠くから聞こえてくるようで。音は士たちから離れた、それも遥か上空の方から発生していた。それを知らせてくれたのは、誰からとも定かでない騒がしい声だった。
街で一番目立つであろう高層ビルに、おびただしい数の繭が映り込んでいた。その繭のいくつかはすでに破れており、そこから出てきたであろう青いトンボ型の怪人が我が物顔で人間を浚っていた。しかもそれだけではない。このミラーモンスターは、ミラーワールドに戻ることがなかった。
「ウソだろ……何でモンスターがミラーワールドに戻らないんだ！

？」

「ミラーワールドが、崩壊を始めたのね……」

それまでどこに行っていたのか、優衣が現実世界に現れていた。あの戦いの邪魔にならないよう、むしろ現実世界に出ていたのかもしれない。

「ど、どういうことだよ……優衣ちゃんはどうなるんだ？」

真司は優衣がまだそこにいることを確かめようと、彼女の小さな肩に触れた。今はまだ実体を保てるようだが、士には彼女の肉体が安定を失いだしているように見えた。

「それは、もうすぐ―」

「お母さん、お母さんっ！」

優衣の言葉を断ち切って、幼い少女の悲痛な叫びが聞こえた。詳しい話を聞いている時間はなさそうだ。今すぐにでも、大元たる高層ビルに向かわねばならない。

真司は優衣に頷いてみせると、少女の居場所を求めてひた走った。

「あんたはモンスターより落下物を警戒しておけ。俺たちがなんとかする」

優衣は今にも泣き出しそうなほど目を潤ませていた。その体は、僅かながら粒子化を始めている。真司がいる前では、自分の存在を保とうとしていたのだ。これから戦いに向かう彼に、余計な心配をさせないように。

「気をつけて。レイドラグーンは見た目以上にしぶといの」

「誰に向かって言っている。俺は通りすがりの仮面ライダーだぞ」

士は周囲の人間が避難していることを確認し、マシンディケイダーを呼び出した。

龍騎、ナイト、ディケイド、そしてキバーラ。それまで交わることはあれどぶつかるだけだった相手が、今はそれぞれを守りあうように陣地をしいていた。それに、名前は聞いていても実際には初めて会うサバタだ。彼女が味方なのだと聞いた時は人間だとばかり思っていたが、なんと怪人だったとは。それでもファイズの世界で慣れたからか、あまり驚きはしなかった。

龍騎とナイトは最初から出し惜しみすることなく、相棒であるミラーモンスターを呼び出していた。今のこの状況、少しでも数を減らせる手があるならば使わない理由はない。最も、ファイズの相棒は今しばらくは使えないだろうが。

「死ぬなよ、お前ら」

「ふん……」

「士こそ！」

今ならわかる。龍騎とナイトが、真司と蓮が生き残ってこれた理由が。真司はもちろんのこと、蓮も人を殺めるようなことができない人間だったからだ。だからこそ二人は誰より信頼しあえるし、喧嘩をしてもそれを糧に絆を強められた。

士も、そんな仲間が欲しいと思った。どんな時でも、どんなことがあっても、互いに支えあえる仲間が。

「サバタ、サポートを！」

「おっし、任せなっ！」

威勢のいい、そして楽しむかのような返答。それを皮切りにするように、ドラグレッダーがレイドラグーンの一団に向けて火球を吐き出した。

一撃で数十匹の羽が舞い散った。その一方ではダークウイングが超音波を立てている。更にサバタの羽クナイがレイドラグーンに突き

立てられ、数匹が地に墜落した。
空中がこれなのだから、地上の混戦模様は酷かった。龍騎が切り、ナイトが突き、ディケイドが撃つ。キバーラの風が近寄るレイドラグーンを制限していたが、それでも網目を縫って強襲をかけてくる。転がっていく死屍はすぐに砕け散り、跡形も残らない。これは現実世界でも変わらない、ミラーモンスターの最期だった。
これはありがたかった。屍が残るばかりでは、すぐに足の踏み場もなくなるだろう。
この状況を何も知らない人間が見たならば、世界の終わりだと思うのだろう。全く面白くない冗談だ。一撃で倒せるような雑魚が、世界の脅威になり得るのだから。
いや、雑魚とも言えないかもしれない。ミラーモンスターにしては、格段に剛健さがない。それ故に通常の雑魚より一撃の重さがあり、油断すれば確実に腕や足を痛めるだろう。
空中部隊の取りこぼしを撃つ。それを切り抜けた数体は殴り飛ばした。それに龍騎やナイトがとどめを刺していく。自然に生まれたこの流れが、今は何よりも頼もしい。
「ははっ、焦らずに楽しく踊りなよ！」
サバタの電撃が走った。羽を焼かれ悶える羽虫は消えていき、その威力が尋常ではないことを物語っている。それほどサバタが強いのか、それとも羽虫が強いのか。
防御が疎かになることを危惧してか、龍騎は両肩に盾を装備している。首を守るという点に置いては、そこそこ良い位置に備えている。ドラグレッダーは疲れ知らずだ。主人の奮闘にあわせるように、時には焼き払うような長いブレスで羽虫を追い立てる。ナイトの立ち振る舞い、それはもう見事なものだ。これだけの数を前に、冷静な対処をしている。確実に仕留められるコアとも言うべき場所を攻めているのか、貫かれただけのレイドラグーンが絶命していた。
ダークウイングは小回りを利かせ、主人と同じく羽虫の一匹一匹を確実に倒していた。

キバーラの翼は休みなく動き回っている。一体ずつに集中できるようディケイドが減らしてもいるが、彼女自身の刃が羽虫を断っていた。

飛び散る羽。切断された四肢。消えていく虫たち。それでも有象無象の勢いは全く衰える気配がない。

段々キバーラの息があがってきている。なんとかこの陣営についてきてはいるが、あまり長くは持たないだろう。

「夏ミカン、キツかったら切り上げろよ！」

「いいえ、まだ行けます！」

羽虫の頭部を撃ち抜いた後ろで、キバーラが胴を断ち切る。意地っ張りはお互い様という奴らしい。これではどちらが巻き込まれたのかわからない。

ふと、陣地が狭まって来ていることに気付いた。流石の龍騎とナイトも、この混戦模様に押されて来ているようだ。

「なあ士、蓮。俺さ、やっとちょっとは答えらしいもんが見つかったかもしんない」

ドラグーンの攻撃をかいくぐり撃退しつつ、龍騎が語り出した。予想だにしなかった告白の始まりに、全員とも耳を傾けた。戦いの手を休めることはせずに。

「やっぱり、俺はミラーワールドなんか閉じて戦いを止めたい」

真司がこの答えを用意したのは、きっと3日前だろう。ＯＲＥジャーナルでの会話を思うと、そうとしか考えられない。

ナイトは何も答えることなく、吹き荒ぶ風の描かれたカードを装填し、バイザーを掲げた。

「ＳＵＲＶＩＶＥ」

ナイトの鎧が風に包まれ、蝙蝠の翼を金のラインが縁取っていく。イメージカラーも黒から青へと変わり、駆け抜ける疾風を思わせた。

「きっとスゲエ辛い思いしたりさせたりすると思うけど……。それでも、止めたいんだ」

主人の変化に呼応して、ダークウイングも青く染まってダークレイ

ダーとなった。力強く羽ばたく二枚の翼と、金色の角。ドラグレッダーが東洋の龍であるなら、ダークレイダーはさながら西洋のドラゴンのようだった。

「それは、正しいかどうかじゃなくて。俺もライダーの一人として、叶えたい願いが作れたんだ！」

龍騎の一撃が一つの道を切り開いた。そこへダークレイダーが降り立ち、ナイトサバイブがその背中乗り込む。

今や、五人の思いは一つになっていた。ここにいる誰もが叶えたい未来のために、掴みたい未来のために戦っていた。その未来が、一人一人違うのだとしても。

ダークレイダーの突進とナイトの斬撃が、固まりつつあった羽虫たちを蹴散らしていく。龍騎もカードを追加使用する間ができ、ドラグバイザーツヴァイを構えた。

「ＳＵＲＶＩＶＥ」

龍騎の鎧から烈火の如き炎が溢れ出す。あちこちに散っていく炎が虫たちを焼き、ディケイドとキバーラの負担を一時減らした。

龍騎は本格的に東洋の龍と化していた。仮面には黄金に輝く触角が生え、炎の消えた先からシャープな紅の鎧へと変わっている。ドラグレッダーは白いたてがみをなびかせ、より高らかに吼えた。

「夏海、あたしたちも出し惜しみなしだ！」

複数の落雷がレイドラグーンを貫き、キバーラに一間の猶予を作った。阿吽の呼吸の下に二人の姿が重なり、山吹色の戦士となる。

しかし彼女は召喚したダガーの持ち手同士を繋ぎ、あくまでも接近戦には持ち込まなかった。両刃剣となったサバタブレードを頭上で回転させ、竜巻を発生させる。その竜巻にはもちろん、山吹色の稲妻が巻き付いていた。たちまち上空のドラグーンたちが吸い込まれ、次々に竜巻の中へと消えた。

「ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ」

それに併せ、二つの音声がユニゾンを奏でる。これで全てを終わりにせんと、二匹のモンスターがバイクへと変形した。

ダークレイダーはナイトのマントに包まれ、触れたものを切り刻む疾風としてレイドラグーンの群れを真っ二つにした。それだけでは止まらず、縦横無尽に当たりを走り抜けていく。

ドラグランザーはいななく馬のように上半身を仰け反らせ、火炎弾を撃ちながらに羽虫たちを轢き倒していった。

後に残ったのは、最早戦いの跡のみだった。

「全く、お前ら良いとこを持って行きやがって……」

「へへっ、お前広範囲攻撃はないもんな」

ディケイドは独り言のつもりで呟いたのだが、龍騎に聞かれていたらしい。ヘアピンカーブを決めたドラグランザーの周囲には、炎のレールが出来上がっていた。その後ろからレイドラグーンが迫っている―。

「真司っ！」

思わず飛び出したディケイドの前にも、レイドラグーンが飛び降りてきた。それが忠告した脅威と思ったのか、龍騎は背後のドラグーンに気付かない。

「違う、後ろだ！」

マゼンタの弾丸を撃ち込みながら再度叫ぶ。無情にもそれより速く凶刃が閃いた。

「がっ……は、」

その瞬間、何が起きたのか龍騎は理解していなかった。左胸の肺を確実に捉えた刃の先が、黒い装甲から飛び出していた。レイドラグーンの剣に刺し貫かれたのは。

「れ、蓮……！？」

龍騎はナイトに突き飛ばされ、ドラグランザーから落ちていた。ナイトは突き出す刃を掴むと、無理やり体を捻ってレイドラグーンを斬りつけた。

彼にできた行動はそこまでだった。そして誰もが崩れ落ちるようにして倒れ込むナイトを、呆然として見ていることしかできなかった。

第17話

「蓮、蓮っ！」

龍騎はすぐさまナイトに駆け寄った。楽な体勢をとれるようカードデッキをバックルから外し、蓮に戻ったその体を抱き起こした。

「真司、携帯を！　この状況で来るかわからないが、救急車だ！」

ディケイドはまくし立てつつ二人の側で辺りを警戒した。またいつレイドラグーンが来るかわからない状況で、変身を解くわけにはいかなかった。キバーラの方もサバタとの同化をしたまま、ずっと耳をそばだてている。

龍騎は指示通り自らも変身を解除し、ポケットをひっくり返して携帯電話を開いた。

ところが真司はその手を掴まれ、通報することができなかった。それを制したのは、胸を貫かれながらもまだ力強い蓮の手だった。

「蓮？」

「何を、やっている……戦いを、終わらせるんだろう？」

蓮はそれまでに見せたこともないような、満ち足りた微笑みを湛えていた。

どうしてこんな顔ができるのだろう。自身の願いが叶わないどころか、その希望すら潰えようとしているというのに。

「何言ってんだ。お前だって叶えたい願いがあんだろ！」

真司は沈痛な面持ちで答えた。

諦めたくないのだ。いくら生き残れるのはたった一人だと言われても、彼にはそれができない。そんなところに感化されたからこそ、士も救急車を呼ぶという発想を捨てなかったのに。

なのに、いや恐らくは。蓮は自身の命が尽きようとしている、と悟っている。覚悟でもなく真実でもなく、間に合わないのだと。

「俺はもういい、もういいんだ。俺はお前を殺せない」

その言葉は、夏海が蓮に向けたものそのままの意味を持っていた。

そうでなければ、この二人はとうの昔に殺し合っていたに違いない。
「諦めんなよ……でなきゃお前、何のためにっ……！」
言葉を紡ぐ先から零れ落ちる涙。声も体も震わせる姿は、見ている士たちの方が辛かった。
それなのに、蓮は決して微笑みを絶やさなかった。
「意味ならある。お前が生き残れば……決して無駄じゃ、」
ごぷり、と鮮血混じりに咳き込む。内臓のどこか、肺か器官かが裂けているのだ。
刃に貫かれたままでは、逆に苦しみが長引くだけだ。早くなんとかしなければ。
「お前、バカだよ。俺に負けないくらいにお人好しの……」
「全くだ……お前のバカが、うつったのかもな」
どこか自嘲気味に言いつつも、後悔も何もないその幸せそうな顔は変わらなかった。そして次第に蓮の体から力が抜け、緩急していった。
遠くで悲しい声がした。ダークウイングがガラスの破片に映っている。大蝙蝠は幾度となく鳴き声を発していたが、やがてゆっくりゆっくりとガラスの奥へ消えていった。
「うっ……く、ふぅ……！」
真司は血に汚れることも構わず、蓮の力無い体に額を伏せた。　そのすぐ側には、最早意味をなさない、蝙蝠の紋章が消えた黒いカードデッキだけが残っていた。

あれからレイドラグーンの群れは、嵐が去ったかのように忽然と姿を消した。散々邪魔をされたのだ、同じ場所に留まるはずもない。士たちは騒ぎにならないうちにビル街を離れ、近くの喫茶店に身を潜めた。現場にいれば面倒に巻き込まれるだろうし、最悪このうちの誰かが人殺しの容疑をかけられることにもなる。

真司は泣きはらした跡を隠しもせず、空っぽのカードデッキを眺めていた。デッキに残るカードは契約カードと最低限の武具のみ。その武具も蝙蝠の意匠を失い、灰色にくすんでいた。

誰かが拾って、悲しい戦いに巻き込まれないようにするためか。蓮を忘れないためか。そんなことは考えずともわかった。

幸い、神崎士郎はまだ現れていない。真司の気持ちの整理がつくまでは―いや、最後まで側にいてやるべきだ。

例え真司がどんな道を選ぶことになろうとも、ライダーバトルの参加者にカウントされていないお陰で共に行ける。士には戦いを見守ることしかできないが、真司を迎える人間は必要だ。生き残ろうと思えるようにするためにも。

備え付けのＴＶでは、未だ先の惨状を報じていない。だが、それほど遠い未来でもないだろう。レイドラグーンによる破壊の爪痕はあちこちに残っている。

「続いてのニュースです。今朝方、浅倉威容疑者が倉庫街にて射殺されました」

今の報道に何かあったのだろうか。それまでカードデッキしか見ていなかった真司が、身を乗り出してＴＶに食いついた。

「浅倉容疑者は以前護送中の警官を多数殺害しており、抵抗著しい場合は射殺もやむを得ないとして―」

キャスターは延々と無感情に続けた。よくあるタイプの報道だ。日本において射殺が許可されることは稀だが、それだけこの犯人は凶悪犯と見なされているという意味でもある。

それなのに、真司はいくらかショックを受けているように見えた。

「ああ、やっと事件が一段落したのね。ようやく安心できるわ」
「そうね……。あんな凶悪犯が歩き回ってるうちは、子どもも外に出せなかったもの」
間近の席から、母親たちと思しき会話が聞こえた。その途端、真司は勢い良く席を立ち上がった。
だが、それまでだった。真司はただ無言で会話の聞こえた席を睨んでいた。それ以上は何もしようとせず、やがてゆっくりと席に座り直した。
その時、窓ガラスから最早聞き慣れた耳なりが聞こえた。モンスターではない。そこにいたのは、病院で二人の前から逃げた神崎士郎だった。
「今日が終わるまでに、俺たちの住んでいた家に来い。最後の戦いを始める」
神崎の伝言はそれだけだったらしく、言うだけ言ってすぐに消えてしまった。
しかし、これではっきりした。この世界で生き残っているライダーは、真司ただ一人になったことが。
「真司……」
士はなんと言ったらいいのかわからなかった。
むしろそれで良かったのかもしれない。夏海も極めて優しく、柔らかい声で彼の名を呼んだ。それも曇りない眼差しでいて、そっと真司の手に自身の手を重ねた。
「私たちは待ちます。真司さんのしたいようにして下さい」
真司はぐっと口角を下げた。蓮のカードデッキをポケットにしまい、再度立ち上がる。
そうして、両手で思い切り自身の両頬を叩いた。乾いた音が響き、近くの客が怪訝な目を向けてきた。
「うっし！」
それまで顔に出ていた暗い影が失せ、揺るぎのない真っ直ぐな輝きが戻った。

「二人とも、俺に力を貸してくれ。絶対に負けられねー！」
「あたしを忘れんなよ！」
真司の言葉にすかさずサバタが突っ込んだ。そんな状況ではないというのに、笑ってしまうかと思った。
けれど、それは悪いことではないと思いたい。病気や事故で人が死んだ時でも同じだ。そういう時でも、生きている人間は空腹を覚える。それを満たすために食べ、眠気に襲われれば眠る。悲しみを忘れるのではなく、受け入れていくために。
そして真司が言ったように、絶対に負けないためには、今のこの時間が必要だった。
こうして真司は変わらぬ思いを確かめ、士たちは最後の戦いの場へ赴くことにした。

旧神崎家―。不気味な静けさの中に佇むこの家は、死んだはずの兄妹が現れるとして人々に恐れられている。故にこうしてこの家に近づくのは、勝ち残った仮面ライダーのみだろう。真司はポケットに手を入れ、オーディンが映る家の窓ガラスを凝視した。そのポケットに入っているのが龍騎のものではないことは、士もわかっている。
それでも、いつミラーワールドに入るかは真司の自由だ。
彼に出会ってから、実に二日程しか経っていないことを思い出す。
巧と共闘した期間は短かったが、真司と過ごした時間もそれほど変わらない。なんとも短い間に、こんなにも濃い日を送ったものだ。

不可能だとはわかっていても、もっと早くに出会えたならとさえ感じた。

「真司。お前の戦い、一番近くで見届けさせてもらえないか？」

「え？」

「大丈夫だ、お前の邪魔はしない」

瞠目する真司を置いて更に続ける。夏海に余計な口出しをされないように、との意図もあった。

それに、もう一つ気がかりなことがある。杞憂であればいいが、用心するにこしたことはない。

「……わかった。だけど、危ないから少しは離れてろよ」

真司はようやく龍騎のカードデッキを突き出した。ガラスの向こうでバックルが腰に重なると、現実でもベルトが腰に出現する。

「変身！」

いつにも増して気合いの入った掛け声。拳を作る龍騎の数歩後ろで、ディケイドがゆっくりと頷いた。

一歩ずつ、確実に反転した世界に臨む。黄金に輝く仮面ライダー、オーディンは神々しい杖を手に待っていた。

この仮面ライダーだけは、何度倒されても蘇るのだという。契約モンスターの名に恥じないライダーだ。だが、それは単に士郎の代理人が変身しているだけに過ぎない。恐らくはこのオーディンも同じだ。

負けるなよ、真司。

龍騎の背中に意識を飛ばす。二人の仮面ライダーは契約モンスターに掴まり、少しばかり広い場所へ移動した。

それを確認したディケイドはソードモードを起動させ、誰もいない物陰に剣先を向けた。

「そろそろ来る頃だろうと思ってたぜ。お前のことだ、隙を見て奪うつもりだったんじゃないか」

「嬉しいな、僕に気付いてくれるなんて」

それまで何もなかった空間を、ディエンドのシアン色が染め上げた。

ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ、まさしくその意味を持つ効果のカードを持っていると士郎に聞いた。不可視になって相手を欺く。泥棒らしい戦法だ。

「バカ言え。てめえなんかに真司の邪魔させてたまるか」

「ふうん、ちょっと会わないうちに随分入れ込んでるんだねえ」

ディエンドはいささか不機嫌な声だった。

してやったり、だ。今まで二回先手を打たれたが、この戦いだけはそうもさせない。

「この戦いは真司の戦いだ。俺自身にだって邪魔はさせない！」

その時、ライドブッカーから独りでにカードが数枚飛び出した。ファイズの世界の時と同じように、新しい絵柄を表に描いて。そこには龍騎の紋章、龍騎の武具、龍騎自身の姿が納められていた。

別々の相手を前に戦っていても、心のある場所は同じなのだと。そう真司に言われたような気がして、士は熱くなる胸を抑えきれずにいた。

「イヤだね、熱くなっちゃって。でもせっかくだから、僕のお宝を披露してあげようかな」

「ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ、ＲＥＹ！」

ディエンドが使用したのは、全く見たことのない仮面ライダーが描かれたカードだった。

白い毛皮に鋭い爪。さながらイエティのような仮面ライダーが目の前に現れた。ディエンドライバーの音声から推測するに、レイという名前らしい。

ライオトルーパの時もそうだったが、ディエンドのＫＲはディケイドと違ってライダーを召喚するものであるようだ。つくづく、泥棒に似合いの能力だ。

レイは全くの無言で巨大な爪を奮った。剣を軸に体をずらし、そのまま相手の胴を打つ。レイはその反動で少々半身が仰け反ったものの、意に介しもせず張り手で突き飛ばしてきた。

「うおっ！」
とても人間技とは思えぬパワーに、ディケイドは思い切り後方へ追いやられた。ブロック状に詰まれた壁に叩きつけられ、崩れた石と共に落ちる。そこへ凍てつく吹雪が浴びせられ、体のあちこちが雪に覆われていく。これでは上手く身動きがとれない。
レイはそれ以上攻めては来なかった。目的はあくまでタイムベントでしかないのか、龍騎とオーディンの戦うその場へと矢先を変えた。
ディケイドは慌てて立ち上がろうとしたが、腰や腕が氷に縫いつけられていて、文字通り手も足も出ない状態だった。
「くそ、待てよこの野郎！」
幸いにして利き手は無事だった。レイの気を引こうと、刃からマゼンタの波状を放ち続ける。しかし、ＦＡのカードを使用しない状態ではいまいち威力に欠けた。
「しつこいなあ。ちょっと黙っててよ」
ディエンドライバーが向けられ、ディケイドは身を固くした。今でこそ殺気は緩いものだが、これ以上の邪魔をすれば本気で撃ってくる気だ。
遠くに見える龍騎は、既に烈火の姿に変じていた。龍と不死鳥が何度となくぶつかり合う下で、ドラグブレードとゴルトバイザーがかち合っている。龍騎は短剣を以て錫杖を払い、拳銃で黄金の炎を破った。それもすぐさま修復され、なかなか本人には当たらない。
やはり真司には気概が足りないのだ。本気で相手を殺すだけの。だがそれでこそ真司だ。
信じた道は険しく道のりは遠いだろう。それでも前に進もうと、必死でオーディンに食らいついている。―ますます邪魔させるわけにはいかない。
「黙るのはてめえだ！」
柄の部分で氷を砕き、足腰の自由を得る。ディエンドはまだ引き金を引いていない。好機を失わないうちに、後ろからレイに迫った。
やや遅れて振り返るその顔面に、左拳を叩き込む。間髪入れず斜め

に切り下ろせば、傀儡でしかないレイはひとたまりもなく消滅した。
「おっと、油断したか」
呆けていたディエンドが更にカードを切る。新たにライダーを召喚するのでなく、ディエンドの分身が複数現れた。
「っ……！」
一瞬足を止めたディケイドに、一斉射撃がみまわれた。足と肩とに激痛が走り、膝を折る。致命傷を負わされたのではないが、動かすには少し辛い。
「うあぁっ！」
聞き覚えのある悲鳴と共に、何かが隣に吹き飛ばされてきた。烈火を纏う龍騎だ。強化形態といえどもそれ以上に強敵なのだろう、彼の鎧は満身創痍だった。
「大丈夫か、真司！」
「ああ……って、お前も取り込み中だったのか」
まあな、と簡潔に答えた。
オーディンは相変わらず無傷だった。何より不気味なのは、ディエンドの召喚したそれのように感情も痛みも感じていないことだ。倒さずに勝利するのでなく、本当に倒せない可能性は否めない。
しかし、ディケイドは諦める気など毛頭なかった。龍騎の戦意をしっかりと感じられるからだ。
「お前の力、借りるぞ！」
「ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ、Ｒｙｕ・Ｒｙｕ・Ｒｙｕ・ＲＹＵＫＩ！」
カードから得た力を龍騎に伝える。瞬間、龍騎の体が大きく変形しだした。
龍騎の胴体が細く長くなったかと思えば、腕は龍の前足に。足は片方が分離して尻尾のように橋へ合体した。
ファイズの時のようにドラグセイバーツヴァイになるかと思ったが、どうやらドラグランザーに変化したようだ。
「うっそぉ、俺ドラグランザーになってる！？」

龍騎ドラグランザーは素っ頓狂な声をあげた。自身の体が信じられないのか、あちこち動かして確かめている。
本物のドラグランザーは主人が驚異的な変化を遂げたためか、戸惑ったように上空で旋回していた。
「悪いが乗せてもらうぜ、真司」
ディケイドは龍騎の細長い胴体に飛び乗った。龍騎は「ちょ、ちょっと！」と嫌がるように前足をじたばたさせた。が、目の前に迫るオーディンと挟み撃つように来るディエンドを見つけ、慌てて大空へ飛び立った。
最初は飛び慣れないせいもあって、辛くも炎や銃弾をかわしていた。そんな主人を見かねた本物が側に付き添うことで、龍騎も段々飛翔に慣れていく。
「おっしゃ、なんとなくわかってきたぜ！」
調子に乗った龍騎は口から火球を放った。そのうちいくつかは的から明らかに逸れていたが、数体の分身ディエンドが焼き尽くされた。本物も何やら楽しくなってきたようで、主人にあわせて火炎弾を飛ばした。こちらは狂いなく正確に不死鳥へとヒットした。
「これはマズいなあ。僕はおいとまさせてもらうよ」
分身ディエンドの中に紛れていた一体が、瞬時に出現したオーロラに溶けていった。本体がミラーワールドからも現実の世界からも去ったためか、分身はあっという間に消滅した。
「ちっ。海東の奴、逃げやがったか」
不死鳥の疾風をスレスレにかわした先、ディエンドが逃走したことを知る。残る相手はもはや真司の戦う相手のみだ。
「士、どうする？」
オーディンも二人を追うべくして戦いの場を空へ移し、不死鳥の背中に騎乗してきた。そこから繰り出される錫杖や烈火を、龍騎ドラグランザーはひょいひょいかわしている。
時々不死鳥の突進を食らうのは愛嬌のようなもの、既にコツは掴んだらしい。

「決まっている。不死を破壊するぞ」
「ああ。やっぱそれしかないか」
オーディンを倒さずに勝利する。そのためにすべきことはたった一つだ。彼の契約モンスターである、ゴルトフェニックスを倒すことだ。
契約者を倒すのと同じくらい難しい話だ。このモンスターは通常のミラーモンスターとは格が違う。もしかしたら、ドラグランザー以上に。
しかし、そんなことは関係なかった。二人が不可能か可能かを考えるようなこともなかった。やるだけのことをやる。ただそれだけだ。
「ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ、Ｒｙｕ・Ｒｙｕ・Ｒｙｕ・ＲＹＵＫＩ！」
読み込ませたカードが生んだ効果で、龍騎ドラグランザーが更に変形を始めた。長かった首が折りたたまれ、前足が回転してハンドルになった。腹部からは二本のタイヤが展開し、ドラグランザーの化身したバイクに瓜二つとなった。
「……で、俺が乗っていていいのか？　お前の邪魔はしたくなかったんだが」
何故か失われない飛行能力で宙を走る中、聞くに聞けなかったことを尋ねた。
カードを使っていて今更過ぎるだろうが、ディケイドの意志一つあればすぐに元に戻せる。後は真司の選択次第だ。
「当たり前だろ。俺たちで戦いを終わらせるんだ！」
ところが真司の答えはこうだった。仮面で表情など見えないはずなのに、満面の笑みが輝いて見えた。
「そうか……なら、話は決まりだ！」
ディケイドはハンドルを握りしめた。不死鳥の翼から撃ち出される火炎弾が行く手を阻むが、元から炎を巻き上げて駆ける龍騎ドラグランザーには効果がない。それまで逃げを打つことのなかった不死鳥が、この時初めて旋回した。

錫杖の放つ疾風に炎が破れる。ディケイドを狙ったもののようだが、燃え盛る盾はその程度で消えたりしなかった。
阻むものを無視するべく、ディケイドはスピードを上げた。真司の望む通りになるよう、まずは不死鳥の横っ腹に追突した。そのまま大きくUターンすれば、オーディンが物理法則に従って振り落とされた瞬間が見えた。
「今だ！」
アクセル全開に不死鳥へ激突した。烈火と疾風がせめぎ合い、互いに食い破ろうと牙を立てあう。更にディケイドが腰に収めていた刃を手に取り、駄目押しに疾風のバリアを切り裂いた。―それが拮抗を崩す一手になった。
金色の嵐が晴れ、不死鳥の体が露わになる。その瞬間を逃さず、龍騎ドラグランザーが突き抜けていった。
ディケイドは龍騎から飛び降り、人に戻りゆく彼と共に着地した。
一方の不死鳥は無傷。打つ手なしかと思いかけた時、黄金の鳥が力尽きたように墜落した。
オーディンが錫杖を突き出し、それを守るように立つ。もしくはまだ終わりではないと言うつもりか。
「真司」
呼びかけに龍騎が頷く。ドラグランザーを隣に従え、右拳をオーディンに向けた。
「もう終わりにしないか？　俺の願いは、それで叶う」
その問いの相手はオーディンではない。その向こうで傀儡を操る、神崎士郎だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2014o/

DECADE ERESIA

2012年1月14日07時46分発行